

鳥取県教育文化財団報告書 22



寄
贈

鳥取県米子市

中国横断自動車道岡山・米子線工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

上 福 万 遺 跡 II

1986



鳥取大学附属図書館



0100571900

財団法人 鳥取県教育文化財団

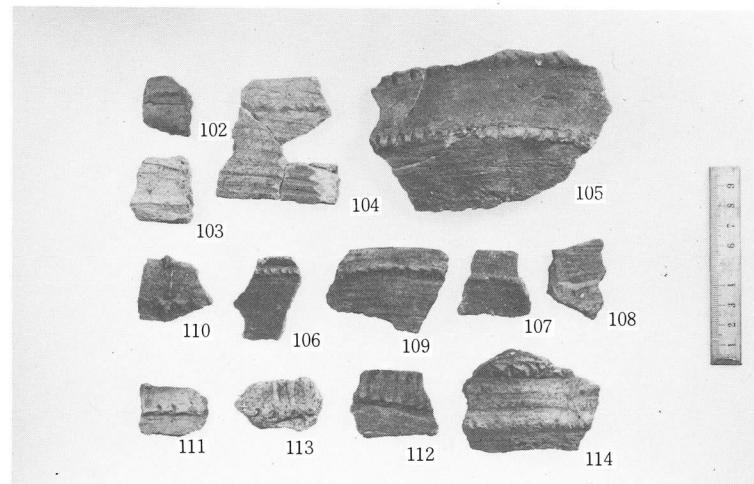
正 誤 表

上福万遺跡Ⅱ

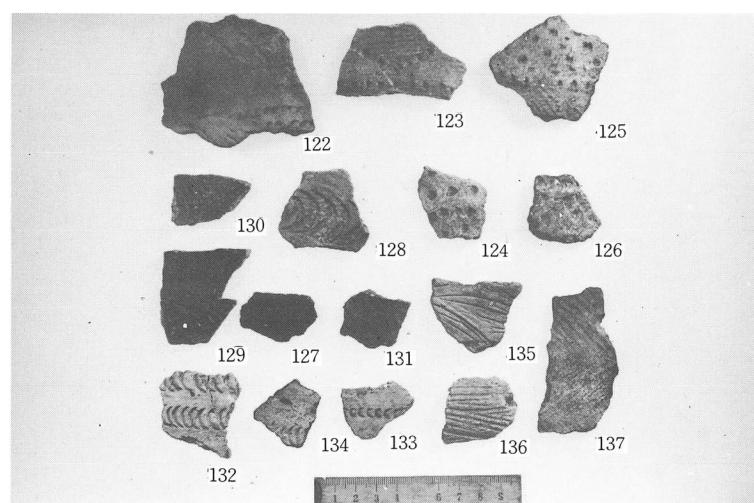
頁	行	誤	正
72	13	……を呈すると推測される。	……を呈すると推測される。F 5は 鉄剣の破片と思われる。
79	3	多きい	大きい
97	16	おこころ	みられる
99	6	鳥取県文埋蔵文財センター	鳥取県埋蔵文化財センター
99	9	庶務課長係	庶務係長

印刷の不鮮明な図版

図版14

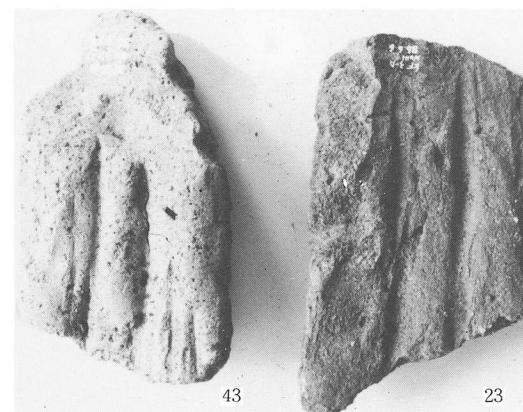


前期の土器 Z I 類A種



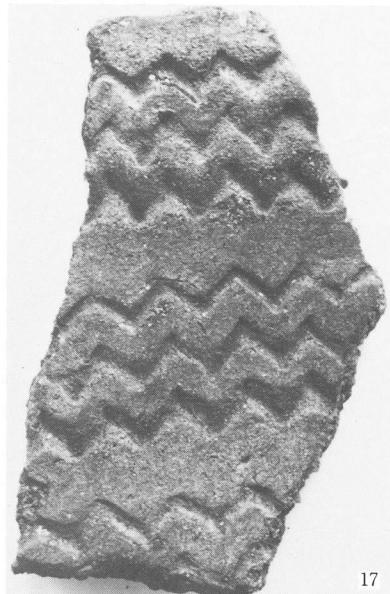
前期の土器 Z I 類B種・C種、Z II 類A種・B種

図版15





22



17

図版17



II類B種

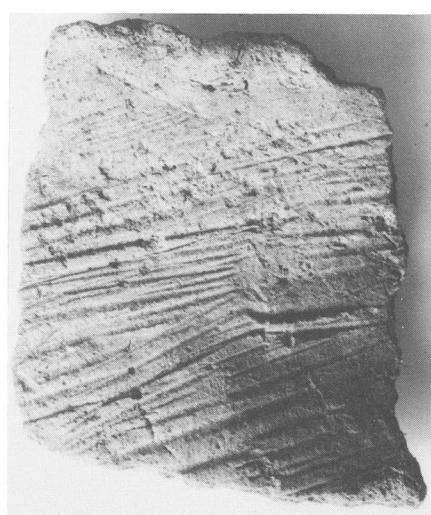


同上内面

図版18

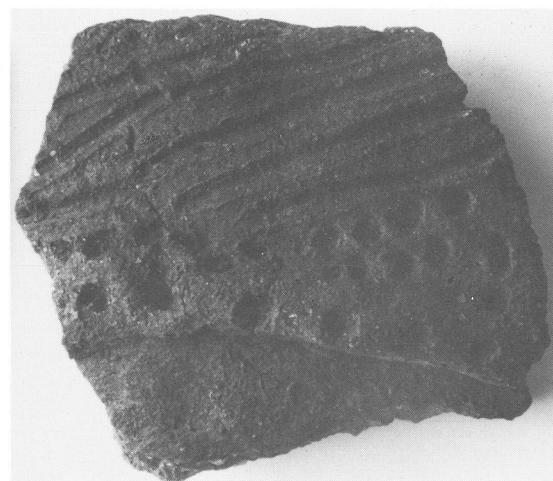


IV類(1)

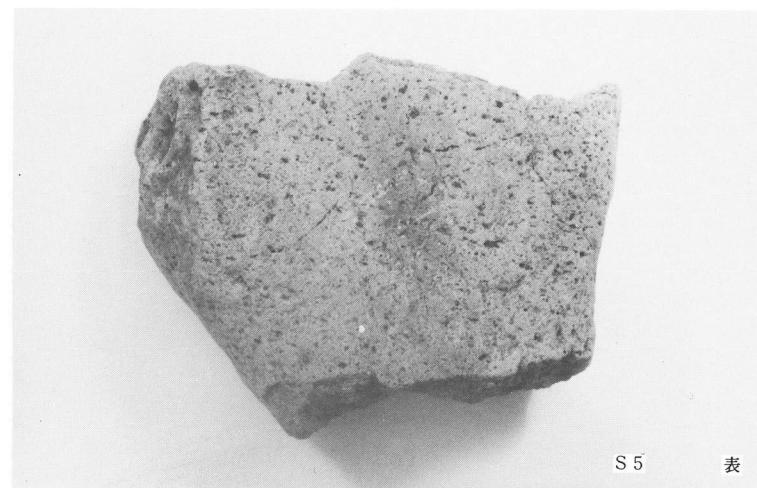


IV類(2)

図版19

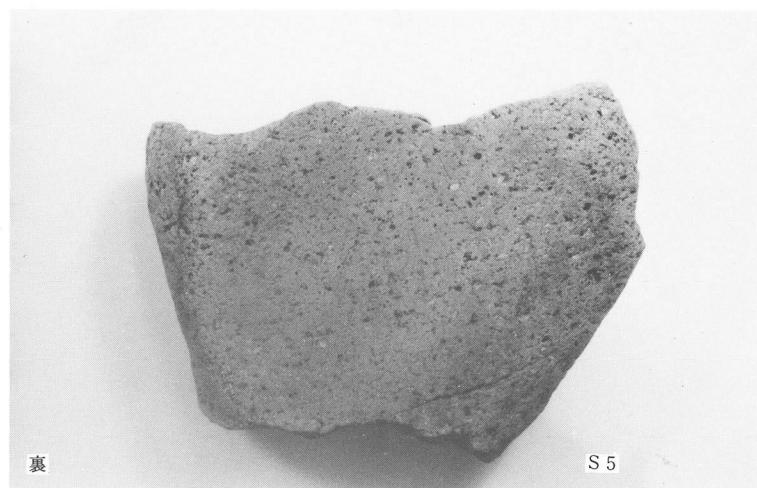


図版20



S 5

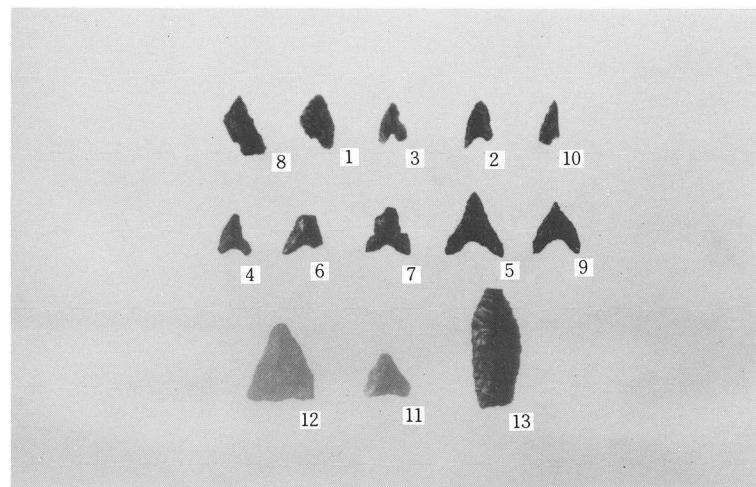
表



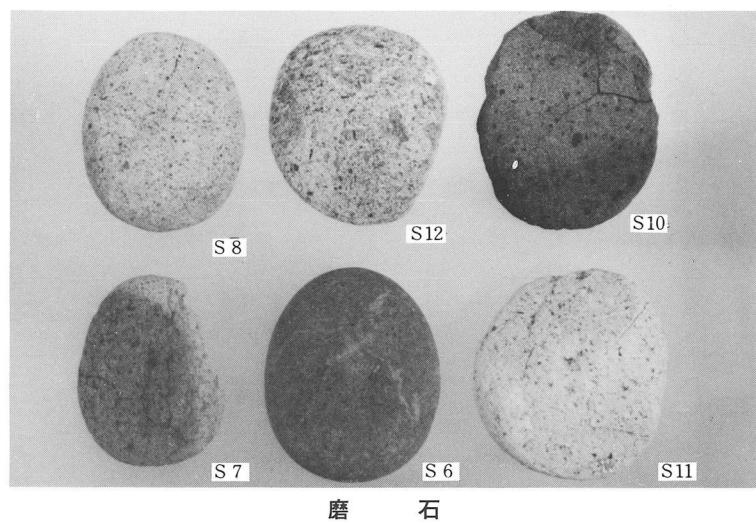
裏

S 5

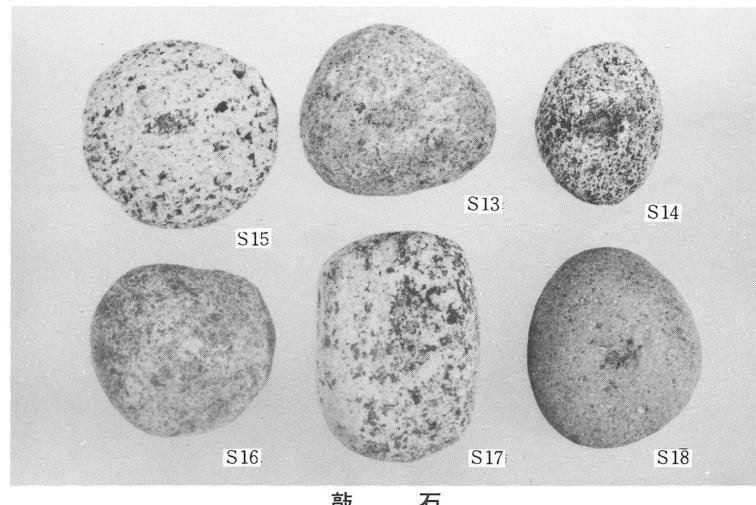
図版21



石 鏃 (Z)

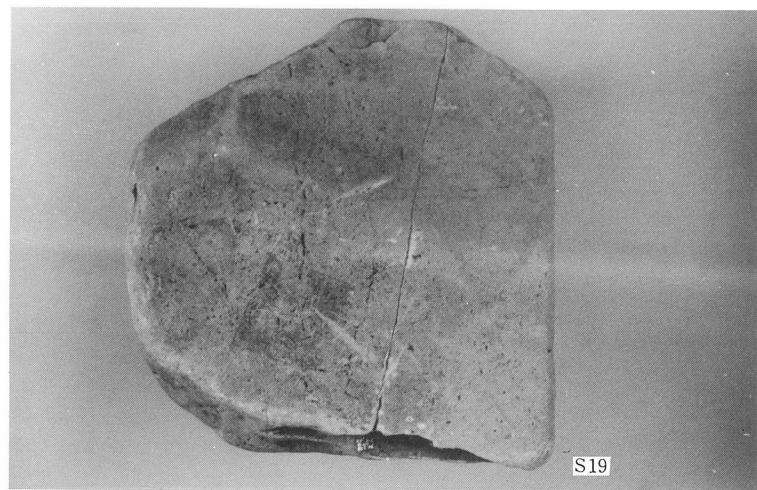


磨 石



敲 石

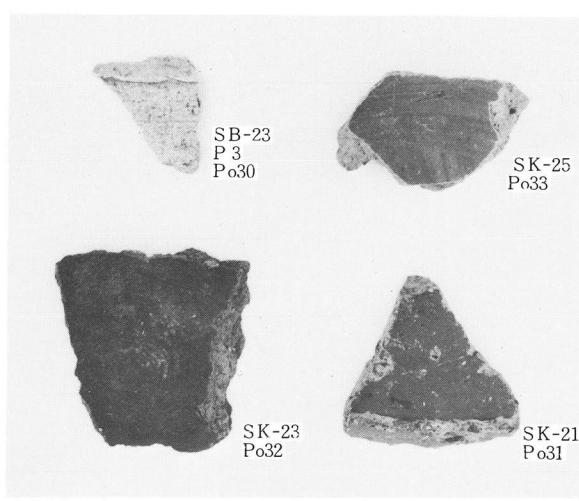
図版22



図版31



遺構外出土土器



遺構内出土土器

序 文

中国横断自動車道の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当財団が日本道路公団の委託をうけて、昭和57年8月から5箇年に亘り実施したところである。

本年度の調査は、昭和59年度に調査した米子市上福万遺跡の残り部分で、先の調査同様縄文時代及び古墳時代の遺構等が発掘された。

この調査をもって、路線内の予定された発掘調査はすべて終了したが、調査の結果は、縄文、弥生、古墳と各時代の遺構等が発見され、有意義な調査成果を納めることができた。これらの資料が、今後本県における古代史の解明に大いに役立つことを期待するものである。

このうえは、建設工事が順調に進められ、完成の暁は山陰と山陽を結ぶ主要自動車道として、産業、経済の発展に大きく寄与することを期待してやまない。

調査終了に当たり、終始調査にご配慮いただいた日本道路公団をはじめ、ご指導をいただいた方々、ご協力をいただいた関係市町並びに地元住民の皆さんに心から感謝を申し上げる次第であります。

昭和61年12月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次



遺跡より大山を望む

例　　言

1. 本報告書は、日本道路公団の委託を受けて、鳥取県埋蔵文化財センターの指導、協力のもとに、財団法人鳥取県教育文化財団が行なった「中国横断自動車道岡山・米子線」の米子地区の発掘調査報告書である。
2. この調査は、米子市上福万所在の上福万遺跡の第二次発掘調査である。
3. 赤木三郎氏（鳥取大学教育学部長）には、御多忙の所、現地における御指導、並びに石材鑑定を仰いだ。記して謝意を表します。
4. 発掘調査並びに本報告書の作成にあたっては、次の方々から多大なる御教示を賜った。
野田久男　久保穰二朗　中村徹　絹見安明　（鳥取県埋蔵文化財センター）
小原貴樹　杉谷愛象　（米子市教育委員会）
中原斉　（鳥取県教育文化財団西部埋蔵文化財調査事務所）
5. 本報告書の作成は、北浦弘人、浅川美佐子の両名の討議にもとづいて編集し、執筆は分担して行なった。執筆分担は以下の通りである。
北浦—1章1、2節、2章、4章1、2節、浅川—1章3、4節、3章、4章3節
6. 遺構の実測、図面作成は、左藤博、西田直史、杉田千津子、遠藤和子、吉岡幹江の協力を得て、調査員が行なった。
7. 遺構の実測図の浄書は、左藤博が行なった。
8. 遺構の写真撮影は、調査員が行なった。
9. 遺物の整理、実測、トレース、写真撮影は、鳥取県埋蔵文化財センターの指導、協力のもとに、同センターにて行なった。
10. 出土遺物は現在鳥取県埋蔵文化財センターに保管している。将来的には米子市教育委員会に移管する予定である。
11. 本報告書に掲載の地形図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」、「根雨」を使用した。
12. 縄文時代の遺跡分布図作製にあたり、鳥取県埋蔵文化財センターより資料の提供を受けた。
13. 調査に際し、県地区自治連合会長野坂松衛氏、森山重義氏、松原利三郎氏には、地元との調整等に御援助いただいた。記して謝意を表します。

凡 例

1. 本報告書における方位は、すべて磁北を示す。
2. 当遺跡は、前回調査時の基準杭にもとづいて10m×10mのグリッドを設定した。
3. 遺構番号は前報告書からの通し番号である。
4. 挿図中と図版中の遺物番号は、一致する。
5. 本文、及び挿図中のPはピットを表わす。
6. 本報告書における遺構記号は、次のように表わす。

J S K : 縄文土塙 J pit : 縄文ピット S I : 竪穴住居 S B : 掘立柱建物 S K : 土塙
S D : 溝状遺構

7. 遺構挿図中における遺物記号は、次のように表わす。
H : 剥片石器 S : 石製品 Z : 石鏃 M : 青銅器 F : 鉄製品 Po : 土器 (縄文土器は番号のみで表わした。)
8. 遺物表示は、次のように表わす。 石群 : 使用痕 : 石皿 :
- 磨石、敲石、石皿の磨滅範囲 : ----- 敲打痕 : ----- 過度の磨耗 : -----
9. 遺構挿図中におけるセクション・エレベーションの基準線標高はH=の記号で表わす。

目 次

序 文

例 言

凡 例

第1章 遺 跡 の 概 要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過及び概要	1
第3節 地理的環境	3
第4節 歴史的環境	5

第2章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構	11
1 集 石	11
2 土 塙	18
3 ピ ッ ト	24
第2節 縄文時代の遺物	25
1 土 器	25
2 石 器	43
第3節 遺物の出土状況	53

第3章 古墳時代以降の遺構と遺物	
1 竪穴住居	54
2 掘立柱建物	61
3 土 塙	64
4 溝状遺構	69
5 遺構外遺物	72
6 小 結	72
第4章 考 察	
第1節 上福万遺跡出土の縄文時代早期の土器について	77
第2節 上福万遺跡の性格	89
第3節 竪穴住居について	92
調査組織	99

挿 図 目 次

挿図1 上福万遺跡A区第2次調査区概略図	1
挿図2 上福万遺跡第2次調査区グリッド設定位置図	2
挿図3 1BG, 1C~2Cベルト土層断面図	3
挿図4 上福万周辺の第四系層序図	4
挿図5 上福万セクションA柱状図	4
挿図6 周辺遺跡分布図	7
挿図7 縄文時代遺跡分布図	9
挿図8 集石33 遺構図	11
挿図9 集石34 遺構図	12
挿図10 使用痕のある石1	13
挿図11 使用痕のある石2	13
挿図12 集石35 遺構図	14
挿図13 集石36 遺構図	15
挿図14 JSK-60 遺構図	18
挿図15 JSK-61 遺構構図	18
挿図16 JSK-62 遺構図	19
挿図17 JSK-63 遺構図	20
挿図18 JSK-64 遺構図	20
挿図19 JSK-62 土器出土状況図	20
挿図20 縄文遺構出土土器実測図	22
挿図21 縄文遺構出土石器実測図1	23

挿図22	縄文遺構出土石器実測図 2	23
挿図23	2 BG J Pit 1 遺構図	24
挿図24	2 BG J Pit 2 遺構図	24
挿図25	3 BG J Pit 1 遺構図	24
挿図26	楕円押型文土器(41)出土状況図	24
挿図27	I類1群 実測図	25
挿図28	I類2群A種(山形文)実測図	26
挿図29	I類2群B種①(小楕円)実測図	28
挿図30	I類2群B種②a(長楕円)実測図1	29
挿図31	I類2群B種②a(長楕円)実測図2	30
挿図32	I類2群B種②b(正円)・③(大楕円)実測図	31
挿図33	I類2群C種①(中菱形)・②(大菱形)実測図	32
挿図34	ナデ消し実測図	33
挿図35	II類A種(縦位撚糸文)・B種(網目状撚糸文)実測図	33
挿図36	IV類(沈線文)・VI類(刺突文)・VII類(無文)実測図	34
挿図37	III類(縄文)実測図	35
挿図38	特殊な土器 実測図	35
挿図39	前期の土器 実測図1	37
挿図40	前期の土器 実測図2	38
挿図41	磨石 実測図	44
挿図42	敲石 実測図	45
挿図43	砥石 実測図	46
挿図44	砥石・石斧・石錐 実測図	46
挿図45	石鏃 実測図	48
挿図46	二次加工のある剝片 実測図1	49
挿図47	二次加工のある剝片 実測図2	50
挿図48	土器出土状況図	53
挿図49	S I-15 遺構図	54
挿図50	S I-15 Pit 1 土盛断面図	54
挿図51	S I-15 遺物出土状況図1	55
挿図52	S I-15 遺物出土状況図2	55
挿図53	S I-15 遺物図	56
挿図54	S I-16 遺構図	57
挿図55	S I-16 遺物図1	58
挿図56	S I-16(Po19) 遺物出土状況図	59
挿図57	S I-16 遺物図2	59

挿図58	S B-21 遺構図	61
挿図59	S B-22 遺構図	62
挿図60	S B-23 遺物図・遺構図	62
挿図61	S B-24 遺構図	63
挿図62	S K-20 遺構図	64
挿図63	S K-21 遺構図	65
挿図64	S K-21 遺物図	66
挿図65	S K-22 遺構図	66
挿図66	S K-23 遺構・遺物図	66
挿図67	S K-24 遺構図	67
挿図68	S K-25 遺構・遺物図	67
挿図69	S D-01 遺構図	69
挿図70	Pitに伴う遺物図	69
挿図71	S D-02 遺構図	70
挿図72	遺構外遺物図	71
挿図73	縄文土器形態別分類図	81
挿図74	縄文土器集中出土地域分布図	90
挿図75	縄文遺構全体配置図	91
挿図76	古墳遺構全体配置図	96

挿表目次

挿表1	集石一覧表	16
挿表2	土塙一覧表	21
挿表3	縄文土器出土位置一覧表	39
挿表4	縄文土器数量組成表	42
挿表5	石器出土グリッド一覧表	47
挿表6	石器一覧表	51
挿表7	石器石材一覧表	52
挿表8	剝片出土グリッド一覧表	52
挿表9	竪穴住居一覧表	60
挿表10	掘立柱建物一覧表	63
挿表11	土塙一覧表	68
挿表12	古墳時代遺構出土遺物観察表	73
挿表13	縄文土器の諸特徴と文様の対応	83
挿表14	内面斜行沈線と文様	84

挿表15 内面斜行沈線と器形	85
挿表16 繩文土器相関関係表	87
挿表17 上福万遺跡出土繩文土器編年の位置付け	88
挿表18 日野川流域における豎穴住居の時期別分類表	94

付 図 目 次

- 付図1 Dot-MAP (早期)
- 付図2 Dot-MAP (前期)
- 付図3 繩文遺構配置図
- 付図4 古墳遺構配置図

図 版 目 次

- 図版1 調査地遠景（調査前、調査後）
- 図版2 磯群の状況、集石分布状況
- 図版3 集石33、34
- 図版4 使用痕のある石1、2
- 図版5 集石35、36
- 図版6 JSK-60、61
- 図版7 JSK-61、62
- 図版8 JSK-63、64、土器出土状況
- 図版9 遺構に伴う土器、I類1群、I類2群A種
- 図版10 I類2群B種①、I類2群B種②a
- 図版11 I類2群B種②b・③、I類2群C種①・②
- 図版12 I類2群B種②a、ナデ消し、II類A種、B種、IV類、VI類、VII類
- 図版13 III類、特殊な土器
- 図版14 前期の土器
- 図版15 I類1群、I類2群A種文様拡大
- 図版16 楕円文と菱形文
- 図版17 菱形を指向する文様
- 図版18 摺糸文の内面横位施文と条線
- 図版19 特殊な土器文様拡大
- 図版20 遺構に伴う石器
- 図版21 石鎚・2次加工のある剝片・磨石・敲石
- 図版22 砧石・石斧・石錐

- 図版23 古墳時代遺構全景、S I -15
- 図版24 S I -15
- 図版25 S I -16
- 図版26 S B-21、22、23、24、S K-23
- 図版27 S K-20、22、24、25
- 図版28 S K-21、S D-02及びピット群
- 図版29 S I -15出土遺物
- 図版30 S I -16出土遺物
- 図版31 S I -16、遺構内、遺構外出土遺物

第1章 遺跡の概要

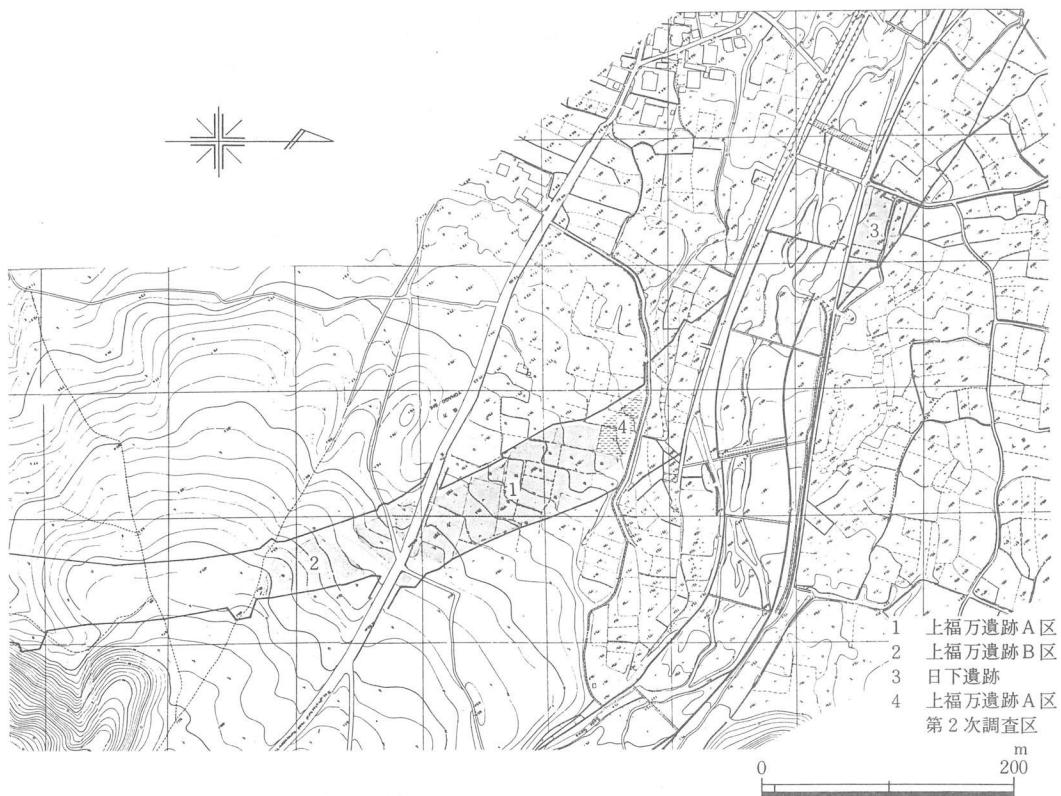
第1節 調査に至る経緯

中国横断自動車道岡山、米子線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、日本道路公団の委託を受け財団法人鳥取県教育文化財団が昭和57年度より実施している。昭和59年度には上福万、日下、石州府第1各遺跡並びに石州府古墳群の内29号、30号各古墳が調査され、当遺跡においては、縄文時代及び古墳時代以降の遺構、遺物が検出されている。今回の調査は、前回上福万遺跡調査（鳥取県教育文化財団調査報告書17）の際未調査であったA区北側部分を継続調査するものである。財団は現地に上福万埋蔵文化財調査事務所を設置して調査を行なった。

第2節 調査の経過及び概要(挿図1・2・3)

上福万遺跡は、米子市上福万字北林、広畑、八久保田南に所在し、佐陀川により形成された扇状地上に立地する。今回の調査地は、調査面積1400m²であったが、畠、果樹園の經營、宅地の造成、道路の敷設により、広い範囲で地山層にまで及ぶ削平、攪乱を被っていた。縄文時代及び古墳時代以降の両文化層が遺存していたのは、Bライン以東、3ライン以北の範囲である。

昭和61年3月6日、7日の両日3箇所にトレンチを入れ、試掘調査を行なった。その結果、調査地の東半部においては、陶磁器、土師器、縄文土器等が検出され、遺物包含層が確認されたが西半部においては、微量の土器片が検出されたにすぎず、遺物包含層の消失が推察された。3月

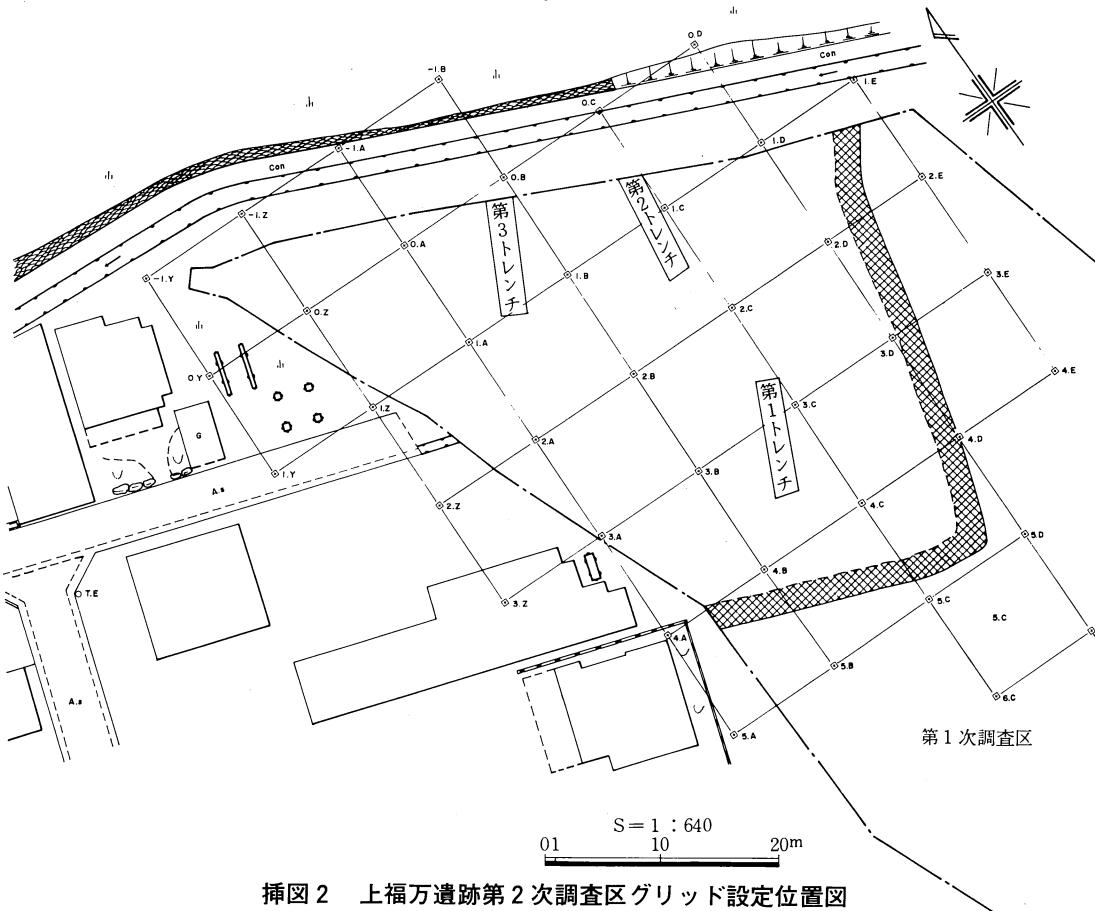


挿図1 上福万遺跡A区第2次調査区概略図

8日～14日、重機による表土除去作業が行なわれ、古墳時代遺物包含層であるクロボク層上面まで掘り下げた。その際調査地の西北部において掘立柱建物跡を確認、他にも遺構の痕跡が残存する可能性があった。

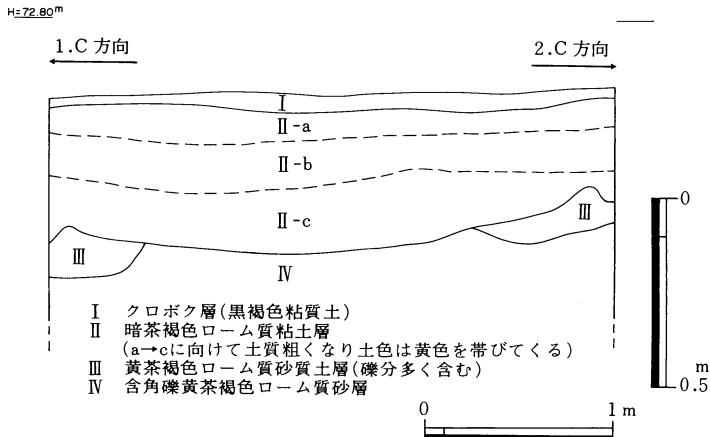
4月2日より本調査を開始し、調査は、10m×10m区画のグリッドを設定し、OBG～1BG、OCG～1CG、1DGをI区、2BG、2CG、2DGをII区、3BG～4BG、3CG～4CGをIII区、-1YG、-1ZG～OZG、-1AG～OAGをIV区、1ZG～2ZG、1AG～4AGをV区と調査地を区分し行なった。前述した通り、試掘調査において遺物包含層の遺存が確認されたのはI区とII区であり、III～V区においては甚しく攪乱削平を被っていた。しかし表土除去後の所見で、V区の南半にも遺物包含層の遺存が確認された。第一面の調査では、古墳時代以降の竪穴住居2棟、掘立柱建物4棟、土塙6基、溝状遺構2を検出した。第二面の調査では、縄文時代の集石4基、土塙5基を検出し、6月28日をもって外作業は終了した。

第一面の古墳時代以降の調査は、I、II区より着手した。遺物包含層であるクロボク層中での遺構検出は困難であったため、クロボク層の下層で、縄文時代遺物包含層である暗茶褐色ローム質粘土層中に掘り込まれ、クロボクを埋土とする落ち込みを遺構として検出した。III～V区については、表面清掃を行ないクロボクを埋土とする落ち込みを追求した。しかし遺構上部を削平されており、痕跡をとどめているにすぎなかった。



插図2 上福万遺跡第2次調査区グリッド設定位置図

第二面の縄文時代の調査は、土層が漸移層であったため、上面から徐々に掘り下げていった。遺構の検出は土層が漸移していく過程で黒褐色ローム質粘土を埋土とする落ち込みを追求した。遺構によっては上面に遺物が集中するものがあり、遺構検出の目安とした。集石は、調査地が土石流によって形成された石原であり、自然による所作か、人為的なものかを見極めるのは困難であった。そこで、鳥取大学教育学部赤木三郎氏を現地に招き集石についての判断を仰いだ。その結果、集石の検出は、石相互が階段状に重なり合わず、各石の底面が直線的に並び、集石の底面が平坦面をなすことを前提にほぼ大きさの揃う石が円形状に規則的に配列されたものを集石として把握した。集石を構成する石の1つとして磨石や敲石が使用されるケースもあった。また、集石の下部に土塙を有するものもあった。最終的に掘り下げた面は地山層上面である。原地形は調査地を東から西に向けて土石流による3条の礫群が伸び、その間に2条の溝状部が形成されている。遺構は礫群を避けるように存在するが、礫群中に自然石を利用して集石を築く例もあった。層位については(挿図3)、縄文時代遺物包含層が漸移層であり、明確に分層出来なかった。上層から下層に向けて土質のキメが徐々に粗くなり、混入する礫も大きくなる。土色は暗茶褐色から黄茶褐色へと漸移していく。地山層直上においては礫分が極めて多く、土石流により形成されたと推察され、この層においては遺物を全く包含しなかった。従ってこれより上層を縄文時代遺



挿図3 1BG、1C～2Cベルト土層断面図

第3節 地理的環境

[鳥取県]

本州の西部、中国地方の北東に位置し、東は兵庫県、西は島根県、南は岡山県、広島県に接する東西100kmに及ぶ細長い県である。総面積3,492.34km²、人口は約61万人を数える。北方には、日本海を望み、南方には、大山(1,710m)、道後山(1,269m)、氷ノ山(1,510m)など1,000m級の山々が軒を連ねる。かつては因幡、伯耆の両国に分かれていたが、現在は千代川流域、天神川流域、日野川流域を中心に発展し、それぞれ、鳥取市、倉吉市、米子市の市街地が広がっている。また、米子市の北側には、日本海側有数の漁港をもつ境港市がある。明治初年以来鳥取県は、永く山陰の僻険の地と呼ばれて来たが、遠く古代に目をやれば、古代出雲と並んで大陸の進んだ文化を摂取する表玄関として栄えた所で、日本海文化を育んできた土地でもあった。

物包含層と把握した。遺物の取り上げは、全点ポイントを取って取り上げ縄文時代の生活空間の復元を試みた。

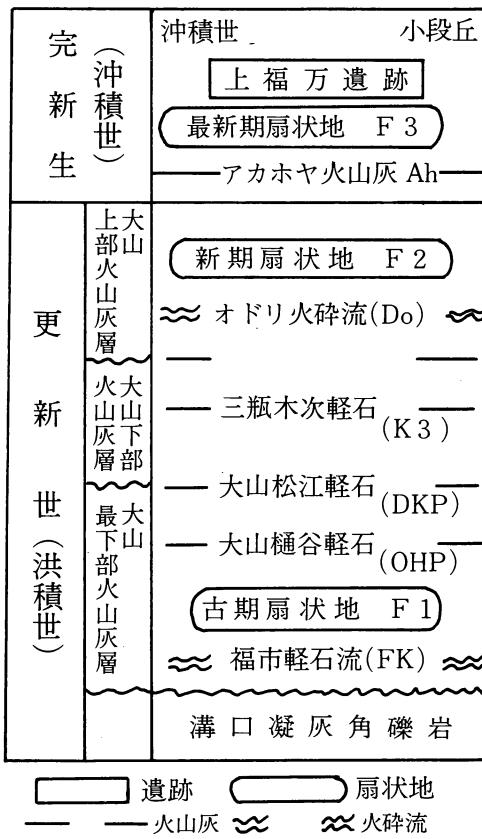
外作業終了後、9月30日まで整理作業を行なった。遺物整理は鳥取県埋蔵文化財センターにおいて行ない、報告書作成は上福万埋蔵文化財調査事務所において進めた。

[米子市]

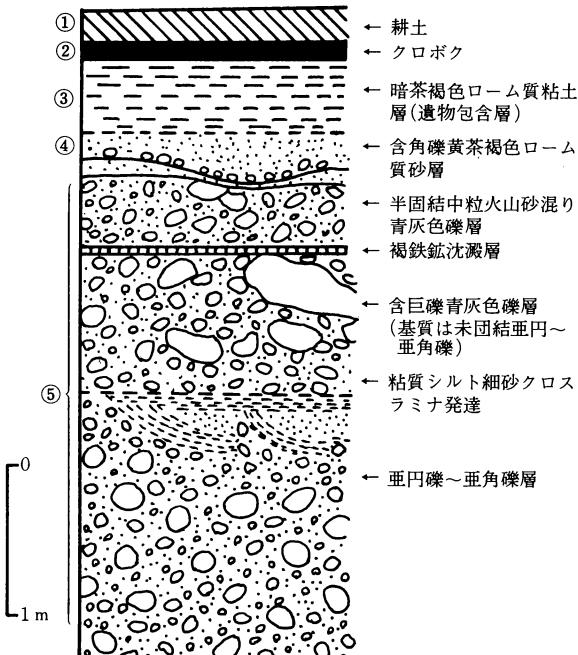
鳥取県の北西部に位置し、弓浜半島の南部と日野川下流の沖積地を中心に広がっている。東は西伯郡日吉津村、淀江町、大山町、西は島根県安来市、伯太町及び中海、南は西伯郡西伯町、会見町、岸本町に接し、北は日本海に面する。戦国期に伯耆、出雲の国境として砦が築かれ、中海に港が開かれた事から始まり、江戸期には米子城城下町が整備されるなど米子港を中心とした商業都市として発展した町である。その米子市（平野）を潤して来た日野川の水は、中国山地奥深く日野郡日南町新屋（標高 900m）を源として、中国山地、大山西麓の雨水を集めて流れ出た水であり、今昔を問わず流域周辺には人々が住みつき、生活に密着した存在となっている。

〔上福万遺跡〕

米子市の南東部、大山の西麓に位置し、米子市上福万字北林、広畑、八久保田南に、県道米子一金屋谷線を挟んで南北に存在している。今回の二次調査区域は字広畑に所在し、一次調査区域（59年度）の北西端にあたる。北部を佐陀川、西部を野本川が流れおり、南は岸本町、東は大山町に接している。当遺跡は、北部を流れる佐陀川沿いに発達した火山山麓扇状地の北北西に緩斜した微高地上に立地しており、その比高は、米子平野の沖積面から約40m、海拔70m付近に位置している。この扇状地は最新期扇状地と呼ばれるもので、新生代、第四紀、完新世に形成されたものである。その堆積物は、上福万セ



挿図4 上福万周辺の第四系層序図



挿図5 上福万セクションA柱状図

^{註1} クションA柱状図（挿図5）の⑤にあたり、青灰色の中粒火山砂からなる亜円礫～亜角礫層である。その上層には、④黄褐色の角礫まじりローム質砂層、③暗茶褐色ローム質粘土層、②クロボク層が堆積しており、③、②より縄文～中世にかけての遺構遺物を検出した。

上福万遺跡から検出された縄文土器の中には、サルボウガイ、ハイガイ、ヤマトシジミなどの貝を利用して施文された貝殻文土器も含まれており、海進の時代であったことともあいまって、当地と海浜部との関わりが窺われる。

註1 赤木三郎 「上福万遺跡の自然環境」（『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』鳥取県教育文化財団）より上福万A柱図、上福万周辺の第四系層序表を転載した。

第4節 歴史的環境

〔旧石器時代〕

米子市周辺に限らず鳥取県内において確実に旧石器時代まで遡るとされる遺物は、ほとんど発見されていない。^{註1}しかし、縄文草創期の有舌尖頭器が大山山麓東伯郡大栄町穂波地区、西伯郡名和町楽仙地区、大山町坊領、岸本町貝田原、会見町諸木、米子市奈喜良等で出土しているほか、これらより古いとされる柳葉状尖頭器が西伯郡中山町羽田井、東伯郡赤崎町松谷で、舟底形石核が倉吉市難手でそれぞれ確認されている。また細石刃様の石器が日野郡溝口町長山第1遺跡で発見され注目を浴びていたが、昨年の発掘調査（昭和60年）では残念ながら確認する事ができなかった。しかしながら大山山麓から、旧石器時代の遺跡が発見される日も近いであろう。

〔縄文時代〕

縄文草創期に盛行するとされる隆線文土器群は、鳥取県内では発見されておらず、いまのところ最古の土器として早期後半の代表的なものが確認されているだけである。早期の遺跡としては溝口町井後草里遺跡(26)、長山第1遺跡(20)や多量の押型文土器（楕円、山形文など）を出土し、土塹、集石遺構の発掘によって注目を集めた米子市上福万遺跡（1）が挙げられる。上福万遺跡の3万点余りもの早期の土器の出土例は西日本でも希有であり、今回の二次調査とも合わせて西伯耆の黎明期をさぐる上で絶好の資料となるであろう。

このほか、日野川水系の別所川周辺には、岸本町番原第1遺跡(14)、久古第5遺跡(12)、久古北田山遺跡(13)が、そして大江川流域には溝口町下山南通遺跡(23)等が存在し、これらの遺跡は大山山麓及び裾部に点在している。

前期に入ると引き続き上福万遺跡（1）、下山南通遺跡(23)、佐川第1遺跡(29)は営まれ貝殻条痕文系の土器を多数出土している。そのほか日野川上流域には江府町江尾宿遺跡(30)、図示できなかったが江府町竜王遺跡が存在する。また、低湿地には米子市目久美遺跡(45)、陰田遺跡群(46)が営まれ、目久美遺跡からは、多量のシカ、イノシシ、クロダイ、スズキ、ブリ、マグロ等の動物遺体が検出された。

中期には、遺跡数が減少する傾向にある。岸本町林ヶ原遺跡(22)、竜王遺跡、引き続き目久美遺跡(45)、陰田遺跡群(46)が存在する。

後、晩期に入ると再び遺跡数は増加し、井後草里遺跡(26)、江府町岩屋ヶ成遺跡(29)、米子市

青木遺跡(37)が挙げられる。その中でも青木遺跡では落し穴と見られる底面にピットを有する土塙が多数検出され、当時の狩猟の一端が窺われる。

[弥生時代]

大陸から稲作文化が伝わると、人々の生活は大きく変化した。目久美遺跡(45)からは、田下駄、鍬、鋤などの木製農耕具を伴って、前期～中期にかけての水田遺構が検出され、これまでの採集経済から生産経済への移行を示すものとなった。

前期の遺跡には、法勝寺川流域の奈喜良遺跡(47)、諸木遺跡(52)、大山西麓の久古第6遺跡(12)等が存在するが、いずれも低湿地や扇状地端に立地している。

中期に入ると遺跡数は増加し、山間部へと遺跡の分布が拡大する傾向が見られる。下山南通遺跡(23)、長山第1遺跡(20)、林ヶ原遺跡(22)などは、丘陵や台地上に立地しており、低湿地帯のような大規模な水田耕作は行なわれなかつたものと推測される。

後期に入ると陰田遺跡群(46)のように丘陵頂部、斜面に立地するものも現われる。後期遺跡はこのまま古墳時代の集落へと継続する例が多い。

[古墳時代]

前期古墳として、米子市日原6号墳(42)、青木古墳群(37)、会見町普段寺1・2号墳(60)が知られているほか、一昨年（昭和59年）の発掘調査によって明らかになった石州府29、30号墳(3)が存在する。石州府29号墳は、『□□□竟真・・・宜子・・』と銘の入った獸帶鏡(舶載)を伴う円墳である。

周辺遺跡分布一覧

1 上福万遺跡	27 根雨原第1遺跡	51 檜原瓦窯跡
2 日下遺跡	28 根雨原第2遺跡	52 諸木遺跡
3 石州府古墳群	29 佐川遺跡群	53 三崎古墳群
4 石州府第1遺跡	30 江尾宿遺跡	54 宮尾遺跡
5.6.7 石州府第2遺跡	31 大寺廃寺跡	55 天万遺跡
8 日下古墳群	32 越敷ヶ丘遺跡	56 宮前遺跡
9 岸本原遺跡	33 越敷山古墳群	57 浅井遺跡
10 岸本要害跡	34 坂長廃寺跡	58 天王原遺跡
11 吉定古墳群	35 長者原古墳群	59 金田瓦窯跡
12 久古第3, 5, 6遺跡	36 諏訪遺跡群	60 普段寺古墳群
13 久古北田山遺跡	37 青木遺跡	61 福成古墳群
14 番原第1遺跡	38 福市遺跡	62 中間古墳群
15 貝田原遺跡	39 大塔山横穴群	63 尾高古墳群
16 溝口上野第1遺跡	40 長砂古墳群	64 百塚古墳群
17 太平原第1遺跡	41 東宗像古墳群	65 岡成古墳群
18 溝口上野第3遺跡	42 日原古墳群	66 福岡古墳群(福岡支群)
19 溝口上野第2遺跡	43 宗像古墳群	67 長田遺跡群
20 長山第1遺跡	44 池ノ内遺跡	68 宮内古墳群
21 長山第2遺跡	45 目久美遺跡	69 ハンボ塚古墳(消滅)
22 林ヶ原遺跡	46 陰田遺跡群	70 尾高城跡
23 下山南通遺跡	47 奈喜良遺跡	71 河岡城跡
24 金屋谷遺跡	48 吉谷遺跡	72 岸本要害
25 太平原第2遺跡	49 大谷遺跡	73 天万要害
26 井後草里遺跡	50 境古墳群	



插図6 周辺遺跡分布図

中期になると古墳の規模は拡大し、全長 108 m もの墳丘を持つ会見町三崎殿山古墳（53）が知られている。そのほかに、画文帶神獸鏡の出土で知られる会見町浅井11号墳（57）、初期の横穴式石室の特徴をそなえる岸本町吉定1号墳（11）などが存在する。

後期になると古墳の規模は小型化し、群集墳が営まれるようになる。青木古墳群（37）、東宗像古墳群（41）、日下古墳群（8）、尾高古墳群（63）、石州府古墳群（3）、岸本町長者原古墳群（35）等が知られる。また、西伯耆は、横穴墓をさかんに築造する地域で、陰田横穴群（46）、大塔山横穴群（39）、普段寺横穴群（60）などが存在し、出雲地方と並んでこの地域の特色となっている。

〔歴史時代〕

上福万周辺が初めて文献に登場するのは、奈良時代、国郡制が実施されるようになってからの事である。『正倉院御物調庸綾布墨書』には、「伯耆国会見郡安曇郷主安曇、調狹絶壱匹…」とあり伯耆国六郡の一つとして記載されている。この会見郡の郡衙の位置として想定されているのが長者屋敷遺跡（35）で、大規模な建物跡が数棟確認されたほか、南北90m、東西 100m にも及ぶ建物群を囲む溝も検出された。

また、この時代の「山陰道」は、高麗山山麓を経て淀江町の福岡一尾高一河岡付近を通って日野川を渡り、大寺、坂中を越えて会見町へぬけるコースを通りいたと考えられる。整った条里、法起寺式伽藍配置を持つ大寺廃寺（31）などが存在する事ともあいまって、この地域一帯は、西伯耆の中心地であったことが推測される。

平安時代になると、上福万周辺は会見郡十二郷の内の「日下郷」に含まれる。遺跡から佐陀川沿いに東へ 300 m 登った所に、大神山神社の前身である「冬の宮」^{註2}が建立されていたという場所がある。現在大神山神社に伝わっている狛犬は、ここから出土したものと言われているが、神社^{註3}が存在した明確な時期は明らかでない。

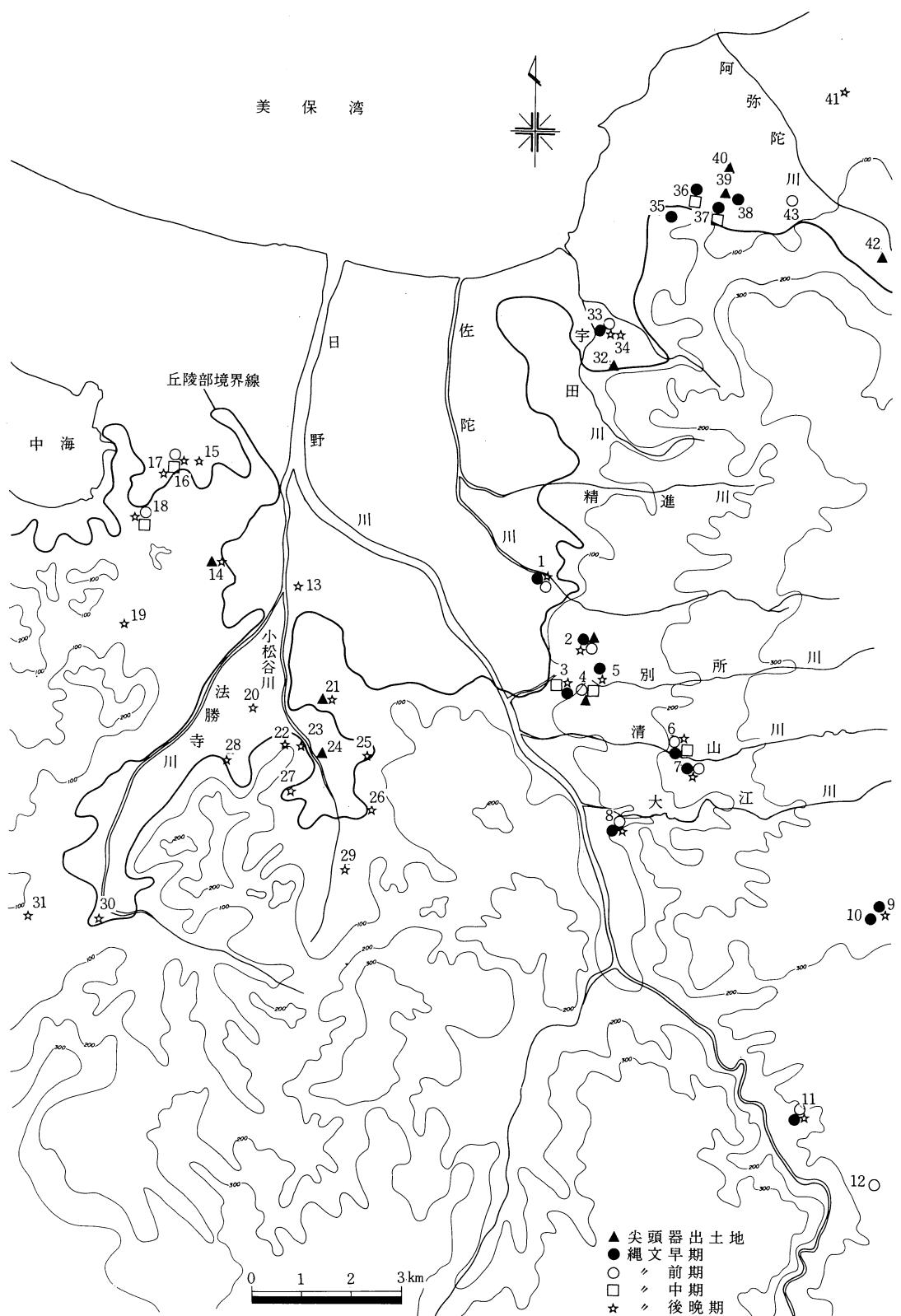
戦国期に入ってこの地は、米子市尾高城跡（70）、河岡城跡（71）、岸本要害（72）、天万要害（73）などの城砦が築かれ、尼子、毛利両氏の激戦の地となった。

註1 淀江町内よりナイフ型石器の出土が伝わる。

註2 尾高にある大神山神社は初め、大山中腹に鎮座していたが、大山は冬季に積雪量が多く奉仕に支障をきたすため、大山山麓に社殿を造営した。これが「冬の宮」と呼ばれるもので、初めは岸本町丸山に造営され、後に福万へ、そして現在の尾高に移ったと言われている。大山にある社殿は「夏の宮」と称した。

縄文時代遺跡分布一覧

1. 上福万
2. 北田山
3. 久古第3,5,6
4. 貝田原
5. 番原
6. 林ヶ原
7. 下山南通
8. 長山第1
9. 井後早里
10. 上中ノ原
11. 佐川第1、岩屋ケ成
12. 江尾宿
13. 青木
14. 奈喜良
15. 池ノ内
16. 目久美
17. 大谷
18. 陰田第1, 7, 9
19. 岡
20. 三崎
21. 諸木
22. 天万
23. 宮前
24. 市山
25. 田住
26. 口朝金
27. 浅井
28. 先達池
29. 金田
30. 馬場
31. 絹屋
32. 中西尾
33. 鮎ヶ口
34. 河原田
35. 大仙道西
36. 大道原
37. 原畑
38. 塚田
39. 新田原
40. 荘田
41. 茶畑
42. 坊領
43. 中高



插図7 繩文時代遺跡分布図

註3 『角川日本地名辞典』によると、冬の宮は天正・慶長年間頃に福万に移り、その後延宝年間に現在地へ移ったとある。

【参考文献】

- 『角川日本地名辞典・31 鳥取県』 角川書店 1982年
- 『岸本町誌』 1983年
- 『上福万遺跡、日下遺跡、石州府第1遺跡、石州府古墳群』 鳥取県教育文化財団 1985年
- 『目久美遺跡』 米子市教育委員会 1986年
- 『東宗像遺跡』 鳥取県教育文化財団 1985年
- 『池ノ内遺跡』 米子市教育委員会 1986年
- 『長山第1遺跡発掘調査報告書』 溝口町教育委員会 1985年
- 『下山南通遺跡』 鳥取県教育文化財団 1986年
- 『佐川遺跡群』 鳥取県教育文化財団 1986年
- 『陰田』 米子市教育委員会 1984年
- 『日本古代遺跡9・鳥取』 野田久男・清水真一 1983年
- 『尾高の里・四』 野口徳正 1984年

上福万周辺の歴史について森山重義氏にお話を伺った。記して謝意を表します。

第2章 繩文時代の遺構と遺物

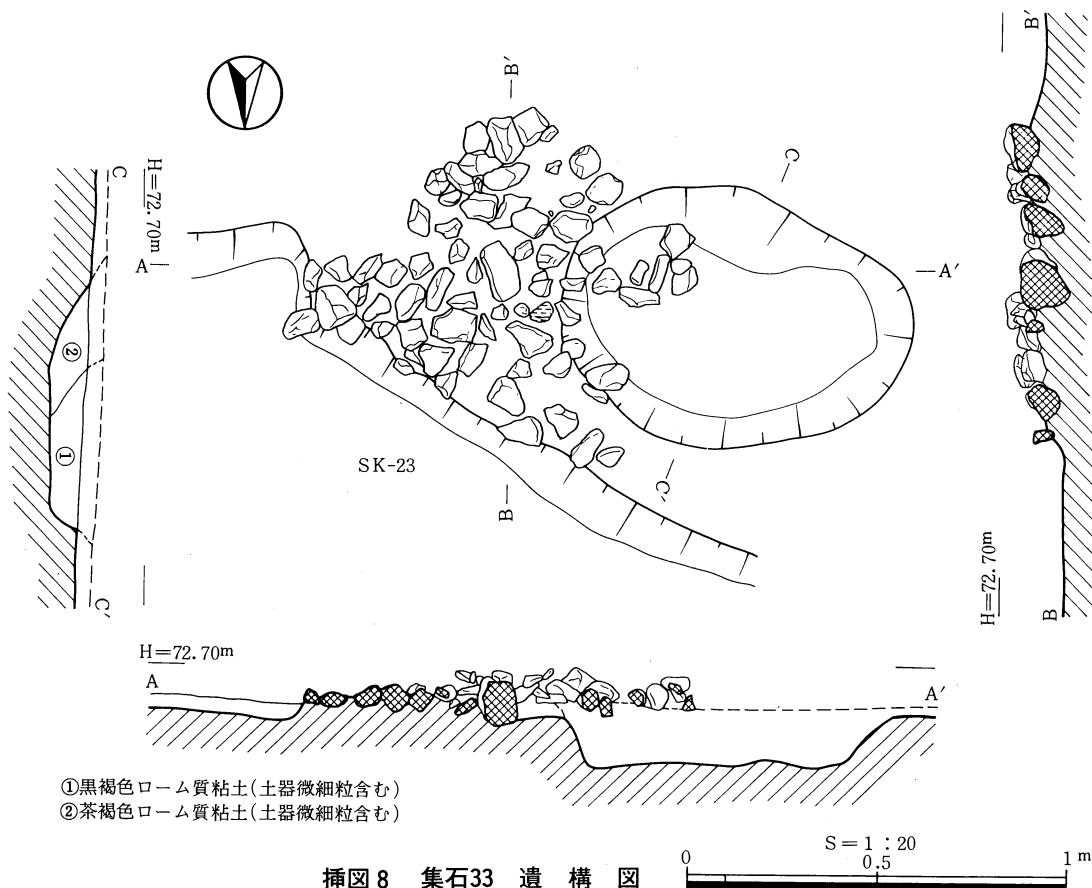
第1節 繩文時代の遺構

集石4基、土塙5基、ピット3基を検出した。検出の方法については、第1章第2節「調査の経過と概要」で述べた通りである。

1 集 石

集石33（挿図8、21 図版3）

- 位置 1Cグリッドの南側中央付近、二条の礫群の間の平坦面上に位置する。
- 形態 楕円形の土塙 ($0.92m \times 0.69m - 0.13m$) の上面に東側にずれた状態で存在。北側をSK-23により切られている。拳大前後の石をほぼ円形状に配する。径約1mを測る。
- 遺物 磨石（挿図21・S1）を検出した。土塙の埋土中に若干土器の微細粒を含む。



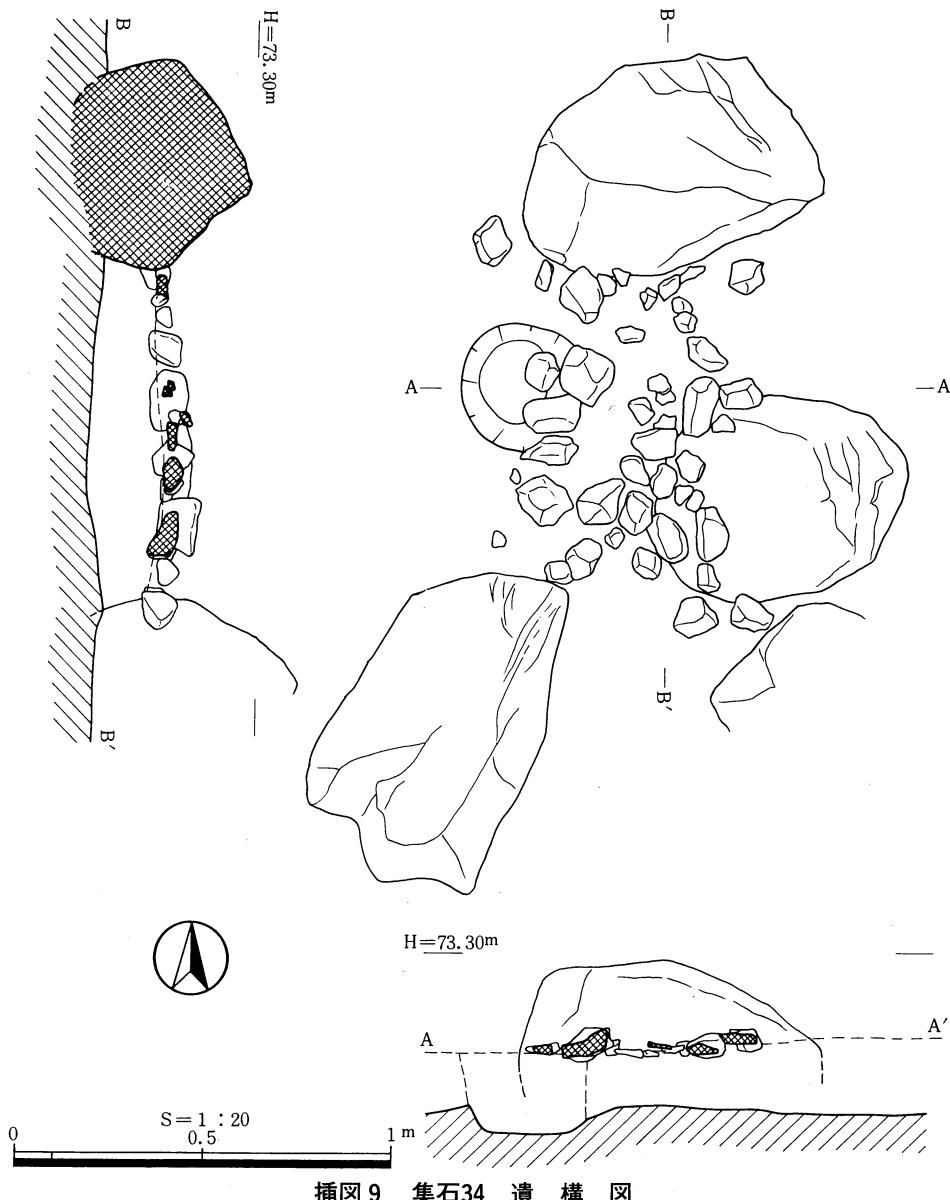
集石34（挿図9、20、41 図版3）

- 位置 2Cグリッドの南東部、礫群中に位置する。
- 形態 3個の巨石塊の間隙に存在。集石下に土塙 ($0.34m \times 0.33m - 0.08m$) を検出したが、実際には集石検出面から掘り込まれたものと思われる。復元深度は0.22mと推定

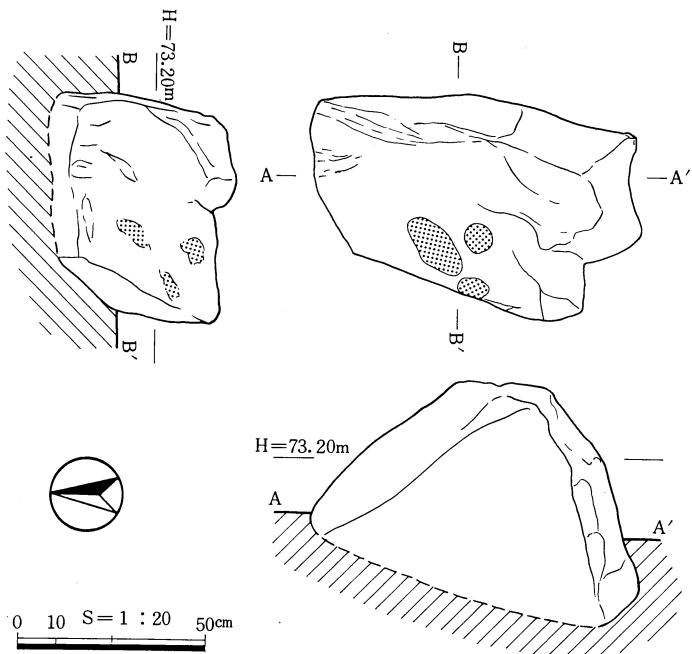
される。1辺10~15cm程の長方形の平石をほぼ円形状に配する。径約0.8mを測る。

遺 物 この集石に伴う遺物は検出しなかったが、この下層より押型文土器〔菱型〕(挿図20・1)〔楕円〕、縄文土器(挿図20・2)が、また、付近より磨石(挿図41・S9)を検出した。

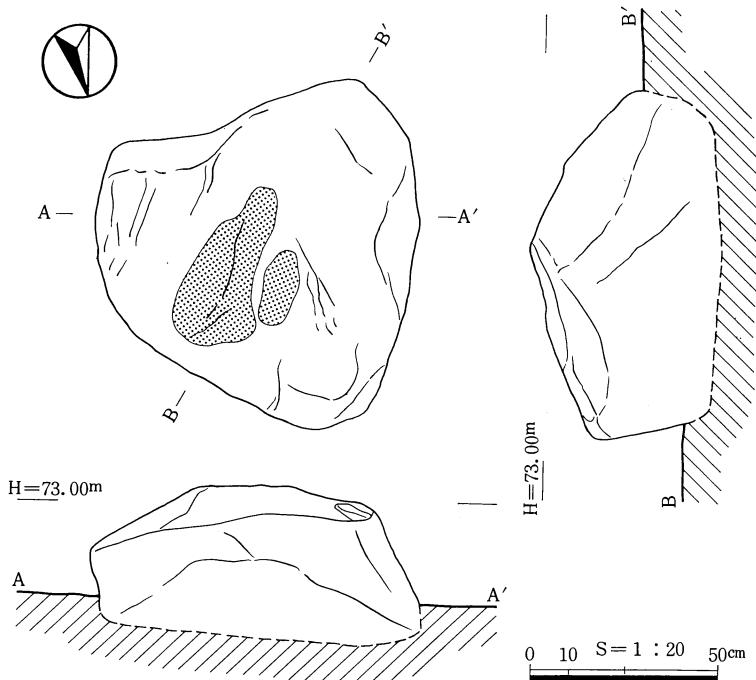
特筆事項 この集石を取り巻く巨石塊の1つが使用痕を有することを確認した(挿図10 図版4)。集石の南西部に位置する無斑晶安山岩で、使用痕のある傾斜面を集石側に向ける。0.92m×0.52mを測り、集石検出面より約40cm露頭している。10cm×9cmの範囲で0.5cm程石皿状に凹む部分があり、他にも磨痕が2箇所に見られる。また、集石34から北東に約2.5m離れた地点にも、使用痕を有する巨石塊を確認した(挿図11 図版4)。



0.97m×0.89mを測る角閃石安山岩で、上面に溝状の使用痕2箇所を有する。これらの石塊は洪積世に形成された土石流による礫群中の石で、これらを石皿あるいは砥石として使用に供したものと思われる。



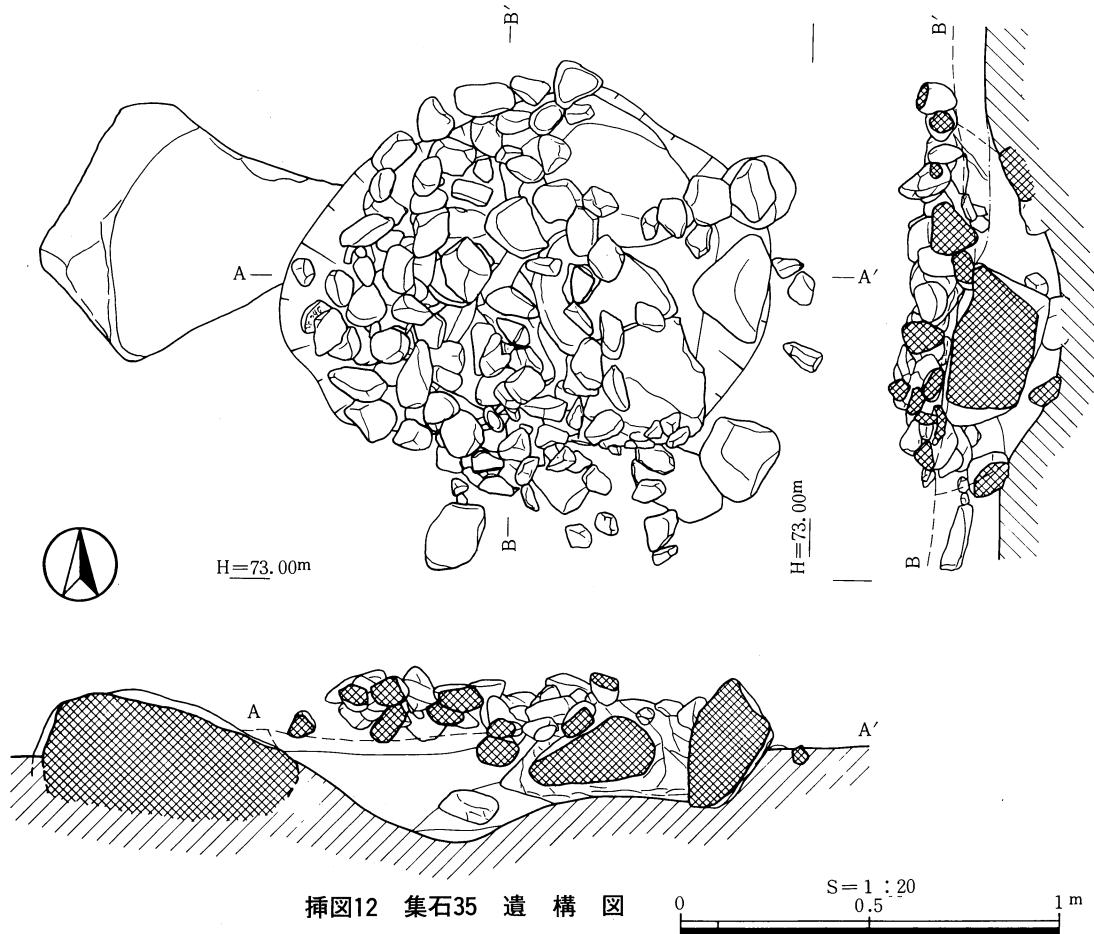
挿図10 使用痕のある石No.1



挿図11 使用痕のある石No.2

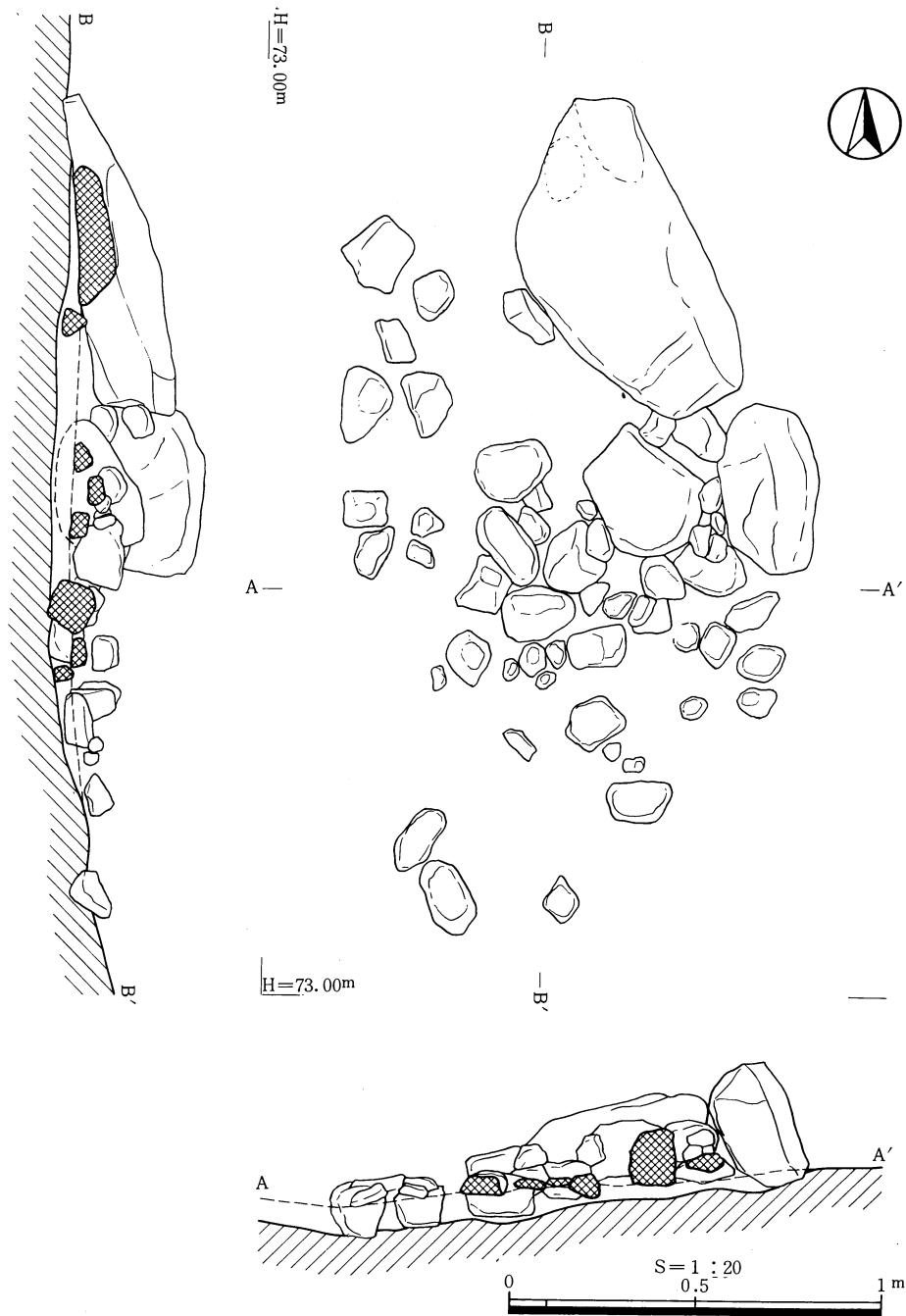
集石35 (挿図12、20、21 図版 5)

- 位 置 2Bグリッドの北東隅に位置する。
- 形 態 椎円形の土塙(0.65m×0.48m—0.23m)の上に拳大前後の石をほぼ円形状に配し、レンズ状の層をなす。径は約0.65mを測る。土塙の実際の掘り込み面は集石の検出面からと思われ、復元深度は0.25mと推定される。土塙は下層の洪積世の礫群が控えているため、いびつな形状を呈する。
- 遺 物 磨石(挿図21・S2)、押型文土器〔菱型〕(挿図20・3)を検出した。



集石36 (挿図13、20 図版 5)

- 位 置 2Bグリッドの西側中央付近に位置する。
- 形 態 西側が大幅に攪乱されており、全体の形状は不明。洪積世の礫群上に位置し、東側及び北側の巨石塊によって囲まれる。中央に人頭大の石を置き、それを取り囲むように拳大の石が配されている。土塙は検出されなかった。
- 遺 物 押型文土器〔菱型〕(挿図20・4)を検出した。



挿図13 集石36 遺構図

插表1 集石一覧表

遺構名	位置	形状	規模cm	石の形状・配し方	土 坡	土 坡の規模cm	遺 物	備 考
集石 01	6 DG	円 形	80× 70	拳 大	円 形	113×108×-17	磨石、砥石、押型文(精円)、無文、焼石	
集石 02	6 DG	—	—	拳 大～人頭大	精円形?	— × 51×-18	JSK-14を切る	攪乱
集石 03	6 BG	円 形	60× 60	30cmの平石の囲りに人頭大の石、その中に拳大の石	精円形	157×120×-17		
集石 05	6 FG	円 形	230×230	20～30cmの平石	な し		磨石、敲石、石皿、押型文(精円・菱形)、撚糸文(縦位)、無文、石皿は火を受けている	
集石 06	4 GG	円 形	80× 80	小礫の上に石皿置く	な し		磨石、敲石、石皿、剝片(Jas)、押型文(精円・菱形)、撚糸文(縦位・綱目)、無文	
集石 07	4 GG	精円形?	200×100	拳 大	—	—	敲石、押型文(精円)、繩文、無文	攪乱
集石 08	5 EG	円 形	250×250	拳 大	な し		磨石、敲石、石皿、ピエスエスキーエ(San)、横形剝片(San)、押型文(精円・菱形)、撚糸文(縦位)、繩文、沈線文、無文	
集石 09	5 EG	精円形?	200×100	拳 大	—	—	敲石、砥石、剝片(ob)、押型文(精円)、無文	攪乱
集石 10	6 FG	円 形	60× 60	拳 大～人頭大	精円形	145×104×-36	石皿、砥石、無文、土塙は2段掘りで、低くなっている方に石を配す	
集石 11	6 EG	—	—	人 頭 大	ドーナツ形	275×205×-13	敲石、撚糸文(縦位)、無文	
集石 12 A群	6 FG	精円形?	150× 70	平石を精円形状に環状に配す? 拳大の石を平石で囲む	な し		磨石、敲石、横形剝片(ob・San)、押型文(精円・菱形)、撚糸文(縦位)、無文	
B群		精円形	150× 70		な し		A群は集石32と同様な形態をとる?	
集石 13	6 FG	精円形	290×200	拳大、一部平石	な し		磨石、敲石、石皿、押型文(精円)、撚糸文(縦位)、撚糸文(縦位)、無文	
集石 14	6 F～7 FG	—	300×100	拳 大～人頭大	—	—	磨石、敲石、石皿、押型文(精円・菱形)、撚糸文(縦位)、無文	
集石 15	7 FG	—	80× 80	拳大～人頭大、立石あり	—	—	敲石、細石刃(San)、押型文(精円)、無文	
集石 16	7 FG	精円形	160×100	中央に平石、その周りに小礫、 その周りに人頭大の石	精円形	205×— ×-30	磨石、敲石、押型文(精円)、撚糸文(縦位)、 沈線文、無文	
集石 17	7 FG	精円形?	130× 80	平石が小礫を囲む?	—	—	敲石、砥石、無文	攪乱
集石 18	7 FG	精円形	150× 90	人頭大、中央部を2段	な し		磨石、敲石、押型文(精円・菱形)、 撚糸文(縦位)、無文	

集石 19	8 EG	橢円形	130×100	拳大の石を平石で囲む	?	190×135×-50	敲石、石皿、押型文(菱形)、無文	搅乱
集石 20	8 FG	橢円形	230×170	拳 大～人頭大	橢円形	190×135×-50	磨石、敲石、石皿、石鏃、横形剝片(ch)、押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位・網目)、無文	
集石 21	8 FG	橢円形	150×130	平石が拳大の石を囲む	なし		磨石、敲石、石皿、剝片(ch,Jsp)、押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位)、無文	
集石 22	8 EG	橢円形?	110×105	平石が人頭大の石を囲む	なし		敲石、石皿、横形剝片(ob)、押型文(楕円)、撚糸文(縦位)、沈線文、貝殻文、無文	搅乱
集石 23	8 EG	橢円形	90× 50	拳 大～人頭大	なし		沈線文、無文	
集石 24	9 EG	円形?	110×110	拳 大～人頭大	—	—	砥石	
集石 25	8 FG	円形?	100× 90	石製品を使用	なし		磨石、敲石、砥石、不明石器、石鏃、横形剝片(ob,Jsp)、剝片(ob)、押型文(楕円)、撚糸文(縦位)、無文	
集石 26	6 G～7 GG	橢円形	240×160	3個の大石を拳大～人頭大の石で囲む	橢円形	250×150×-50	敲石、石皿、剝片(鉄石英)、押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位)、無文	
集石 27	8 FG	円形	140×140	平石を人頭大の石で囲み、さらには大石で囲む	なし		石皿、石鏃、押型文(楕円)、沈線文、無文	
集石 28	7 EG	—	110×100	大石が半円形に並ぶ	—	—	無文	搅乱
集石 29	7 E～8 EG	橢円形	800×650	人頭大～拳 大	橢円形	175×135×-40	磨石、敲石、石皿、横形剝片(ob)、細石刃(ob)、剝片(Jsp,ch,ob)、押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位・網目)、繩文、沈線文、無文	
集石 30	7 EG	橢円形	340×280	人頭大～拳大、小型の集石が附随?	なし		磨石、敲石、石皿、特殊石製品、押型文(楕円)、撚糸文(縦位)、無文	
集石 31	6 EG	橢円形	160×100	人頭大～拳 大	なし		磨石、敲石、石皿、沈線文、無文	
集石 32	7 FG	橢円形	180× 90	平石を環状に配す、土塙中に立石	橢円形 二段盛り 145× 70× - 9	200×105×-11	撚糸文(網目)、無文、土塙墓?	
集石 33	1 CG	円形	100×100	拳 大	橢円形	92× 69× -13	磨石	
集石 34	2 CG	円形	80× 80	平 石	円 形	34× 33× - 8	3つの巨礫に囲まれ、そのうち1つは使用痕有する	
集石 35	2 BG	円形	65× 65	拳 大	橢円形	65× 48× -23	磨石、押型文(菱形)	
集石 36	2 BG	—	70× 60	拳大の石が人頭大の石を囲む	—	—	押型文(菱形)、巨礫に囲まれる。 JSK-64を伴う?	搅乱

凡例 1. 集石-01～32は第1次調査、集石-33～36は第2次調査時に検出された。集石-04は欠番である。集石-01～32についてのデータは第1次調査の調査報告書(『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』)に基づいて示した。

2. 位置は調査時に定めたグリッド名に従つた。

3. 集石、土塙の規格は残存長を表わす。一は不明を表わす。

4. 遺物は石器、土器の順に記し、土器は文様の名称のみにとどめた。剝片類に附した()中の記号は材質を示す。ob: 黒曜石、San: サヌカイト、Jsp: ジヤスバード、ch: 石英。

2 土 坡 (JSK)

JSK-60 (挿図14、20、22 図版6)

位 置 2Bグリッドの北側中央に位置する。
形 態 1.26m×0.92m-0.2mの楕円形を呈す。20~30cmの平石6個が立石状に落ち込む。うち1つは石皿S 5である。当初は土坡上面に置かれていたものが、土坡内に落ち込んだものと思われる。

遺 物 押型文土器〔楕円ナデ消し〕(挿図20・5)、石皿(挿図22・S 5)を検出した。

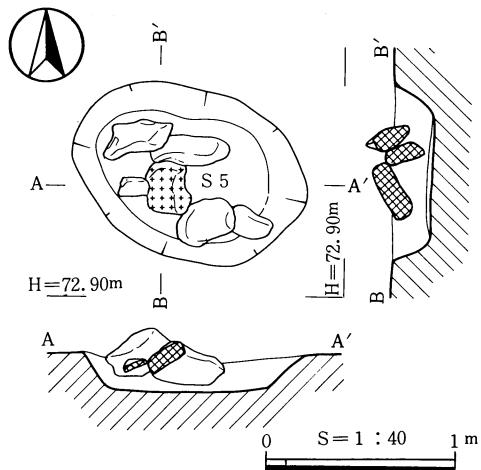
JSK-61

(挿図15、20、21、28 図版6、7)

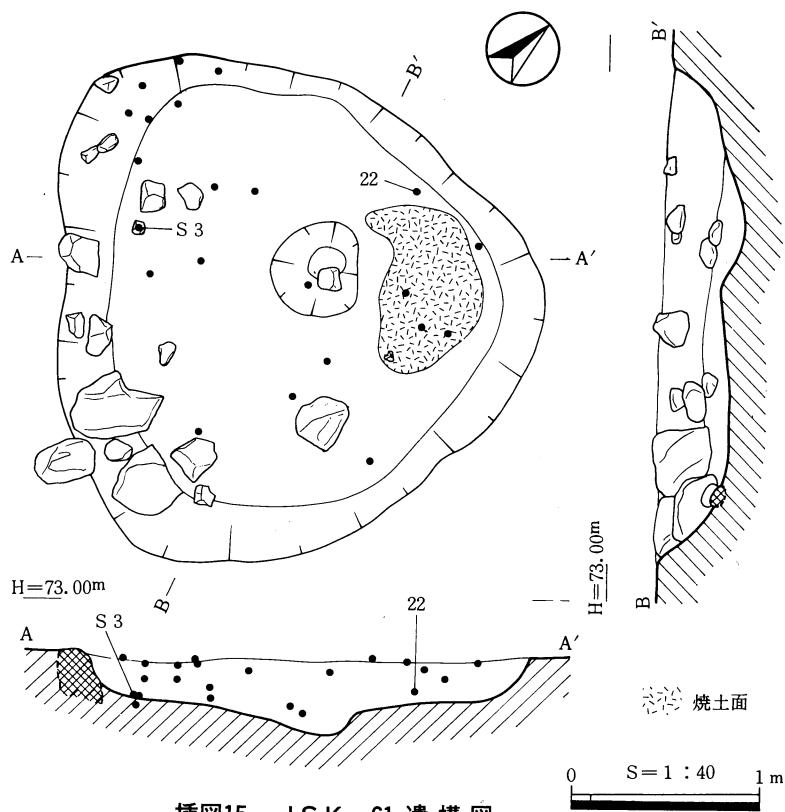
位 置 2Bグリッドの東南隅に位置する。

形 態 径 2.6m、深さ0.25mの隅丸三角形を呈し、中央に0.5m×0.47m-0.12mの円形のピットをもつ。北側隅の底面は0.9m×0.7mの範囲で火を受けている。

遺 物 押型文土器〔山形〕(挿図28・22)〔楕円〕(挿図20・6・8)〔菱形〕(挿図20・7・9)、敲石(挿図21・S 3)、磨石(挿図21・S 4)を検出した。



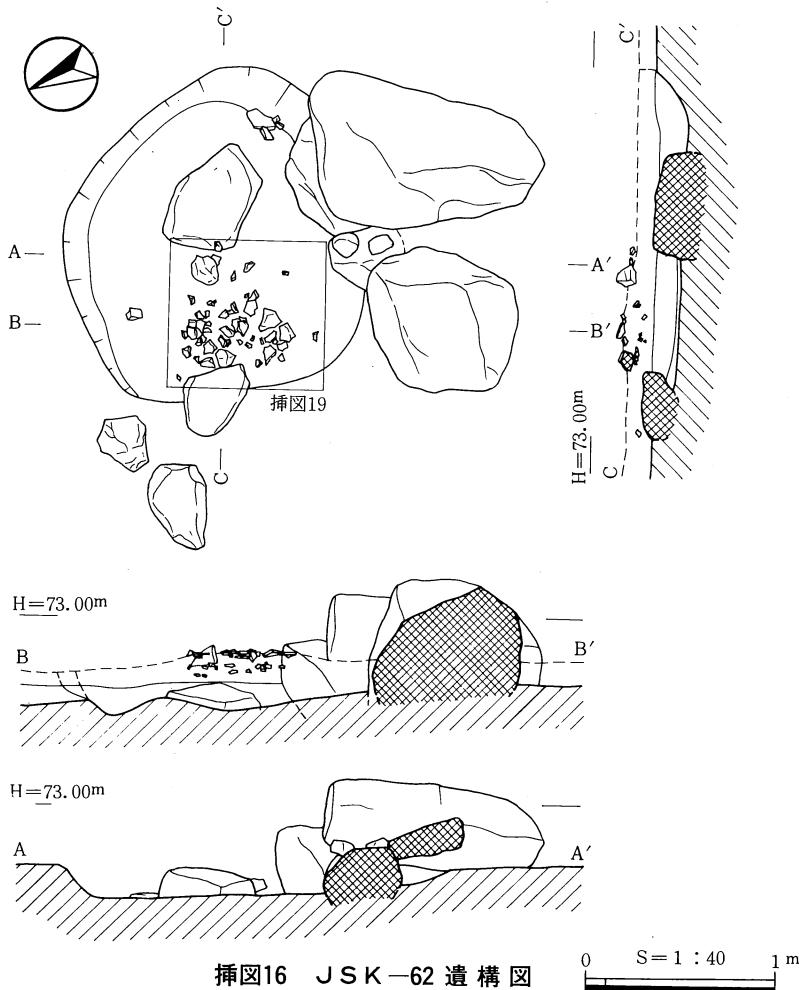
挿図14 JSK-60遺構図



挿図15 JSK-61 遺構図

J S K -62 (挿図16、19、20 図版7)

- 位 置 2 C グリッドの東側中央に位置する。
- 形 態 1.8m × 1.7m の円形を呈し、検出時の深さは0.14mを測った。土塙上面の西側より土器が集中的に出土し、この面から土塙が掘り込まれたものと考えれば、深さは0.3mとなる。南側には2つの巨石塊が控え、土塙中央に30cm程の石が底面より露頭する。なおこの土塙の北西1mの地点に土器の集中出土地点が存在したが、下層より土塙は検出されず、当土塙との関連が推察される。
- 遺 物 押型文土器〔楕円、菱形〕、撚糸文土器を検出した（挿図19、20・10～13）。



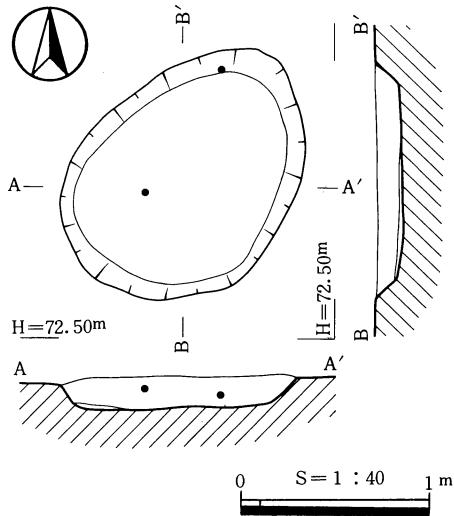
J S K -63 (挿図17、20 図版8)

- 位 置 1 C グリッドの北西部に位置する。
- 形 態 1.5m × 1.1m - 0.15m の楕円形を呈する。
- 遺 物 押型文土器〔楕円ナデ消し〕（挿図20・14）を検出した。

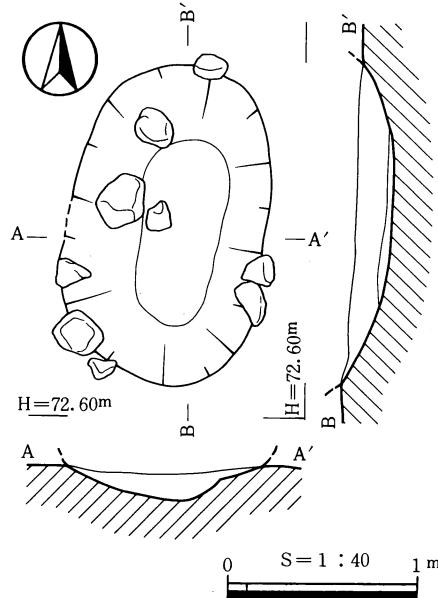
J S K -64 (挿図18 図版8)

- 位 置 2 B - 3 B ラインの中間地点、集石36の西に隣接する。

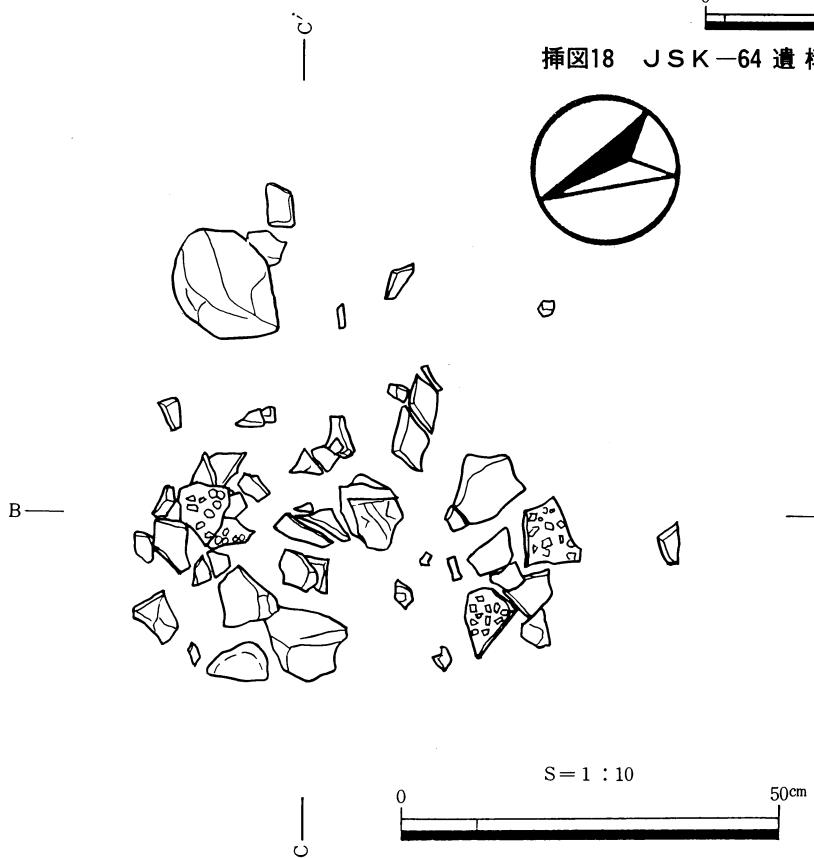
形態 1.65m×1.05m—0.15m～0.2mの橢円形を呈し、北側が若干深い。上部を削平されており本来の状況は不明である。集石36が西側を削平されているが、あるいはこの土塙は、集石36に伴うものであった可能性もある。



挿図17 JSK-63 遺構図



挿図18 JSK-64 遺構図



挿図19 JSK-62土器出土状況図

挿表2 繩文土塙一覧表

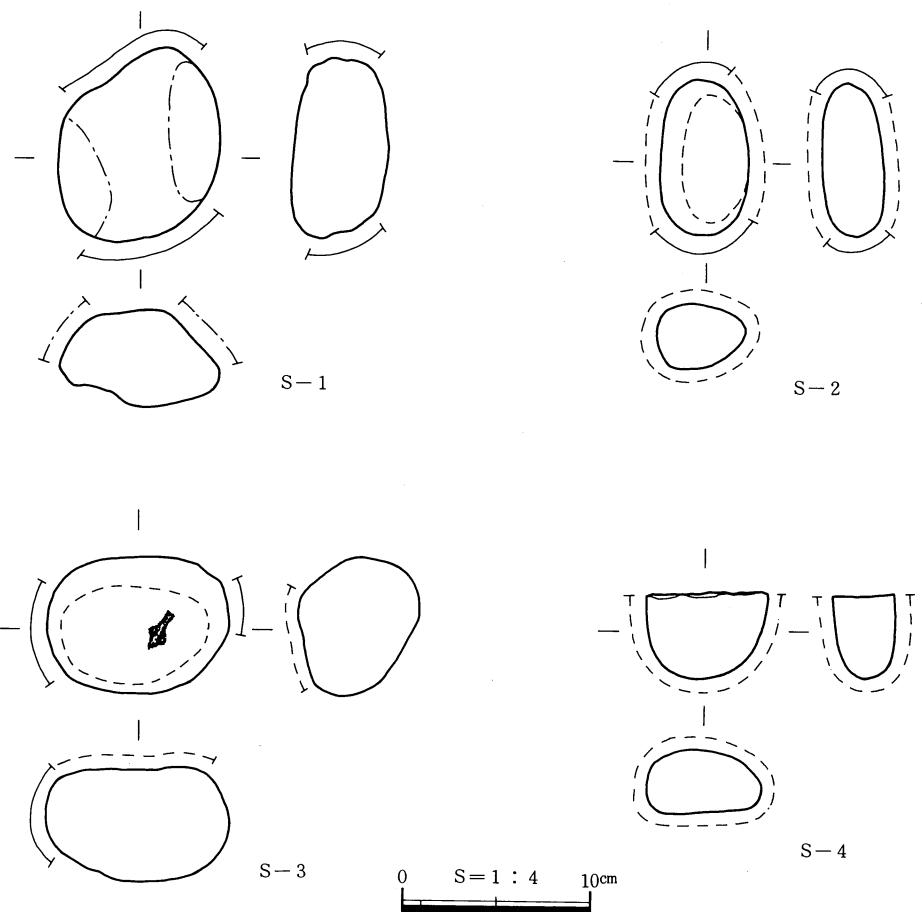
土塙番号	規 模 (cm)	出 土 遺 物 ・ 備 考	土塙番号	規 模 (cm)	出 土 遺 物 ・ 備 考
JSK-01	—×136×—26	撚糸文(縦位・異方向)、沈線文、刺突文、無文	JSK-33	290×140×—46	横形剝片(ob、San)、押型文(楕円・菱形)、沈線文、刺突文、無文
JSK-02	—×114×—20	磨石、押型文(楕円・楕円ナデ消し)、撚糸文(異方向)、刺突文、無文	JSK-34	152×110×—30	無 文
JSK-03	146× 94×—36	押型文(楕円・菱形)	JSK-35	130× 76×—14	押型文(楕円)、無文
JSK-05	100×100×—20	押型文(楕円)	JSK-36	150×100×—15 (20×—17)	押型文(楕円)
JSK-05	89× 88×—22	押型文(楕円)、撚糸(縦位)、無文	JSK-38	120×100×—10	押型文(楕円)、無文
JSK-06	114× 78×—12	な し	JSK-39	91× 76×—12	な し
JSK-07	98× 80×—10	な し	JSK-40	172×100×— 8	磨石、石皿、横形剝片(Jas)、押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位)、無文
JSK-08	82× 72×—17	無 文	JSK-42	90× 70×—12	無 文
JSK-09	70× 65×—14	押型文(楕円)	JSK-43	258×152×—40	磨石、押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位・網目)、無文
JSK-10	84× 71× 20	押型文(楕円)、無文	JSK-44	—×260×—28	横形剝片(San、ob、粘板岩)、押型文(楕円)、撚糸文(網目)、無文、石皿、木炭
JSK-11	172×150 56× 48×—30	石皿、無文	JSK-45	160×112×—18	押型文(菱形)
JSK-12	226×142×—14 (90×80×—20)	撚糸文(縦立)、無文	JSK-46	138× 80×—18	押型文(楕円)、撚糸文(縦位)、沈線文、無文、剝片(San)
JSK-13	210×125×— 8	押型文(楕円・菱形)、無文	JSK-47	144×124×—32	石皿、押型文(楕円)、沈線文、無文
JSK-14	—× 96×—10	撚糸文(網目)、集石02に切られる	JSK-48	260×100~150 ×—13~—30	無文、石鎌、横形剝片(Jas)、鉄石英原石
JSK-15	308× 94×—38	石鎌、横形剝片(San)、剝片(Ob)、押型文(楕円ナデ消し)、無文	JSK-49	148×124×—38	押型文(楕円)、無文
JSK-16	140×103×—15	石皿、敲石、沈線文、ピットに切られる	JSK-50	172× 60×—28	無 文
JSK-17	115×110×—50	石鎌、横形剝片(鉄石英)、押型文(楕円)、無文	JSK-51	60× 50×—30	石皿、押型文(楕円)、沈線文
JSK-18	径 144×—22	押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位)、沈線文、無文	JSK-52	220×168×—28	細石刃(チャート)、押型文(楕円)
JSK-19	262×102×—66	敲石、剝片(ch、San)、押型文(楕円)、撚糸文(網目)、無文	JSK-53	250×140×—30	磨石、石皿、押型文(楕円)、撚糸文(縦位)、沈線文、無文
JSK-20	352×100×—28	押型文(楕円)、無文	JSK-54	102× 64×—37	な し
JSK-21	266×168×—10	ピットに切られる	JSK-55	126× 62×—25	な し
JSK-22	258×142×—20	押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位)、無文	JSK-56	148×130×—53	石刃(ob)、剝片(ob)、晚期条痕系土器、繩文晚期の土塙
JSK-24	172× 70×—20	押型文(楕円)、撚糸文(縦位)	JSK-57	136× 97×—70	押型文(楕円)、撚糸文(縦位)、繩文、無文
JSK-25	124× 74×— 8	な し	JSK-58	300×270×—76	中央の巨亜角礫を中心に石製品を含む亜角礫がとりまく、押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位・網目)、刺突文、無文、磨石
JSK-26	168×115 62× 50×—60	磨石、石鎌、横形剝片(鉄石英、San)、押型文(楕円)、撚糸文(縦位)、沈線文、無文	JSK-59	135×105×—17	沈線文、無文
JSK-27	110× 60×—22	押型文(楕円)、無文、Jpit 3 を切る	JSK-60	126× 92×—20	平石が土塙内に落ち込む押型文(楕円)、石皿
JSK-28	210×160×—40	押型文(特殊菱形)、撚糸文(縦位)、無文、横形剝片(San)、JSK-29に切られる	JSK-61	260×—25 (50×47×—12)	底面一部火を受ける押型文(山形・楕円・菱形)、敲石、磨石
JSK-29	184× 94×—30 (径 34×—20)	押型文(楕円)、無文 JSK-28を切る	JSK-62	180×170×—14	南側に巨石塊が控える押型文(楕円・菱形)
JSK-30	210×100~130 ×—32 (60~80×—34)	押型文(楕円・菱形)、撚糸文(縦位)、無文、細石刃(Jas)、剝片(ch)、Jpit 5 と切り合う	JSK-63	150×110×—15	押型文(楕円ナデ消し)
JSK-31	179×100×—19	敲石、押型文(楕円)	JSK-64	165×105× —15~—20	集石36に伴う土塙?
JSK-32	126× 77×—18	押型文(楕円・菱形)、無文			

註 1 . JSK-01~59は第1次調査、JSK-60~64は第2次調査時に検出された。JSK-23、37、41は欠番である。JSK-01~59についてのデータは第1次調査の調査報告書(『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』)に基づいて示した。

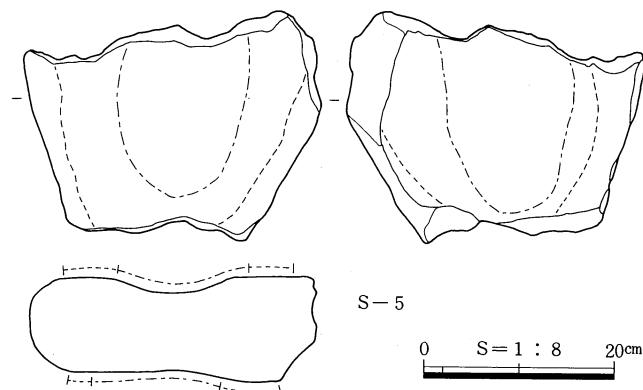
2 . 集石一覧表の凡例参照のこと。



插図20 縄文遺構出土土器実測図



挿図21 繩文遺構出土石器実測図 1



挿図22 繩文遺構出土石器実測図 2

3 ピット

2B J Pit 1 (挿図23)

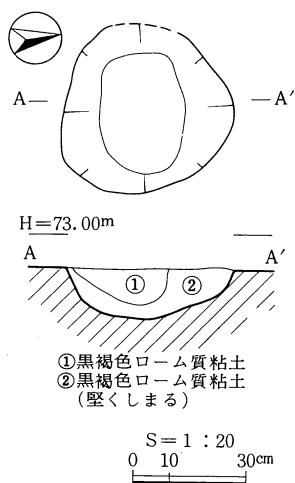
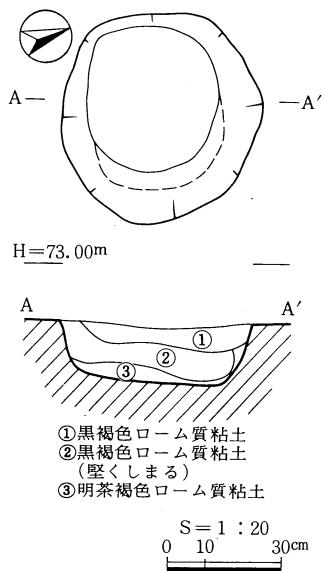
位置 2B グリッドの北側中央に位置する。
形態 $0.51\text{m} \times 0.48\text{m} - 0.16\text{m}$ の楕円形を呈する。

2B J Pit 2 (挿図24)

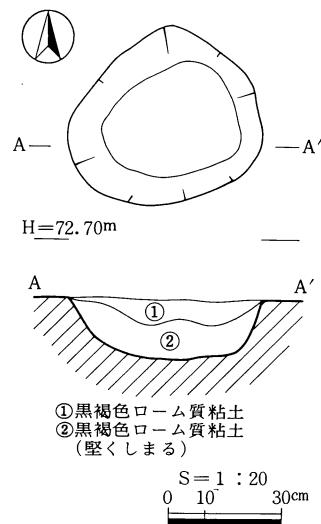
位置 2B グリッドの南東部に位置する。
形態 $0.55\text{m} \times 0.53\text{m} - 0.15\text{m}$ の円形を呈する。

3B J Pit 1 (挿図25)

位置 3B グリッドの北東部に位置する。
形態 $0.45\text{m} \times 0.45\text{m} - 0.14\text{m}$ の円形を呈する。

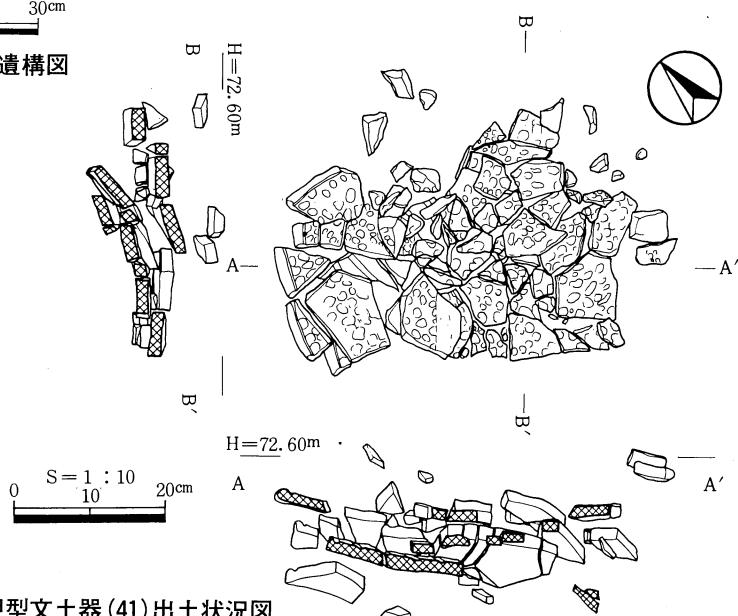


挿図24 2BG Jpit 2 遺構図



挿図23
2BG Jpit 1 遺構図

挿図25 3BG Jpit 1 遺構図



挿図26 楕円押型文土器(41)出土状況図

第2節 縄文時代の遺物

1 土 器

今回の調査では、縄文時代早期の土器1783片、前期の土器365片を検出した。早期の土器は押型文土器が、前期の土器は条痕文系の土器が主流をなす。前回の調査で検出した土器と型式的に差はなく、早期から前期初頭にかけての時期を示すものと考える。

前回の報告書においては、文様を中心に早期の土器の分類を試みている。今回の調査で出土した土器の中には、前報告書の分類の範疇に収まらないものがあり、改めて上福万遺跡の縄文土器の分類を整理する必要があると思われる。以下に述べる出土土器の概要は、概ね前回の分類によるが、若干の齟齬が生じることを了承されたい。^{註1}

(1) 早期の土器

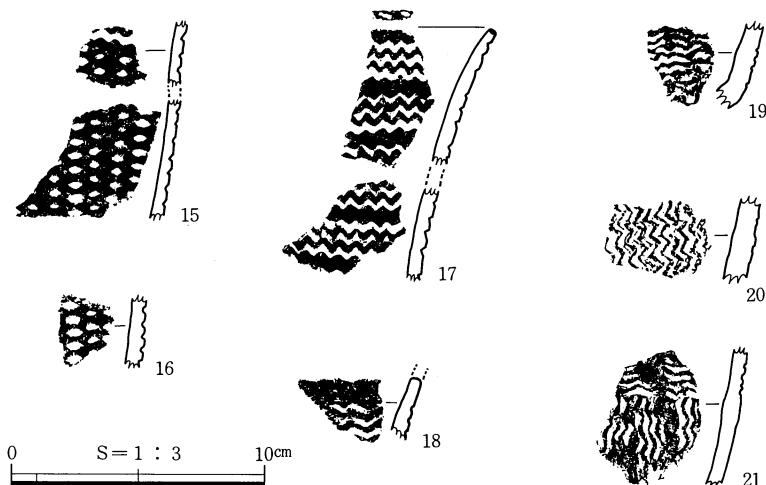
I類 押型文土器

押型文土器は、器形、器厚、施文技法等の違いから大きく2群に区分される。

1群 (挿図27・15~21 図版9)

前回の報告書の分類では、先行する土器Aに該当する。2群に先行する土器で、いわゆるネガティブな楕円文、山形文を施すものが出土している。2群の土器に比して薄手で器形は小型であり、施文原体も直径4~5mmと細い。横位方向に施文する文様で構成される土器に代表されるように、規則的な施文方向で文様が構成されている。山形文は2群の山形文に比して振幅が小さく、波状に近いものもある。

15、16はいわゆるネガティブな楕円形を施す土器で、15では楕円文の上方に横位方向の山形文を施す。楕円文の原体は3単位、直径5.4mmで縦位方向に回転施文させている。17、18は2条2単位の山形文を横位方向に帯状施文するものである。17は口縁端部に刻みを施し、18は擬口縁をなす。17の原体は直径4.4mmである。19は山形文を横位に、20



挿図27 I類 1群 実測図

は縦位に密接施文するもので、19は鈍角な、20はほぼ直角の山形を施す。21は鈍角な山形文を施すもので、縦位に山形文を施したのち、横位に山形文を施している。

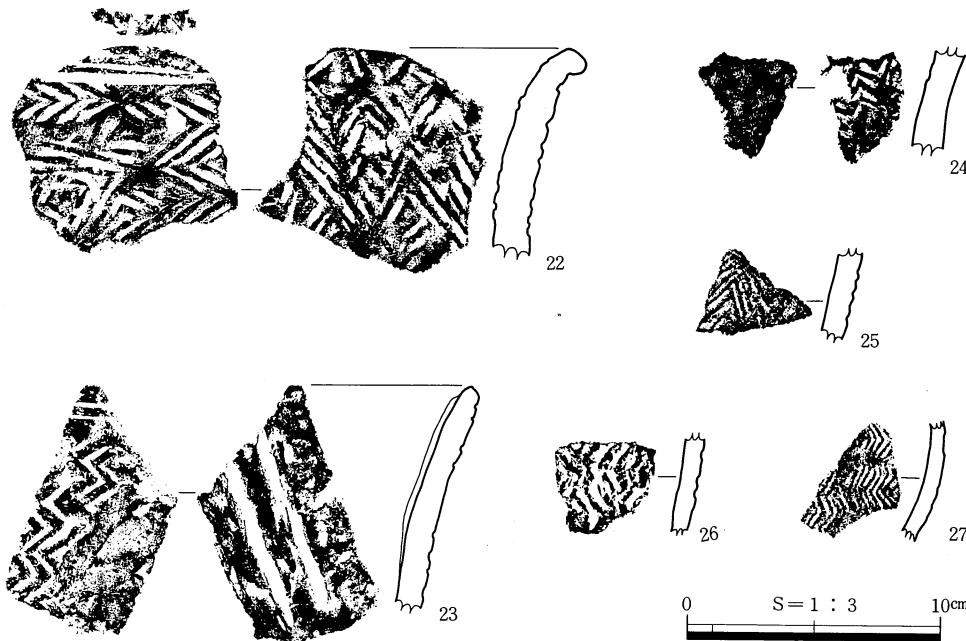
2群

山形文、楕円文、菱形文を施すものが出土している。1群に比して厚手で文様は粗大化する。内面斜行沈線を施す例が顕著であり、施文原体は直径11~15mmと1群に比して太い。縦位方向あるいは斜位方向に施す文様で構成されるが、文様が重複して施文される例が顕著である。

A種 山形文土器 (挿図28・22~27、挿図38・98~100 図版9、13)

^{註2} 22は外反する口縁部である。外面は山形文を横位に施文したのち、重複して縦位に施す。口縁下には横方向の沈線をもつ。内面は山形文を横位に重複して施す。口縁端部は平坦面をなし、山形文を施す。山形は鋭角をなし、頂部は尖る。23は外反する口縁部で、内面斜行沈線を有する。外面には鋭角で頂部の尖る山形文を縦位に施し、口縁下に横方向の半截竹管による沈線を施す。24は内面に横位の山形文を施す。山形は鋭角で頂部は尖る。25は外面に横位の山形文を施す。山形は鋭角で頂部が尖り、振幅は比較的大きい。26、27は縦位に山形文を成す。山形は鈍角で頂部は26は丸く、27は尖る。

器厚、原体、施文技法の比較から、22~24と25~27とは区分されよう。98~100は口縁部に刻み目隆帯を施し、その下に縦位の山形文と横方向の数条の押引き沈線を施文するもので、口縁部内面には横位に山形文を施している。九州の手向山式土器に類似するものである。



挿図28 I類2群A種(山形文)実測図

B種 楕円文土器

楕円文土器は、前報告書においては楕円文の大きさをもとに分類を試みている。楕円文の大小を区分する際、どこに基準を置くかという問題はあるが、楕円文の大きさにバリエーションがあるのは確実である。そこで便宜的に楕円文の長径が1cm未満のものを小楕円、1cm以上2cm未満のものを中楕円、2cm以上のものを大楕円とする。^{註3}

① 小楕円（挿図29・28~37 図版10）

28、30~33は内面斜行沈線がみられる。楕円文は縦位にまたは斜位に施されている。口縁部は外反し、端部は角張る。28は胴部に屈曲をもつ。31、32は口縁下に沈線を有する。35、36は短径2mm以下の極小な楕円文を施すものである。36の口縁端部は尖り気味に終る。JSK-61出土の8（挿図20）も同様の楕円文を施している。34は外面に、37は内面に横位の楕円文を施す。

② 中楕円

前報告書では、中楕円をその形状から、細長いものを長楕円、円に近いものを正円と区分している。今回もその区分に従う。

a 長楕円（挿図30、31・38~47 図版10、12）

40、41、47は口縁が外反するものである。41は胴部が屈曲する。口縁端部は、40、41は丸く収まり、47は平坦面を有する。いずれも口縁下に沈線を施し、41は内面斜行沈線を有する。38、44は大きく外反する口縁をもつものである。44の内面斜行沈線は間隔が密で凸凹が著しく、いわゆる波トタン板状を呈する。43、45、46は緩やかに外反するもので、45は胴部も緩やかに屈曲する。いずれも内面斜行沈線を施すが、43は縦走気味である。45は口縁端部が角張るが46は尖り気味である。楕円文は、44、47は斜位方向に、それ以外は縦位方向に原体を回転させ施している。44、47は短径が3mm程の細長い楕円文を重複させて施す。38~40、44は口縁下から胴部の上部にかけて数条の沈線を横方向に施すものである。

b 正円（挿図32・48~52 図版11）

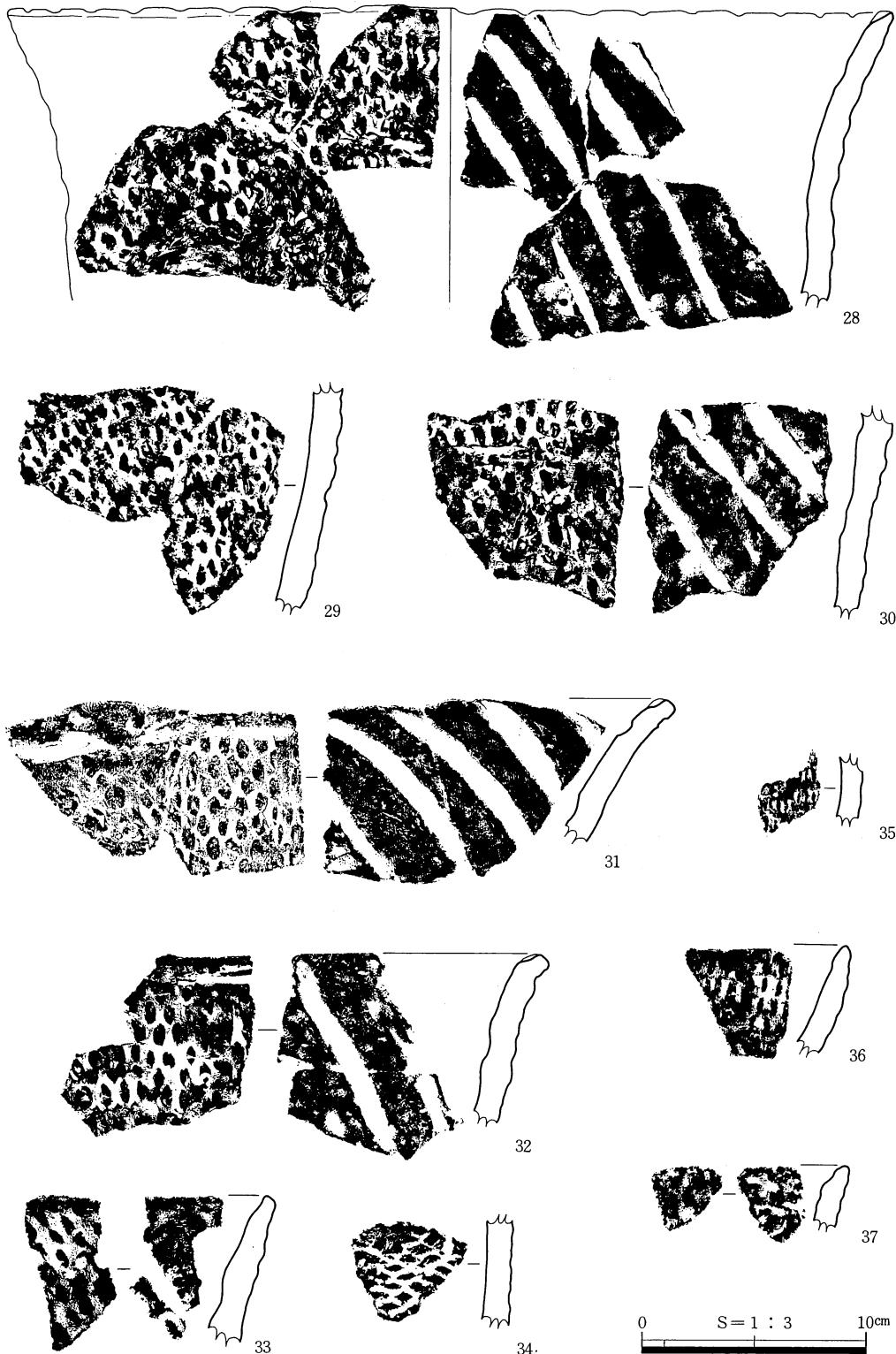
48、49、51は外反する口縁をもつもので、内面斜行沈線を施す。口縁端部はいずれも丸く収めている。48、51は口縁下に沈線を施し、48は径9mmの刺突を有する。50は直口気味の口縁をもつもので、口縁端部は平坦面をもち角張る。

③ 大楕円（挿図32・53、54 図版11）

53、54は外反する口縁部で若干角張る。53は細い内面斜行沈線を有し、口縁下に沈線を施す。

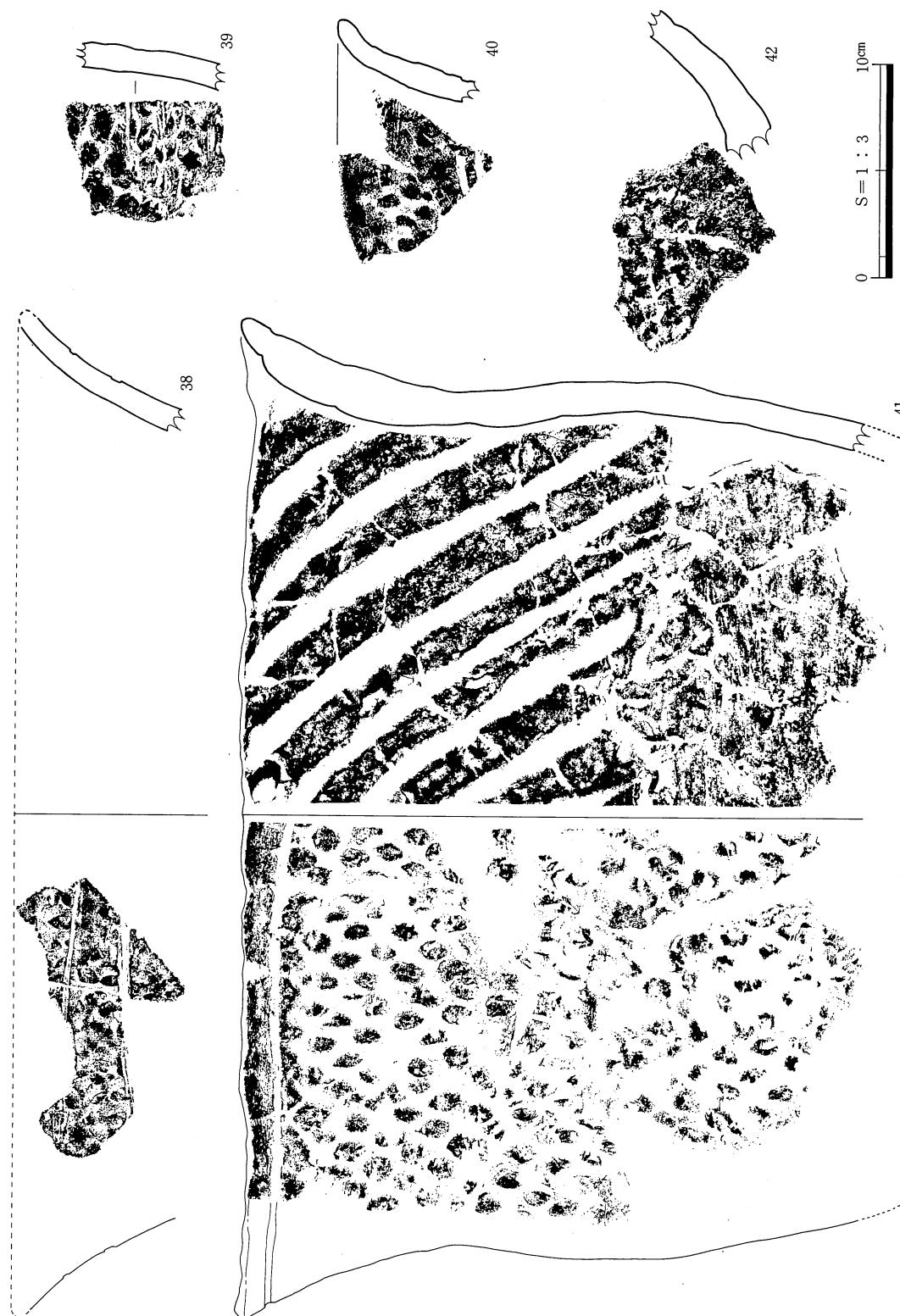
C種 菱形文土器

菱形文土器は、前報告書において菱形文の大きさをもとに分類を試みている。その目安は、長径（長軸）2cmを境に中菱形と大菱形とに区分している。前に楕円文土器の区分の目安を示したが、菱形文土器の区分もそれにとづくこととする。ただし長径1cm未満の小菱形に該当するものは見当らなかった。

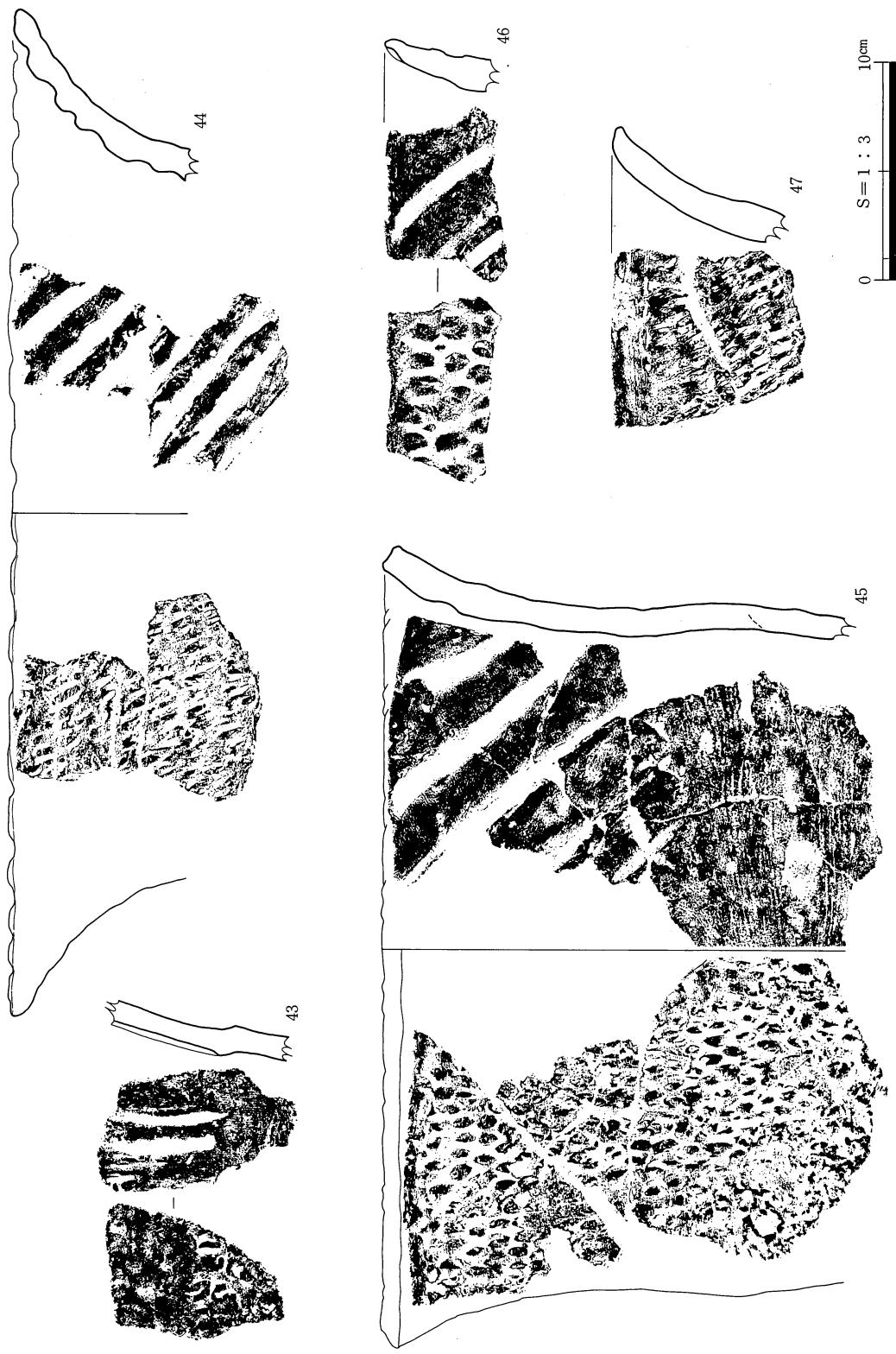


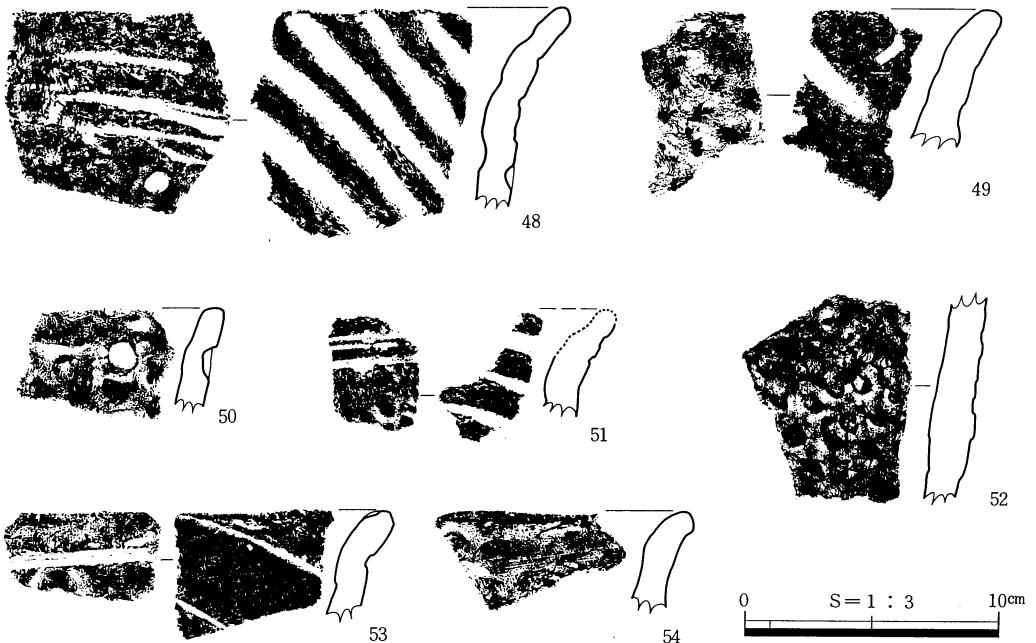
挿図29 I類2群B種①(小精円)実測図

挿図30 I類2群B種②a(長楕円)実測図1



擇圖31 I類2群B種②a(長橢円)実測図2





挿図32 I類2群B種②a(正円)・③(大精円)実測図

① 中菱形 (挿図33・55~61 図版11)

55は外反する口縁をもつもので、口縁端部は丸い。内面斜行沈線を施す。56、60は緩やかに外反する口縁をもつもので、口縁端部は、56は角張り、60は尖り気味に終る。56は径15mmの刺突を有し、60は内面斜行沈線と、口縁下に沈線、径12mmの穿孔を施す。57は内面斜行沈線が口縁に沿って走っているため、口縁部分が極端に外反するもので、口縁下に沈線が走る。58は直口して外傾する口縁をもち、口縁下に沈線と径14mmの刺突をもつ。口縁端部は若干丸味を帶びながらも角張っている。59は底部で、尖底を呈する。

② 大菱形 (挿図33・62、63 図版11)

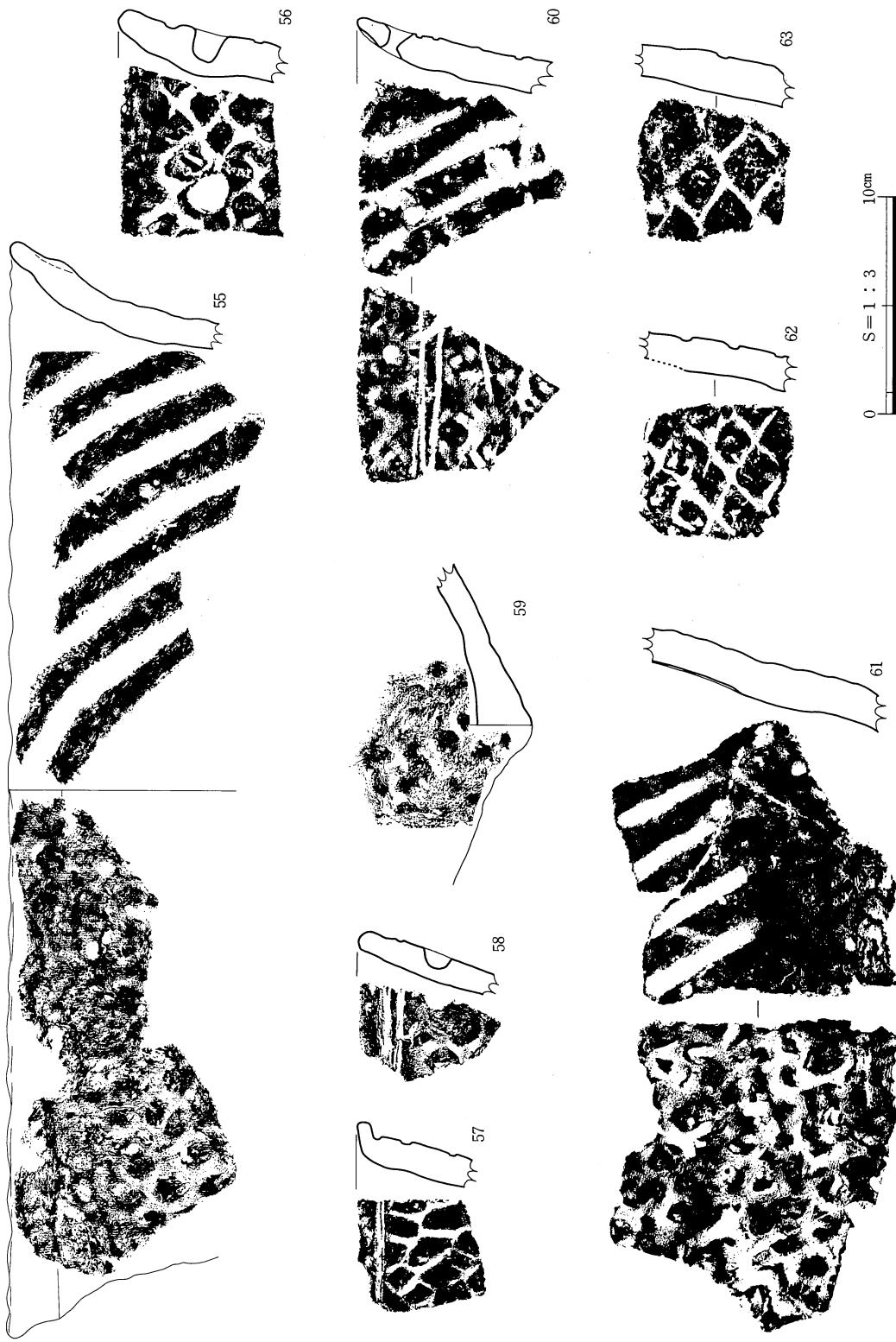
いずれも胴部片である。63は直径3cmを越えるものである。

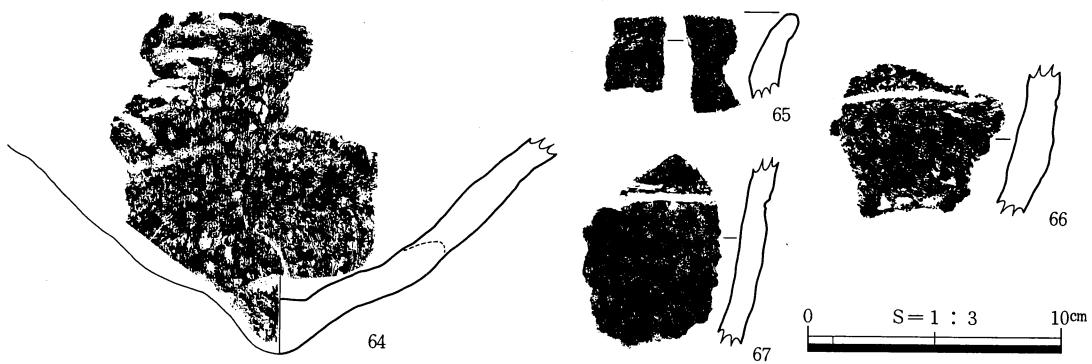
以上押型文土器の概要について記述してきたが、押型文土器は外面全体に施文するばかりではなく、胴部下半や口縁下部など部分的にナデ消すことも多い。挿図34・64~67(図版12)は部分片ではあるが、押型文施文後のナデ消しが観察される。64は尖底、65は外反する口縁部で、66、67は沈線を施している。

II類 摺糸文土器

前報告書において、摺糸文土器は施文方法によって、縦位に施文するもの、異方向に施文するもの、網目状に施文するものの3つに大別されている。今回もこれに従うが、異方向に施文するものは検出しなかった。

插圖33 I類2群C種①(中菱形)・②(大菱形)実測図





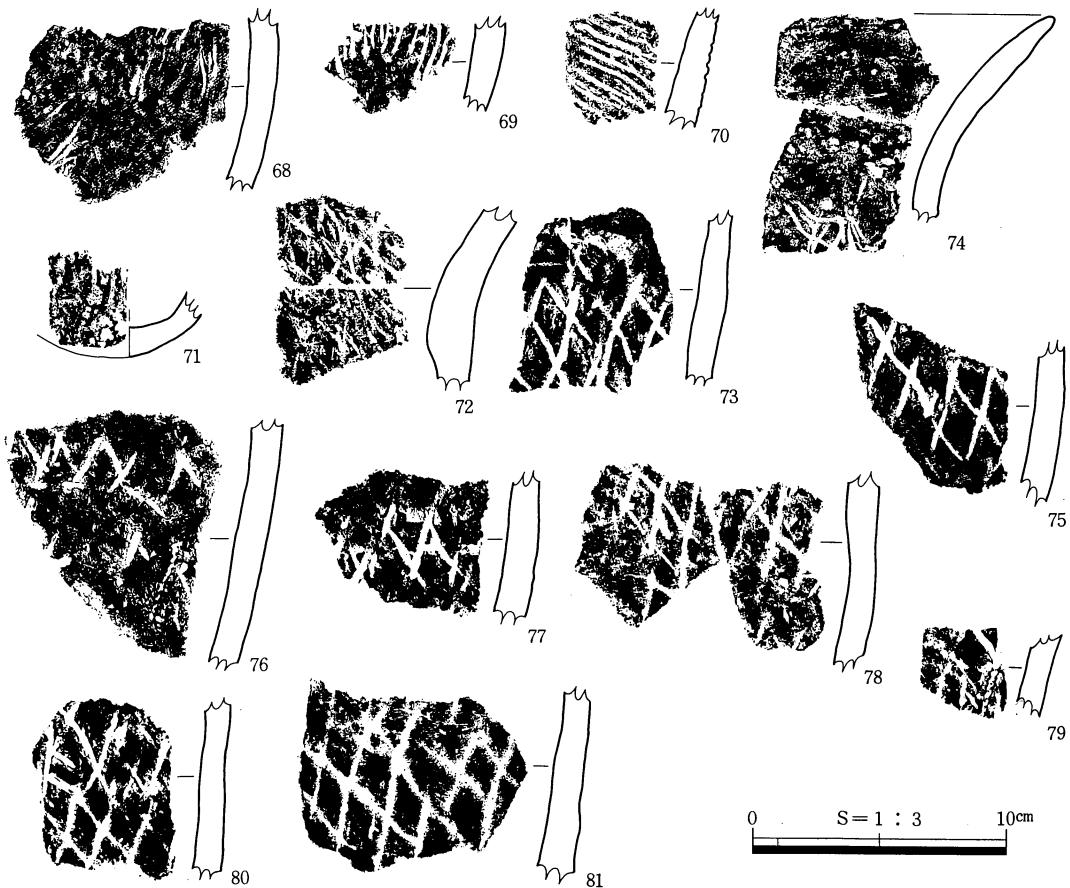
挿図34 ナデ消し実測図

A種 縦位に施文するもの（挿図35・68~71 図版12）

68、69、71は施文全体を斜位方向に、70は横位方向に回転させている。すべて0段1撚りの原体である。71は丸底の底部である。

B種 網目状に施文するもの

① 0段1撚りのもの（挿図35・72~75 図版12）



挿図35 II類A種(縦位撚糸文)・B種(網目状撚糸文)実測図

74は外反する口縁部で口縁端部は丸味を滞びて尖る。右下りの条が左下りの条を切る。72も右下りの条が左下りの条を切っている。73、75は逆に左下りの条が右下りの条を切っている。

② 0段1撚りと1段L撚りのもの（挿図35・76～81 図版12）

網目状に施文する撚糸文の原体は、2本の撚糸を各々逆の方向に巻きつけて網目をなすわけであるが、今回の調査では前回の調査で確認されなかった撚り方のもの、すなわち1本を0段1撚り、もう1本を1段L撚りに施して網目を構成するものを確認した。すべて胴部片であるが、いずれも左下りの条が右下りの条を切っている。

III類 繩文土器（挿図36・82～89 図版13）

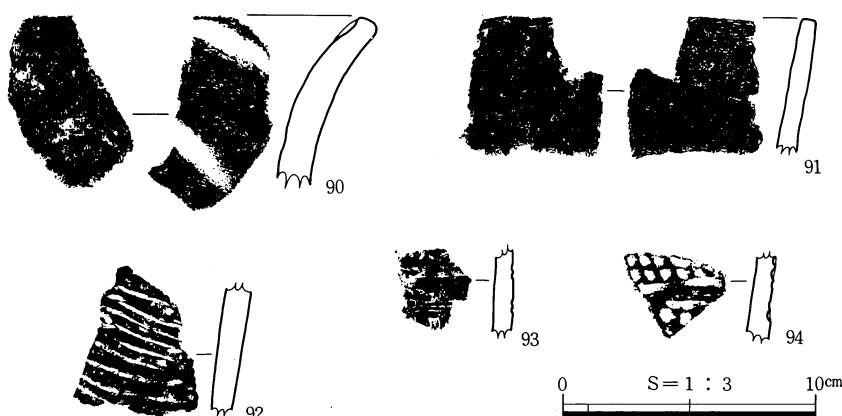
繩文土器はすべてLRの繩文を条痕地の上に施す。82～85は内面条痕地でその上に繩文を施すものである。内面もLRの繩文で、胎土中に若干纖維を含む。86～88は内面に条痕のみを施し、89は内面をナデるのみである。86～89は纖維を含まない。

IV類 沈線文土器（挿図37・92、93、挿図38・95～97 図版12、13）

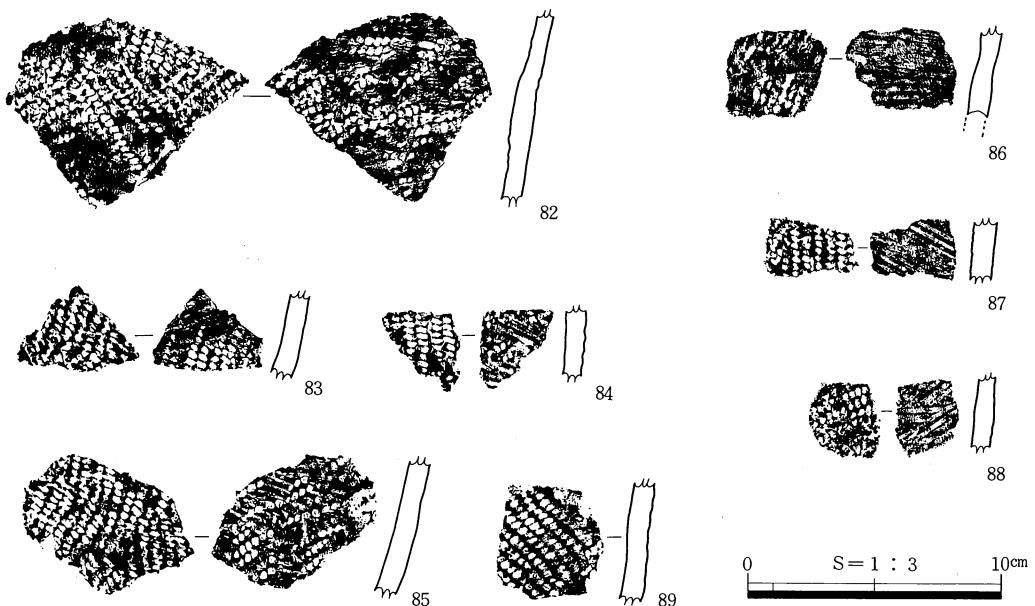
92は斜位方向に数条の沈線文を施すものであるが、各沈線の太さが同様でほぼ等間隔に斜走する様は、撚糸文を彷彿させる施文である。93は曲線的に施すもので、条の中に細密な3条の条線が走る。95～97は口縁下に刺突を施す隆帯を貼付し、その上部に沈線と刺突による文様帶を構成するもので、口縁端部に刻みを施している。前回の調査では、隆帯をもたず胴部外面に結節繩文を施すものが出土しており、繩文土器の範疇で捉えているが、ここでは沈線文土器に分類しておく。九州の平桙式土器に類似するものである。

VI類 刺突文土器（挿図37・94 図版12）

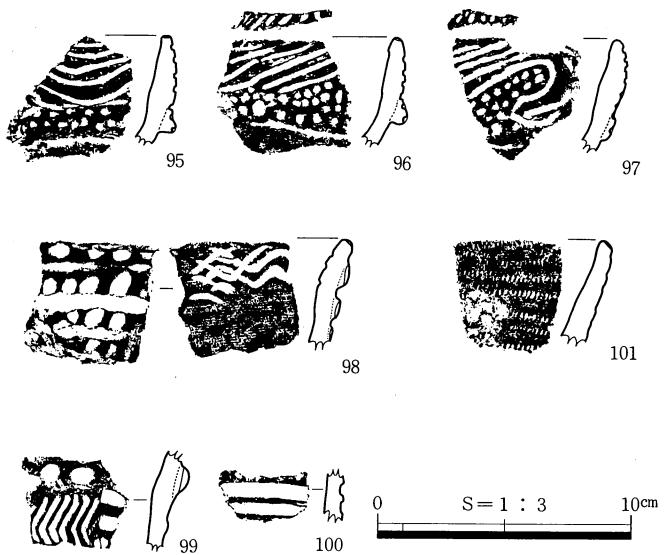
刺突文土器は1片のみの出土である。94は刺突と沈線を施すものである。



挿図36 IV類(沈線文)・VI類(刺突文)・VII類(無文)実測図



挿図37 Ⅲ類（縄文）実測図



挿図38 特殊な土器実測図

VII類 無文土器（挿図37・90、91 図版12）

90は外反する口縁部で、口縁端部は角張る。内面斜行沈線を施す。91は直口する口縁部で、口縁端部に平坦面をもつ。

(2) 前期の土器

今回の調査範囲においては、前期の土器の出土が顕著であった。以下に前期の土器の分類を試み、その概要を述べる。

I類 条痕文系の土器

条痕調整を基調とする土器群である。条痕では条の幅、細粗、方向等にバリエーションがみられるが、ここでは文様をもとにさらに分類する。

A種 条痕文土器（挿図39・102～121 図版14）

条痕を地文様とするものである。102、103は微隆帯をもつもので、102は口縁下に、103は屈曲する胴部にそれぞれ施している。104～114は隆帯に貝殻腹縁あるいはヘラ状工具による刻み目を施すものである。いずれもほぼ直口する口縁部を呈し、105、114は胴部に屈曲がみられる。110～113は口縁に、114は胴部に垂下する隆帯を貼付するものである。108は極めて扁平な隆帯を有する。115～121は隆帯をもたないものである。115は幅広の条痕を施すもので、内傾する折り返し口縁をもつ。116は直口する口縁部で、端部は丸く收まり、胴部が若干屈曲する。117は外面ナデ調整、内面条痕調整するもので若干屈曲する胴部片である。^{註4}118、119は条痕を施す方向が内外面で異なるもので、118は外面縦位、内面横位に、119は外面横位に施したのち、縦位に施し、内面縦位に施すものである。

条痕の施し方は121に代表されるパターンが主流であるが、概ね隆帯をもたない土器群については、条痕の施し方により多様性が認められる。

B種 幾何学文を施す土器（挿図40・122～126、135～136 図版14）

条痕地に沈線、刺突により幾何学文を構成するものである。122、123は押引き刺突により菱形様の文様を施している。内面は全面に条痕調整している。124、125は刺突により右下りの斜線を構成するもので、内面は部分的に条痕を施している。126は刺突により左下りの斜線を構成する。135、136は沈線による施文で、135は内面を部分的に、136は内面全面に条痕調整を施している。122～125は内傾する口縁をなし、136は胴部が丸く屈曲する。

C種 貝殻文土器（挿図40・127～131 図版14）

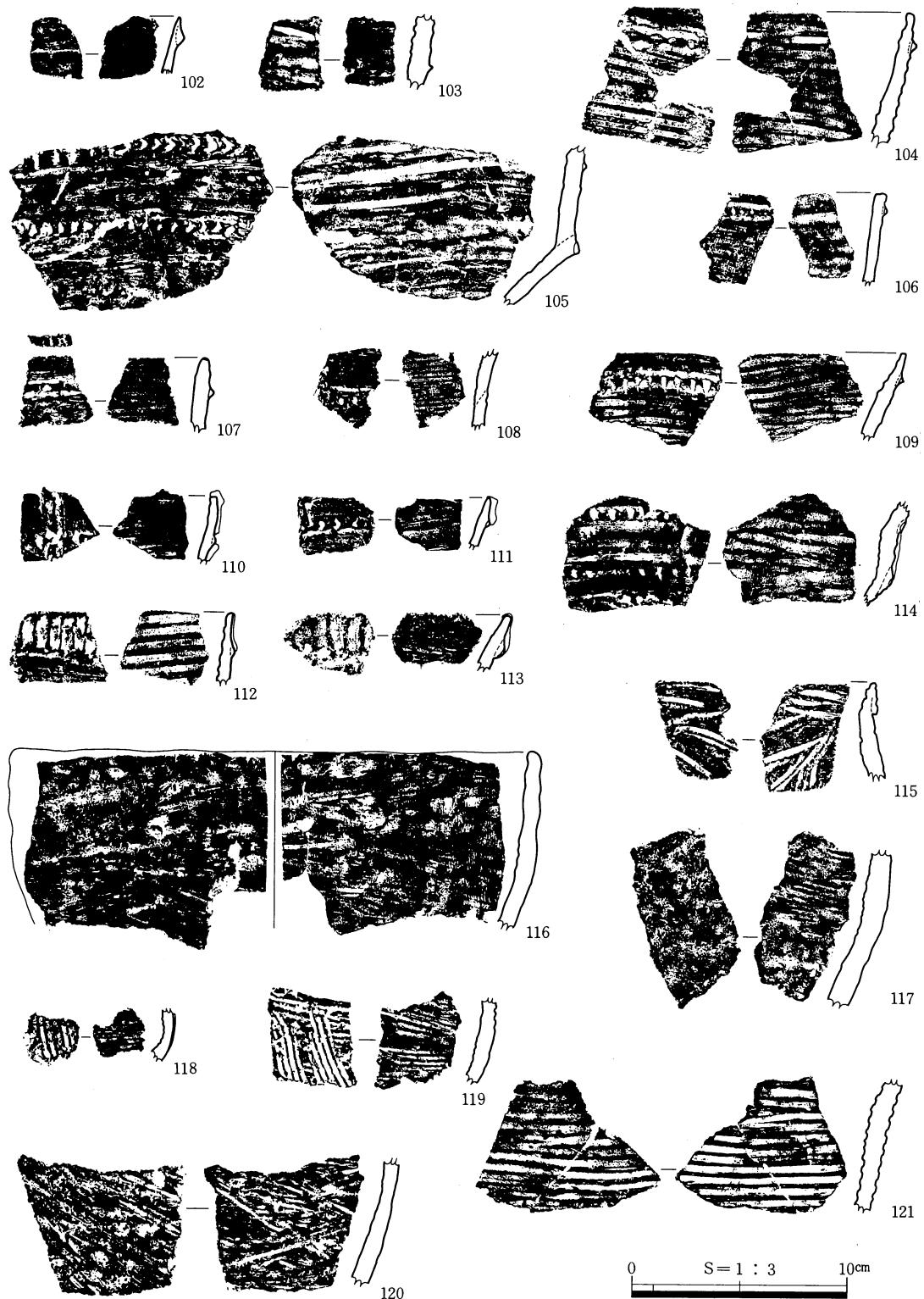
127～131は貝殻腹縁の刺突により施文するものである。127は口縁端部にのみ貝殻施文がみられるが、内外面は細い条痕調整である。128～130は貝殻腹縁を交互に連続して押圧していくものである。^{註5}131は小型の貝殻の腹縁を順に刺突していくもので、2段を観察する。128～131は内面を部分的に条痕調整している。

II類 条痕を施さない土器

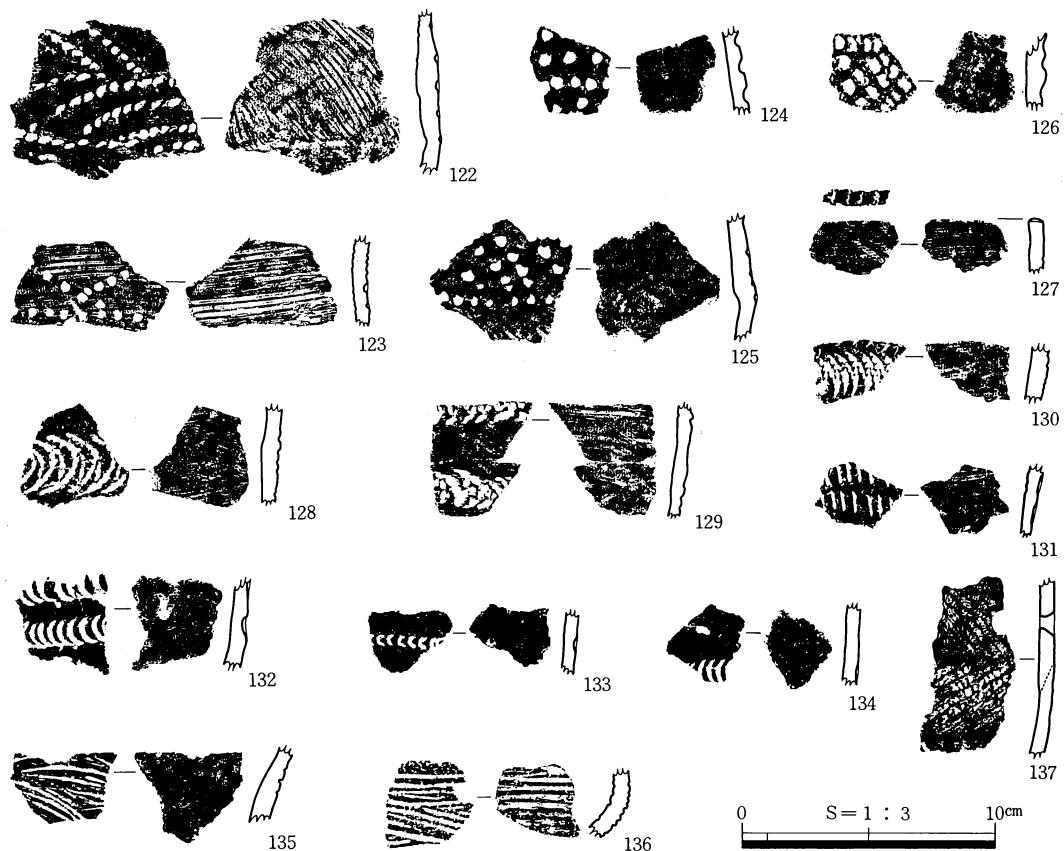
条痕調整を施さない土器群であるが、出土した前期の土器の中で数量的に占める割合は少ない。

A種 爪形文土器（挿図40・132～134 図版14）

C字状の爪形文を施すもので、132は2段にわたる施文が観察される。



挿図39 前期の土器実測図1



挿図40 前期の土器実測図2

B種 繩文土器（挿図40・137 図版14）

L Rの羽状縄文を施すもので、内面はナデている。穿孔がみられる。

C種 貝殻文土器（挿図38・101 図版13）

101は貝殻腹縁を口縁端部以下外面に平行に数条押圧するものである。内面はナデ調整^{註6}を施している。

前期の土器は条痕の有無をもって大別したが、I類は前期初頭に比定され、II類はI類に後出するものと考える。ただし I類C種の131はI類の中でも後出するものと思われる。^{註7}

註1 前報告書の分類は以下に大別される。先行する土器A（押型文土器）、先行する土器B（刺突文土器）、I類 押型文土器（A種 山形文土器、B種 楕円文土器、C種 菱形文土器、D種 特種菱形文土器）、II類 扰糸文土器（A種 縦位に施文するもの、B種 網目状に施文するもの、C種 異方向に施文するもの）、III類 縄文土器、IV類 沈線文土器、V類 貝殻文土器、VI類 刺突文土器、VII類 無文土器、VIII類 尖底。こ

これらを器形、施文方法等を絡めてさらに細分している。なお今回の調査ではV類の貝殻文土器は出土しなかった。

- 註2 22はJSK-61に伴う土器ではあるが、特徴的であるためここに掲載した。
- 註3 前報告書中で中橋円としたもののうち、今回の区分の基準に従えば小橋円となるものが生じることを了承されたい。
- 註4 島根県竹ノ花遺跡に類例がある。竹ノ花遺跡Ⅲ類土器に該当する。足立克己「出雲の前期縄文土器—竹ノ花遺跡出土の土器を中心にして—」『えとのす』16 1981年
- 註5 前報告書中で、V類の④（貝殻文土器、腹縁連続圧痕文）とする10、11（挿図140）の土器は、再検討の結果当種の範疇に収めるのが妥当と考える。
- 註6 米子市目久美遺跡出土の縄文土器のZⅡ群A2類中の土器に貝殻腹縁を2～3条1単位で平行に押圧するものがみられるが、当土器は条痕を施さない点で異なる。『目久美遺跡』 米子市教育委員会 1986年
- 註7 米子市目久美遺跡出土の縄文土器の分類に比定するならば、I類A種、B種は目久美遺跡のZⅠ群、I類C種はZⅡ群にそれぞれ対応するものと思われる。なお目久美遺跡では、ZⅠ群→ZⅡ群→ZⅢ群という先後関係を示している。同掲註6 『目久美遺跡』

挿表3 縄文土器出土位置一覧表(1)

	土器No.	取上No.		土器No.	取上No.
遺構に伴う土器					
集石34	1	2-C No.441	I類 1群	15	1-B No.187、189
集石34	2	2-C No.442		16	2-C No.10
集石35	3	2-B No.341		17	1-B No.292、102
集石36	4	2-B No.358		18	2-B No.435
JSK-60	5	2-B No.330		19	3-A No.29
JSK-61	6	2-B No.409		20	1-C No.156
JSK-61	7	2-B No.424		21	1-C No.274
JSK-61	8	2-B No.424	I類 2群 A種	22	JSK-61 No.427
JSK-61	9	2-C No.216、339、359、441		23	3-A No.41
JSK-62	10	2-C No.428		24	SI-15 No.47
JSK-62	11	2-C No.413		25	1-B No.232
JSK-62	12	2-C No.433		26	1-B No.347
JSK-62	13	2-C No.427		27	2-C No.393
JSK-63	14	1-C No.318		98	T-2
				99	T-2
				100	1-B No.165

挿表3 繩文土器出土位置一覧表(2)

	土器No.	取上No.
I類 2群 B種 ①		
	28	1-C №.142、253
	29	2-B №.287、290
	30	2-B №.276
	31	1-C №.115、278
	32	1-C №.23、27
	33	2-C №.302
	34	1-C №.302
	35	2-C №.41
	36	トレンチ
	37	1-C №.153
I類 2群 B種 ②a		
	38	1-B №.264、294、317
	39	SI-16 №.64
	40	1-B №.49、86
	41	1-B №.350
	42	2-C №.230
	43	2-B №.323
	44	3-C №.7
	45	1-C №.254、280、292
	46	2-B №.346
	47	2-C №.341
I類 2群 B種 ②b		
	48	1-B №.118
	49	1-C №.276
	50	1-B №.24
	51	2-C №.385
	52	2-C №.174
I類 2群 B種 ③		
	53	2-B №.316
	54	2-B №.179

	土器No.	取上No.
I類 2群 C種 ①		
	55	2-C №.27、313
	56	2-C №.290
	57	2-C №.219
	58	2-C №.186
	59	1-C №.85、88
	60	1-C №.249
	61	2-C №.239
I類 2群 C種 ②		
	62	1-B №.164
	63	2-B №.260
I類 2群 ナデ消し		
	64	2-B №.268、269、271、354
	65	SI-15 №.111
	66	0-B №.3
	67	1-B №.320
II類 A種		
	68	1-B №.217
	69	2-B №.285
	70	3-A №.33
	71	2-C №.121
	72	1-C №.152
II類 B種		
	73	1-B №.271
	74	1-B №.224、227
	75	1-B №.103
	76	1-B №.338
	77	1-B №.120
	78	1-B №.192
	79	1-B №.225
	80	1-B №.93
	81	2-B №.195

挿表3 繩文土器出土位置一覧表(3)

	土器No.	取上No.		土器No.	取上No.	
IV類						
	92	トレンチ		113	2-B No.169	
	93	2-B No.25		114	2-B No.58	
	95	1-C No.42		115	T-2	
	96	1-B No.59		116	1-B No.330	
	97	1-B No.44		117	2-B No.236	
VI類						
	94	2-B No.262		118	T-2	
VII類						
	90	2-B No.421		119	T-2	
	91	2-C No.123		120	1-B No.330	
III類						
	82	2-C No.311		121	2-B No.132	
	83	1-C No.256		Z I類 B種		
	84	2-C No.356		122	T-2	
	85	2-C No.188		123	0-A No.2	
	86	2-B No.230		124	T-1	
	87	2-C No.356		125	0-B No.3	
	88	SI-15 No.63		126	T-1	
	89	T-2		127	T-2	
Z I類 A種						
	102	1-B No.172		128	0-A No.14	
	103	1-B No.180		129	1-C No.170,175	
	104	表採 No.1		130	1-B No.245	
	105	1-B No.179,284,342		131	2-B No.160	
	106	1-B No.76		Z II類 A種		
	107	2-B No.32		132	T-2	
	108	0-A No.2		133	1-C No.324	
	109	2-B No.20		134	T-2	
	110	1-B No.288		Z II類 B種		
	111	2-B No.207		137	トレンチ	
	112	1-B No.6		Z II類 C種		
				101	2-C No.360	

挿表4 繩文土器数量組成表

分 類 出 土 地 点	早 期																早 期 小 計	前 期	
	I類・押型文																		
	1群		2群														A	B	
ネ ガ テ イ ブ な 模 印 文	山 形 文	A	B				C		ナ デ 消	縦 位 燃	網 目 燃	綱 目 燃	線	突	無	繩	沈	刺	尖
山 形 文	山 形 文	山 形 文	①	②-a	②-b	③	①	②	消	系 文	文	系 文	文	文	文	底			
-1-Y							1									6		7	2
-1-Z																1		1	
0-Z			2		1		2	1								2		8	3
1-Z																1		1	1
0-A				2	1		1		1							3		8	7
2-A			10	14 (3)	8 (2)		15 (2)	5 (1)				2				1		55 (8)	17
3-A	1 (1)	3	5 (3)	6 (4)	4 (3)		9 (7)	2 (1)	1 (1)	1	1					15 (12)	1 (1)	49 (35)	4 (1)
0-B			1	7	1		2	1	1							19		32	8
1-B	4 (2)	2 (1)	3 (2)	11 (4)	44 (16)	21 (7)		26 (14)	12 (4)	16 (10)	4 (4)	29 (15)	3	2		75 (25)	3 (1)	255 (105)	93 (14)
2-B	1 (1)	1	36 (19)	42 (17)	28 (14)	2 (1)	51 (23)	20 (11)	18 (10)	6 (2)	2	10	1	1 (1)	74 (20)	1		294 (119)	108 (10)
3-B			3	2	4		1			1						2	1	14	3
4-B							1									1		2	
0-C					1											1		2	3
1-C	1 (1)	3 (1)		24 (9)	38 (21)	39 (14)		42 (14)	16 (6)	12 (5)	6	18 (3)	7 (1)	1		162 (49)	1 (1)	370 (125)	40 (5)
2-C	1		1 (1)	18 (9)	36 (13)	44 (19)		55 (24)	11 (7)	17 (5)	5 (2)	2 (1)	11 (2)			221 (45)	4 (2)	426 (130)	16 (5)
3-C				3 (2)	1 (1)	2		5 (2)		2 (2)		3 (2)				14 (4)		30 (14)	
1-D					2	3			1							17		23	1
2-D					7 (2)	6 (2)		18 (1)	3	4 (1)						8		46 (6)	3
集石35							1											1	
集石36							1											1	
JSK-60									3									3	
JSK-61		1	4	8	1		11	3		1		1				2		32	1
JSK-62			2	9	3		3		1	1	2					5		26	
JSK-63									2									2	
トレンチ		2	6	11	10		9	4	7	1	7	5	1		3	1	67	50	
表採				2	5					1					20		28	5	
小計	6	7	11	125	231	182	2	254	73	91	26	65	39	5	1	653	12	1,783	365
合計	13	11		540			327	91	26	65	39	5	1	653	12	1,783	365		

註……()内の数字は暗茶褐色ローム質粘土層からの出土土器数を表す。

2 石 器

今回の調査において、礫石器は、磨石26、敲石15、砥石8、石皿2、石斧2、石錐1の計54個体が、剝片石器は、石鏃13、2次加工のある剝片6の計19個体が出土している。その他に剝片を356片検出した。礫石器は安山岩系の石材を用いるものが多く、剝片石器は黒曜石製のものが多い。数量的には磨石、敲石の類が多く、石斧や石錐は少なかった。

(1) 磨石 (挿図21・S 1～S 2、S 4 挿図41・S 6～S 12 図版20・21)

表面に凹みがなく、摩耗痕や周縁部に敲打痕が認められるものを磨石とした。重量は最小で153g(完形)、最大で560gとばらつきがある。概ね安山岩系の石材を用いるが、流紋岩、閃緑岩、花崗岩を用いたものもある。摩耗痕は全面に一様に及ぶものと、部分的に使用されたため、面をなしたものと二様を示す。周縁部の敲打痕は持つものと持たないものとがある。S 7は片面が火を受けている。

(2) 敲石 (挿図21・S 3、挿図43・S 13～S 18 図版20・21)

表面に敲打による凹みを有するもので、摩耗痕や周縁部に敲打痕が認められるものもある。重量は最小で229g、最大で592gを測る。主として安山岩系の石材を用いるが、1点のみ花崗岩を用いたものがみられた。敲打による凹みは、片面のみにみられるものと、両面にみられるものとがある。

(3) 石皿 (挿図22・S 5 図版20)

S 5はJ S K-60出土のものである。黒雲母角閃石安山岩製で重量は11.9kgを測る。 $\frac{1}{2}$ を欠くが、両面に摩耗による凹みがみられ、特に中央部は皿状に深くなっている。

(4) 砥石 (挿図43・S 19、S 20、挿図44・S 21～S 23 図版22)

小型のものと大型のものとがある。面全体を砥面とするものと、一部溝状の砥面を残すものとがあり、S 20においては2本の平行に走る溝状の砥面が明瞭である。重量は最小で496g、最大で8.6kgを測り、石材は概ね石英安山岩を用いている。

(5) 石斧 (挿図44・S 24、S 25 図版22)

S 24は定角式磨製石斧である。両側縁および頭部が研磨されており、石斧正面との間に稜をなす。細粒砂岩製で重量は143gを測る。S 25は乳棒状磨製石斧である。刃部は両刃のいわゆる蛤刃で、先端部の刃が側縁部へ続き稜をなす。安山岩製で重量は77gを測る。

(6) 石錐 (挿図44・S 26 図版22)

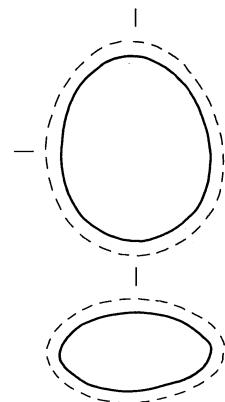
細長い棒状の石材の両端を打ち欠いている。角閃石安山岩製で重量16gを測る。

(7) 石鏃 (挿図45・Z 1～Z 13 図版21)

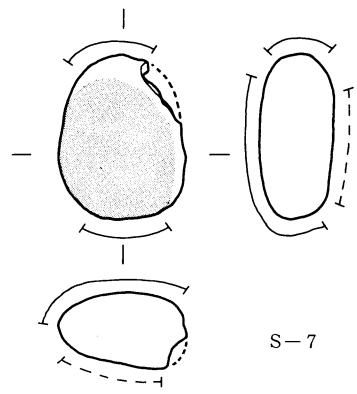
Z 1～Z 11は黒曜石製の凹基無茎鏃である。完形品の平均重量は0.6gである。Z 12はサヌカイト製で重量は5gを測り、未製品と思われる。Z 13は黒曜石製で重量は3.5gを測り、基部を欠くが柳葉状を呈すると思われる。

(8) 2次加工のある剝片 (挿図46・H 1～H 4、挿図47・H 6 図版21)

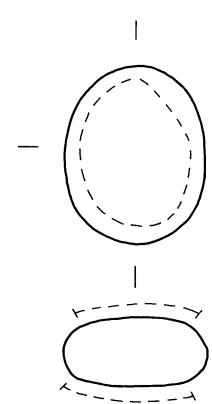
H 1、H 2はサヌカイト製で、矩形の剝片の1辺を片側から打ち欠き、刃部をなしていない。重量はH 1が18.9g、H 2が11.2gを測る。H 3、H 4は片辺がナイフ状の刃部をな



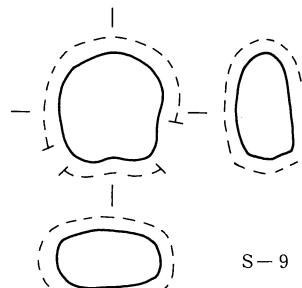
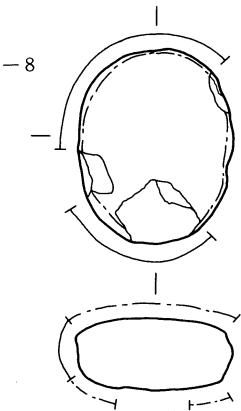
S-6



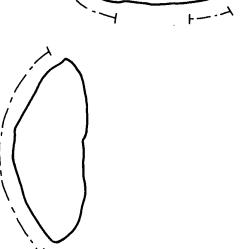
S-7



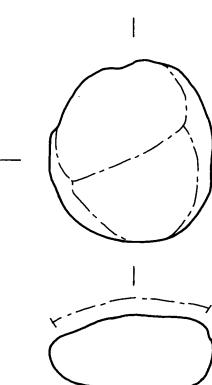
S-8



S-9

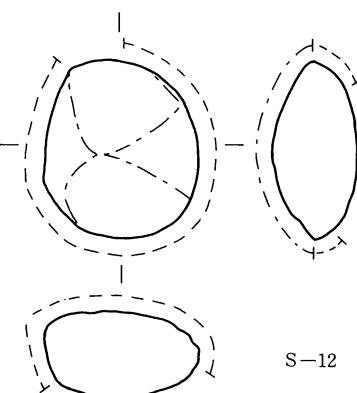


S-10



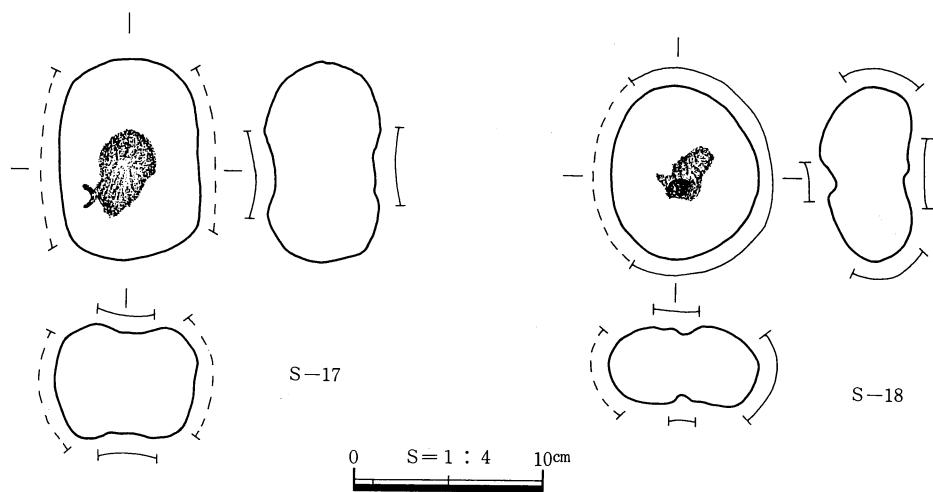
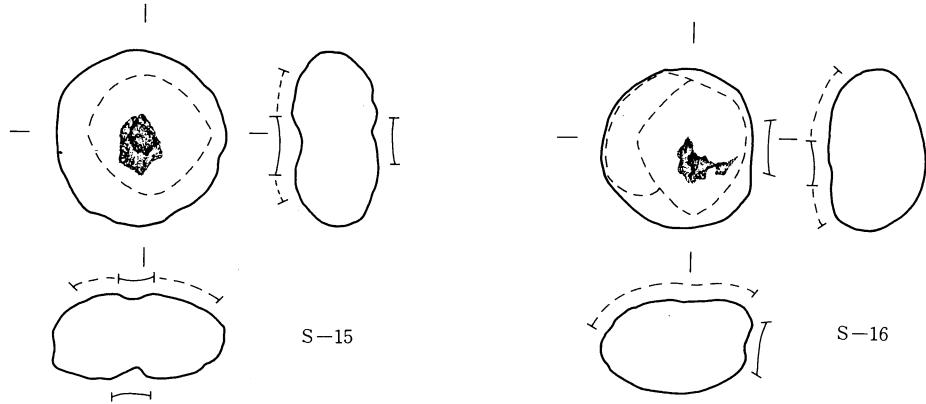
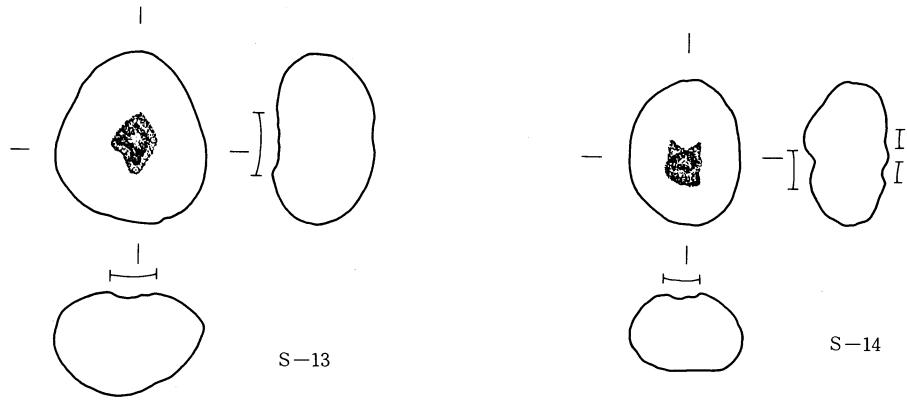
S-11

0 S = 1 : 4 10cm

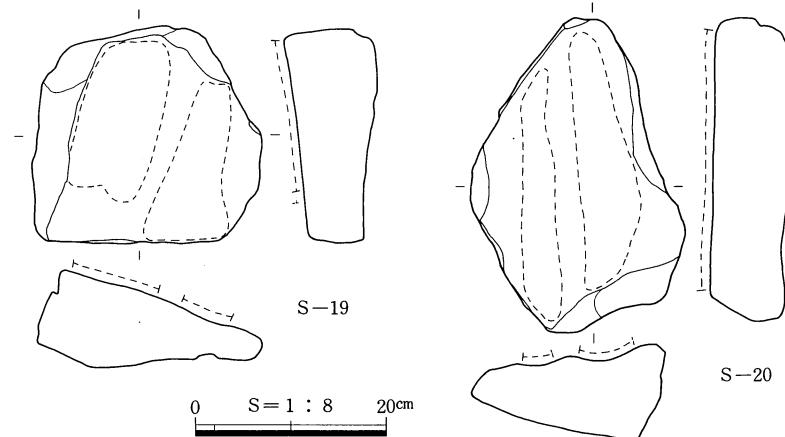


S-12

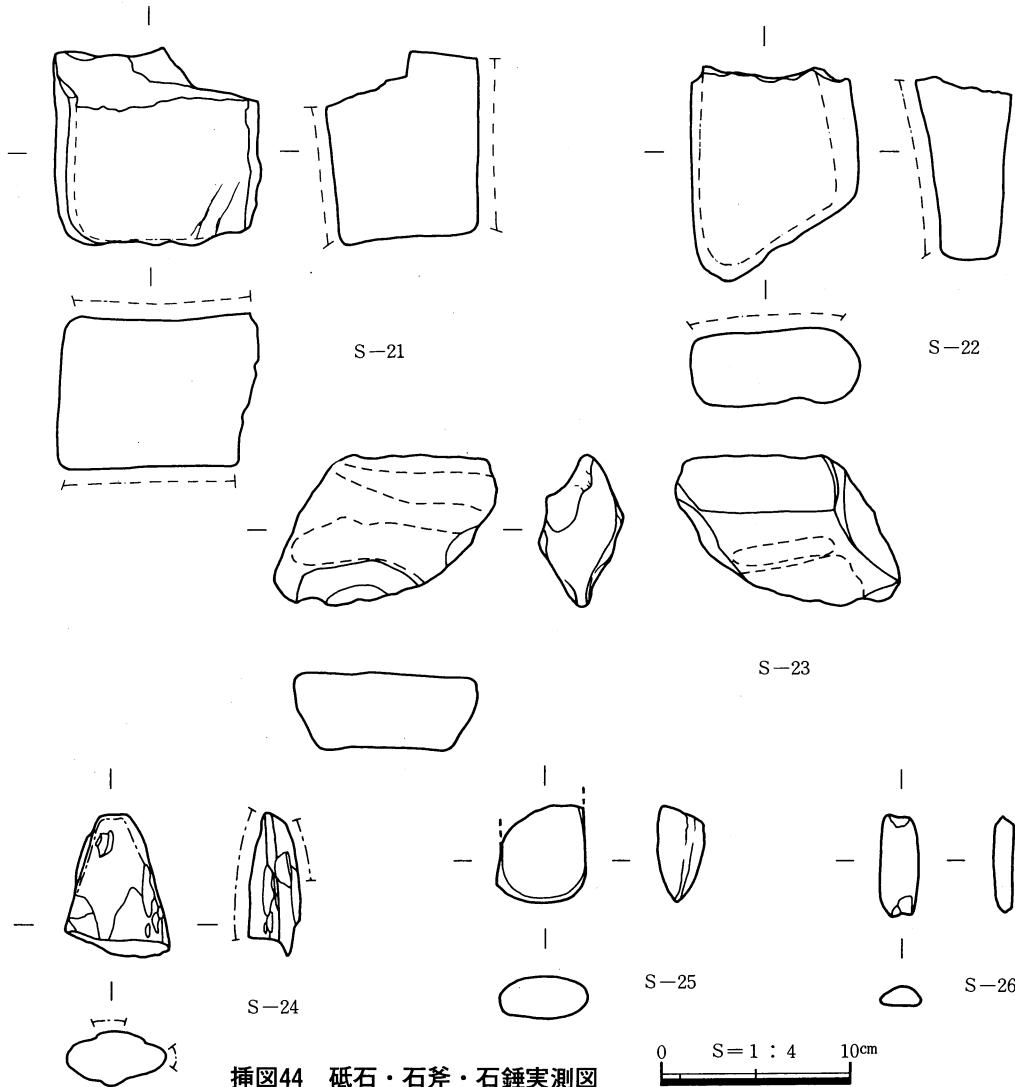
挿図41 磨石実測図



挿図42 敲石実測図



挿図43 砥石実測図



挿図44 砥石・石斧・石錐実測図

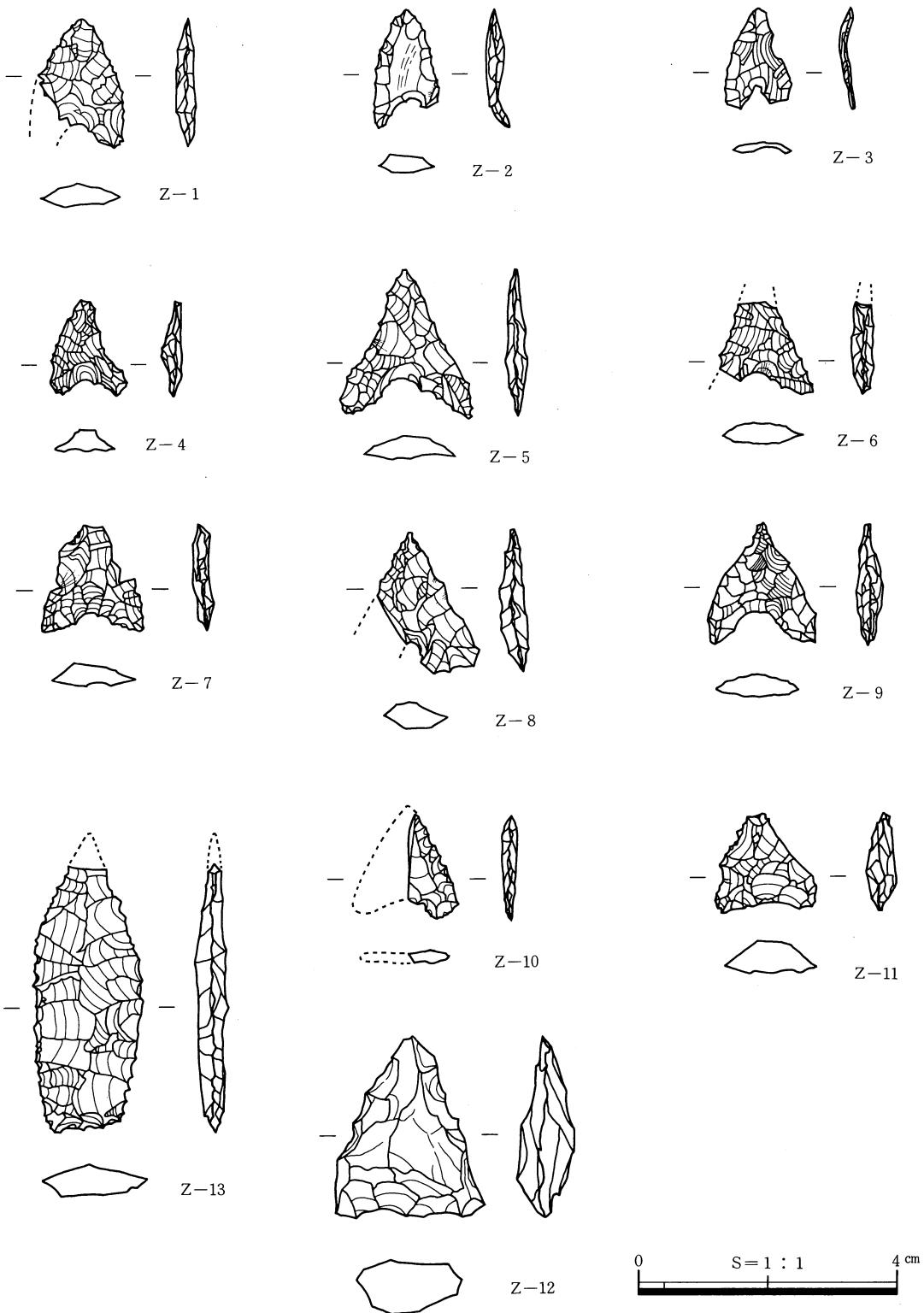
すもので、H 3 はサヌカイト製で重量 1 g、H 4 は黒曜石製で重量 3 g を測る。H 5、H 6 は尖頭を呈し、両側刃が刃部をなす。H 5 はサヌカイト製で重量 10.5 g、H 6 は黒曜石製で重量 8.7 g を測る。

礫石器は安山岩系の石材を多く用いており、それらは当遺跡の立地する扇状地の堆積物に原料を求められる。しかし、磨石、敲石に一部用いられた花崗岩は上福万扇状地堆積物には含まれないものであり、当遺跡の近辺では日野川の氾濫原に求められるものである。^{註1} 石器の石材を当地で調達せず、他地から人為的に搬入したことの理由は不明だが、このことは、当時の上福万遺跡における日常的な行動範囲を示す一端の事象であると言えよう。

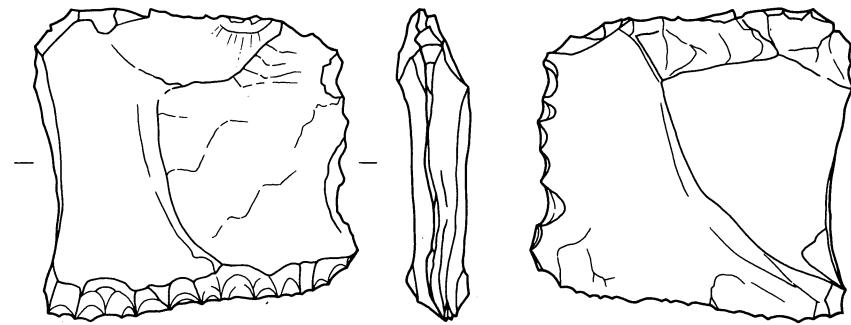
註1 赤木三郎「上福万遺跡の自然環境」『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』、鳥取県教育文化財団調査報告書17、1985年

插表5 石器出土グリッド一覧表

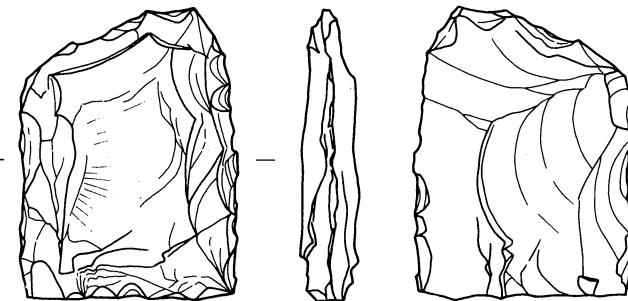
	磨 石	敲 石	砥 石	石 盆	石 斧	石 錘	計
— 1 —Y	1						1
3 —A	1	1					2
0 —B	1	2					3
1 —B	4	1			1	1	7
2 —B	8	4	1	1			14
1 —C	2	4			1		7
2 —C	3	1	5	1			10
3 —C	2		1				3
第1トレンチ	1						1
第2トレンチ	1						1
表 採	2	2	1				5
計	26	15	8	2	2	1	54



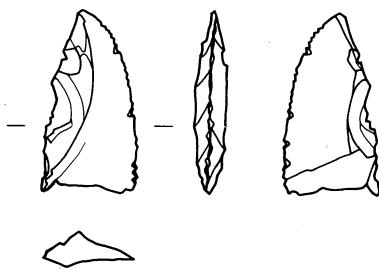
挿図45 石 鋸 実 測 図



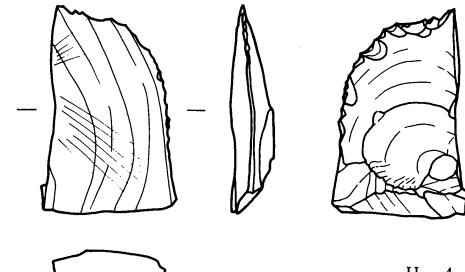
H-1



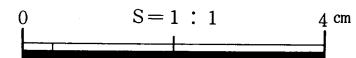
H-2



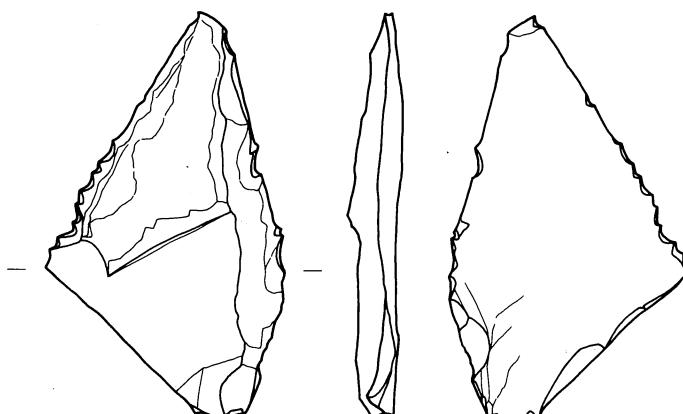
H-3



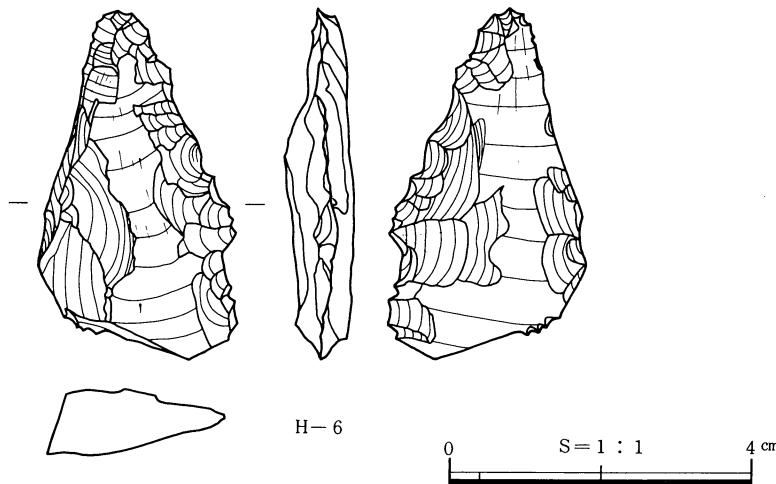
H-4



挿図46 二次加工のある剝片実測図1



H-5



H-6

0 S = 1 : 1 4 cm

挿図47 二次加工のある剝片実測図 2

挿表6 石器一覧表

No.	出土地区	分類	重量·g	石 材	No.	出土地区	分類	重量·g	石 材
S 1	集石 33	磨	560	黒雲母角閃石安山岩	Z 1	1-B、No.279	石 鎌	0.5	黒曜石 B
S 2	集石 35	磨	153	角閃石安山岩	Z 2	2-C、No.394	石 鎌	0.5	黒曜石 B
S 3	JSK-61	敲	592	黒雲母角閃石安山岩	Z 3	SI-16、No.11	石 鎌	0.2	黒曜石 C
S 4	JSK-61	磨	143	角閃石安山岩	Z 4	第1トレンチ	石 鎌	0.4	黒曜石 B
S 5	JSK-60	石	11,925	黒雲母角閃石安山岩	Z 5	SI-16、No.12	石 鎌	1.0	黒曜石 A
S 6	1-C、No.315	磨	546	閃 緑 石	Z 6	第1トレンチ	石 鎌	0.5	黒曜石 B
S 7	3-C、No. 25	磨	283	黒雲母角閃石安山岩	Z 7	4-B、No. 39	石 鎌	0.5	黒曜石 B
S 8	-1-Y、No. 8	磨	349	角閃石安山岩	Z 8	1-B、No.326	石 鎌	0.7	黒曜石 B
S 9	2-C、No.429	磨	123	黒雲母角閃石安山岩	Z 9	表採、No.18	石 鎌	0.7	黒曜石 A
S10	1-B、No. 36	磨	555	優白質花崗岩質岩石	Z10	0-A、No. 4	石 鎌	0.4	黒曜石 B
S11	3-C、No. 9	磨	359	流 紋 岩	Z11	0-B、No. 6	石 鎌	0.9	黒曜石 C
S12	0-B、No. 2	磨	423	角閃石安山岩	Z12	2-C、No.444	石 鎌	5.0	サヌカイト
S13	0-B、No. 14	敲	451	角閃石安山岩	Z13	2-C、No.130	石 鎌	3.5	黒曜石 B
S14	2-B、No.348	敲	229	黒雲母角閃石安山岩	H 1	2-C、No.454	2次加工のある剝片	18.9	サヌカイト
S15	3-A、No. 42	敲	421	黒雲母角閃石安山岩	H 2	第2トレンチ	2次加工のある剝片	11.2	サヌカイト
S16	1-C、No.171	敲	440	黒雲母角閃石安山岩	H 3	1-C、No. 4	2次加工のある剝片	1.0	サヌカイト
S17	1-C、No.229	敲	592	黒雲母角閃石安山岩	H 4	3-B、No. 12	2次加工のある剝片	3.0	黒曜石 B
S18	1-C、No.300	敲	471	安 山 岩	H 5	-1-Y、No. 3	2次加工のある剝片	10.5	サヌカイト
S19	2-C、No.417	砥	7,150	石英安山岩	H 6	1-C、No.105	2次加工のある剝片	8.7	黒曜石 B
S20	表採、No.26	砥	8,600	安山岩(中生代火成岩か)					
S21	3-C、No. 35	砥	1,592	石英安山岩					
S22	2-C、No.138	砥	714	石英安山岩					
S23	2-C、No.452	砥	496	石英安山岩					
S24	1-B、No. 74	石 斧	143	細粒砂 岩					
S25	1-C、No.158	石 斧	77	安 山 岩					
S26	1-B、No.286	石 锤	16	角閃石安山岩					

註 ●石材鑑定は赤木三郎氏(鳥取大学教育学部)による。

●黒曜石A、B、Cの分類については前報告書中「第3章第1節上福万遺跡の自然環境」赤木三郎 参照のこと。

挿表7 石器石材一覧表

分類 石材	磨 石	敲 石	砥 石	石 皿	斧 鎌	2次加工のある剝片 鏡	石 計	黒曜石		サヌカイト		ジャスパー		石英		計	
								-1-Y	1(1)	-1-B	1(1)	-1-C	2-D	第1トレントチ	第2トレントチ	表 採	
黒雲母角閃石安山岩	8	7	1				16	2-A	10(2)	1							4
角閃石安山岩	5	5		1			11	3-A	1	2							8(1)
石英安山岩	2		7	1			10	0-B	11(1)								1(1)
安山岩	4	2		1			7	1-B	50(2)	14							11(2)
安山岩(中生火山岩か)			1				1	2-B	87	7	1						3
流紋岩		1					1	3-B	3(1)		1						64(2)
閃綠岩		3					3	4-B	1(1)								95
花崗岩		2	1				3	0-C	6	1							4(1)
優白質花崗岩質岩石		1					1	1-C	32(2)	9(1)							1(1)
細粒砂岩				1			1	2-C	81(2)	8(2)	2	1					7
サヌカイト							4	4-C	2								1(1)
黒曜石A							4	5	2-D	2							2
黒曜石B							2	2	第1トレントチ	4(1)							4(1)
黒曜石C							2	8	10	9	1(1)						10(1)
計	26	15	8	2	2	1	6	13	73	326(14)	44(5)	4	1				14(1)
																	375(19)

挿表8 剥片出土グリッド一覧表

分類 石材	磨 石	敲 石	砥 石	石 皿	斧 鎌	2次加工のある剝片 鏡	石 計	黒曜石		サヌカイト		ジャスパー		石英		計	
								-1-Y	1(1)	-1-B	1(1)	-1-C	2-D	第1トレントチ	第2トレントチ	表 採	
黒雲母角閃石安山岩	8	7	1				16	2-A	1								4
角閃石安山岩	5	5		1			11	3-A	1	2							8(1)
石英安山岩	2		7	1			10	0-B	11(1)								1(1)
安山岩	4	2		1			7	1-B	50(2)	14							64(2)
安山岩(中生火山岩か)			1				1	2-B	87	7	1						95
流紋岩		1					1	3-B	3(1)		1						4(1)
閃綠岩		3					3	4-B	1(1)								1(1)
花崗岩		2	1				3	0-C	6	1							7
優白質花崗岩質岩石		1					1	1-C	32(2)	9(1)							41(3)
細粒砂岩				1			1	2-C	81(2)	8(2)	2	1					92(4)
サヌカイト							4	4-C	2								2
黒曜石A							4	5	2-D	2							2
黒曜石B							2	2	第1トレントチ	4(1)							4(1)
黒曜石C							2	8	10	9	1(1)						10(1)
計	26	15	8	2	2	1	6	13	73	326(14)	44(5)	4	1				14(1)
																	375(19)

註 ()内の数字は、製品の数量を示す。

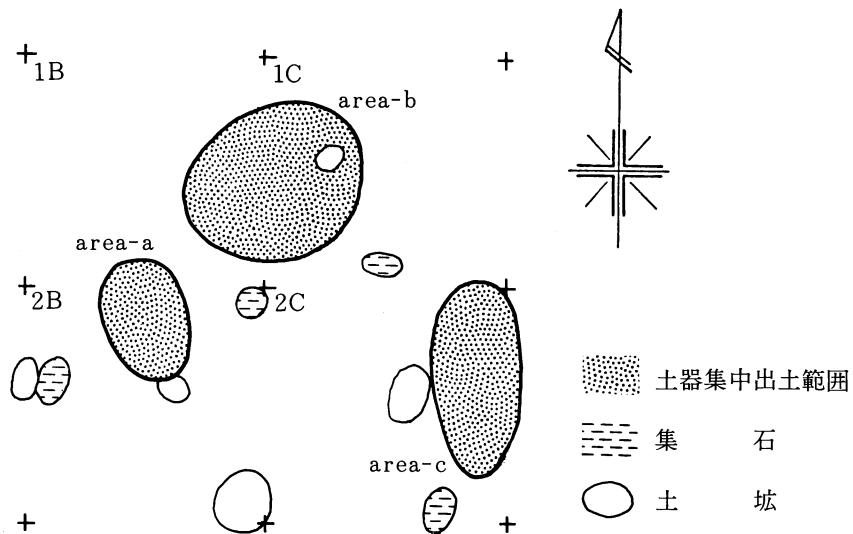
第3節 遺物の出土状況

今回の調査では、縄文土器2148片、石器73点、剝片356片が検出された（挿表4・6・8）。

第1章第2節「調査の経過及び概要」で述べたように、暗茶褐色ローム質粘土層を縄文時代遺物包含層と把握したが、その上層のクロボク層中にも多量の縄文土器、石器が古墳時代以降の遺物と混在していた。後世の攪乱によるものと思われ、クロボク層中の縄文時代遺物については、そのほとんどが2次的に移動したものと考える。よって2次的な移動の可能性が少なく、ほぼ原位置を保っていると思われる暗茶褐色ローム質粘土層中の土器のみDot-Mapに出土地点を示した（付図1、2）。しかしクロボク層の下部も縄文時代の文化層に含まれる可能性はある。

前章で述べたように調査地は大幅な削平、攪乱を被っており、暗茶褐色ローム質粘土層が完全に遺存しているのはBライン以東、3ライン以北の範囲、1B、2B、1C、2Cの各グリッドである。暗茶褐色ローム質粘土層中出土の土器は575片であったが、そのうちの9割に当る513片がこれら4グリッドから出土している。出土ポイントは、礫群をとりまく3箇所の地点に集中する。2Bグリッドの北寄り部分、6.5m×4mの橢円形状をなす範囲（area-a）、1B～2Bラインをまたいで1B、2B両グリッドに及ぶ径6.5mの範囲（area-b）、2Cグリッドの東側7m×3mの橢円形状を呈する範囲（area-c）である。エリアbにおいては、特に網目状施文の撚糸文が他のエリアに対して数量的に卓越し、またエリアa、bは前期の土器が集中する。

これらのエリアは集石や土塙をとりまき、かつ礫群を避けて存在している。このような状況からエリアは居住空間を示すものと考える。



挿図48 土器出土状況図

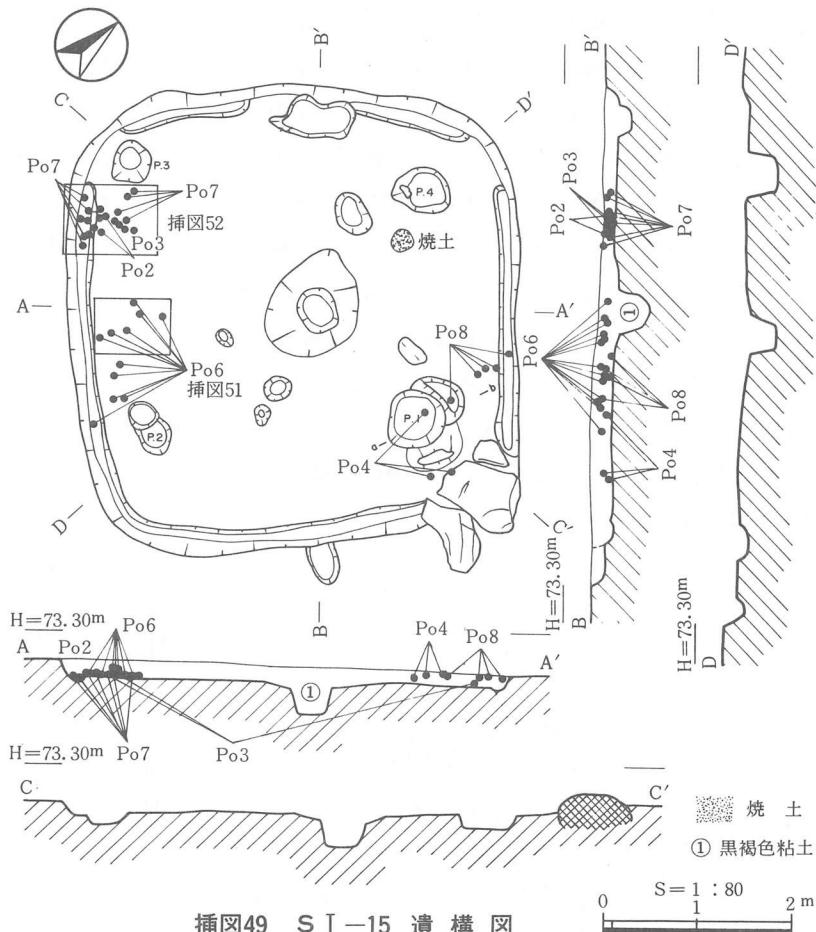
第3章 古墳時代以降の遺構と遺物

1 竪穴住居

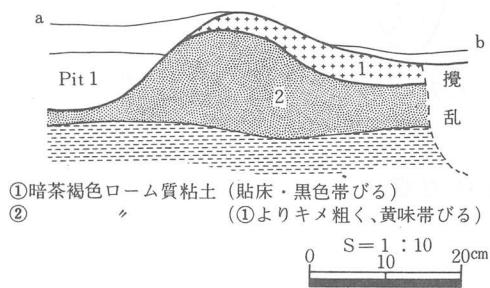
竪穴住居は2棟を検出した。前回の調査と合わせると計16棟となる。

S I-15 (挿図49~53 図版23、24)

位 置 2B・2Cグリットにわたり位置する。周辺には、S B-23が存在する。

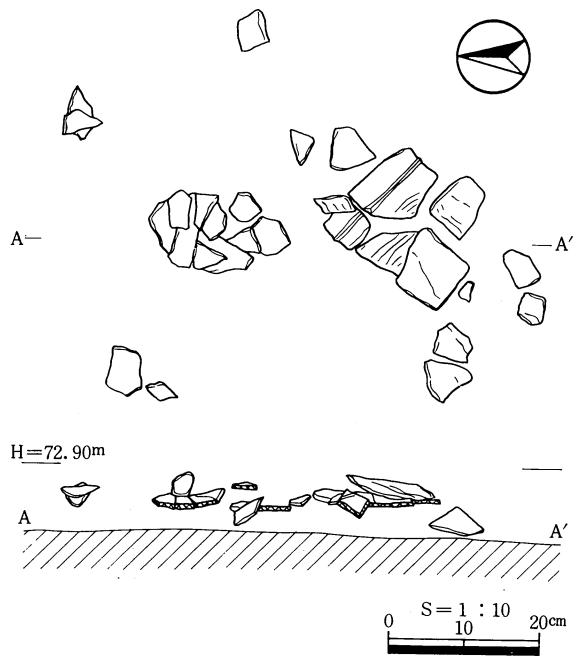


H=73.00m

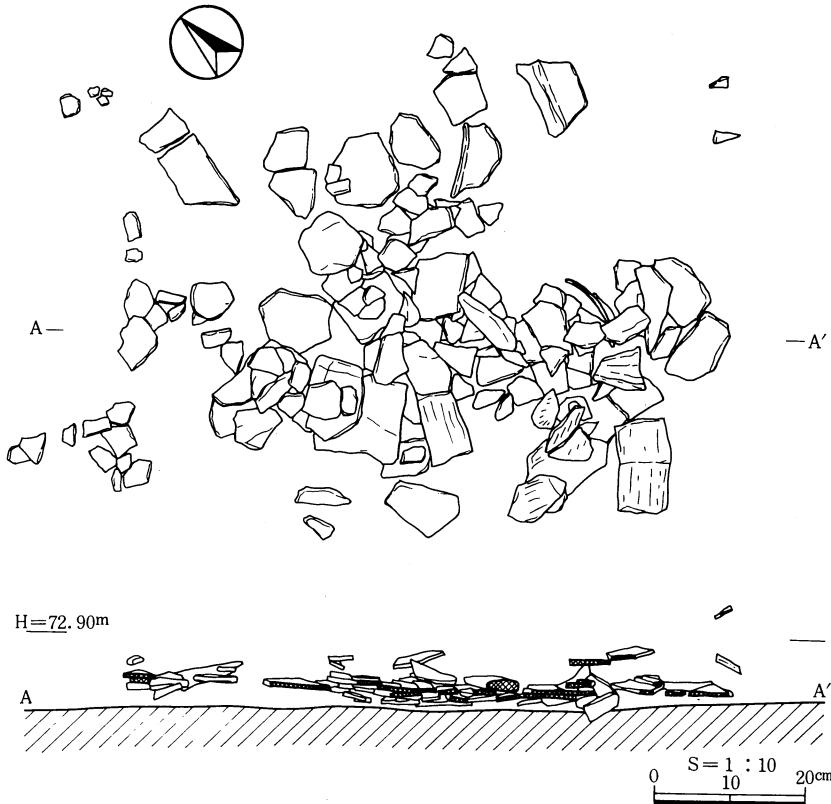


挿図50 S I-15 Pit 1 土盛断面図

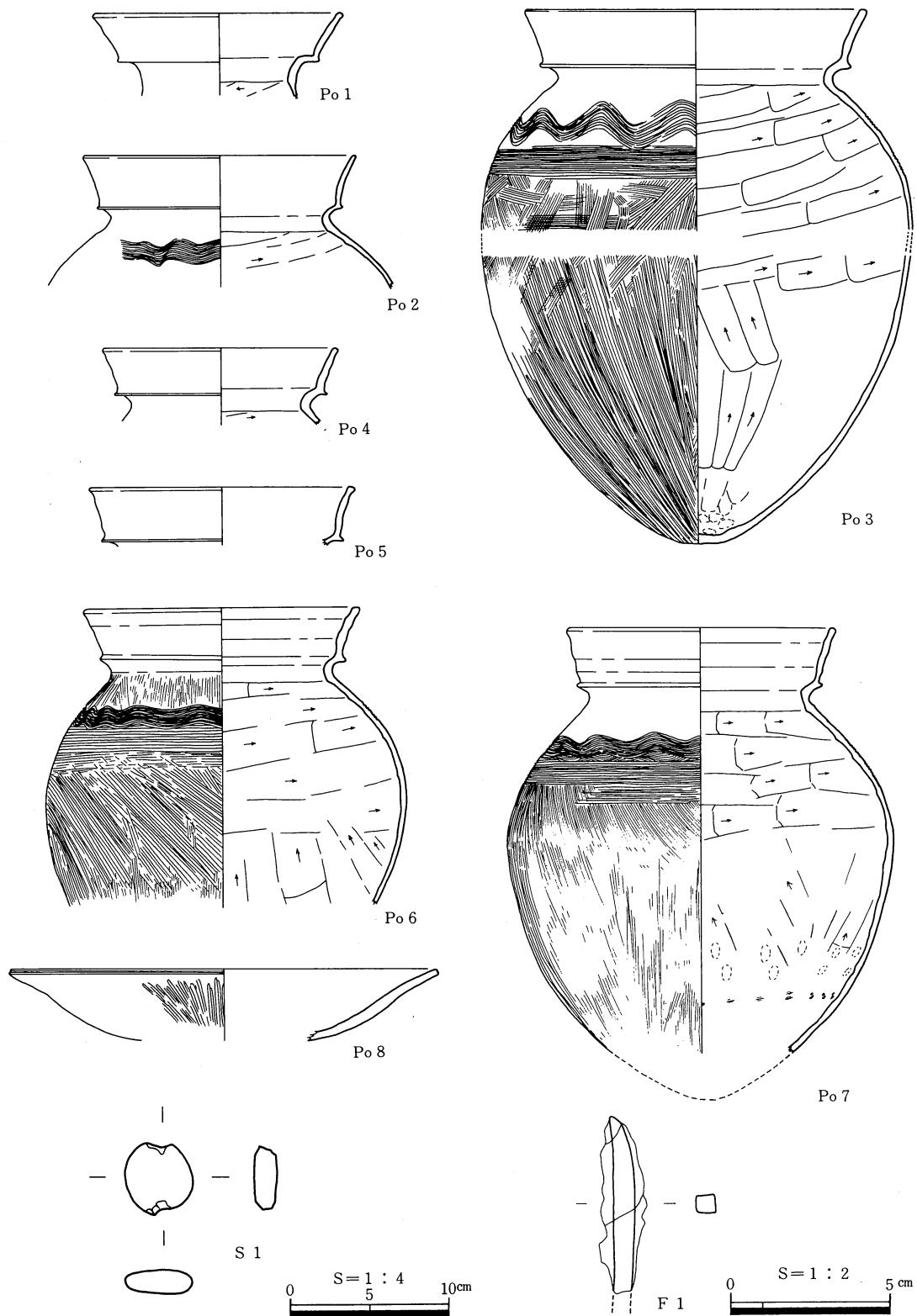
形 態 長辺4.93m、短辺4.75m
 の隅丸方形の住居で、床面
 積は約23.4m²である。残存
 壁高は北側で20cmを測る。
 側 溝 断面形がU字状を呈する
 幅10cm、深さ5cm程の溝が
 ほぼ全周する。
 柱 六 主柱穴はP1～P4の4
 本で、主柱穴間距離はP1
 から2.80m・2.95m・3.16
 m・2.42mを測る。各主柱
 穴の規模は、P1で60cm×
 60cm-62cm、P2で30cm×
 28cm-10cm、P3で44cm×
 40cm-24cm、P4で62cm×
 49cm-60cmを測る。各主柱
 穴とも柱痕は認められなか



挿図51 SI-15 遺物出土状況図1



挿図52 SI-15 遺物出土状況図2



挿図53 SI-15 遺物図

った。また、P 1 はその周縁に暗茶褐色ローム質粘土による高さ 7 cm 程度の盛土を施す。P 2 でも盛土の痕跡を確認したが、これは柱穴の上部を被覆し、柱と床面との隙間を目貼りしたことの痕跡と思われる。

特殊ピット 特殊ピット P 5 は住居跡のほぼ中央に位置し、平面形は橢円形を呈する。規模は、110cm × 98cm - 30cm を測る。

土層 埋土は黒褐色粘質土一層で、床面は暗茶褐色ローム質粘土を叩きしめた床が見られる。また、焼土面を 1 ケ所確認した。

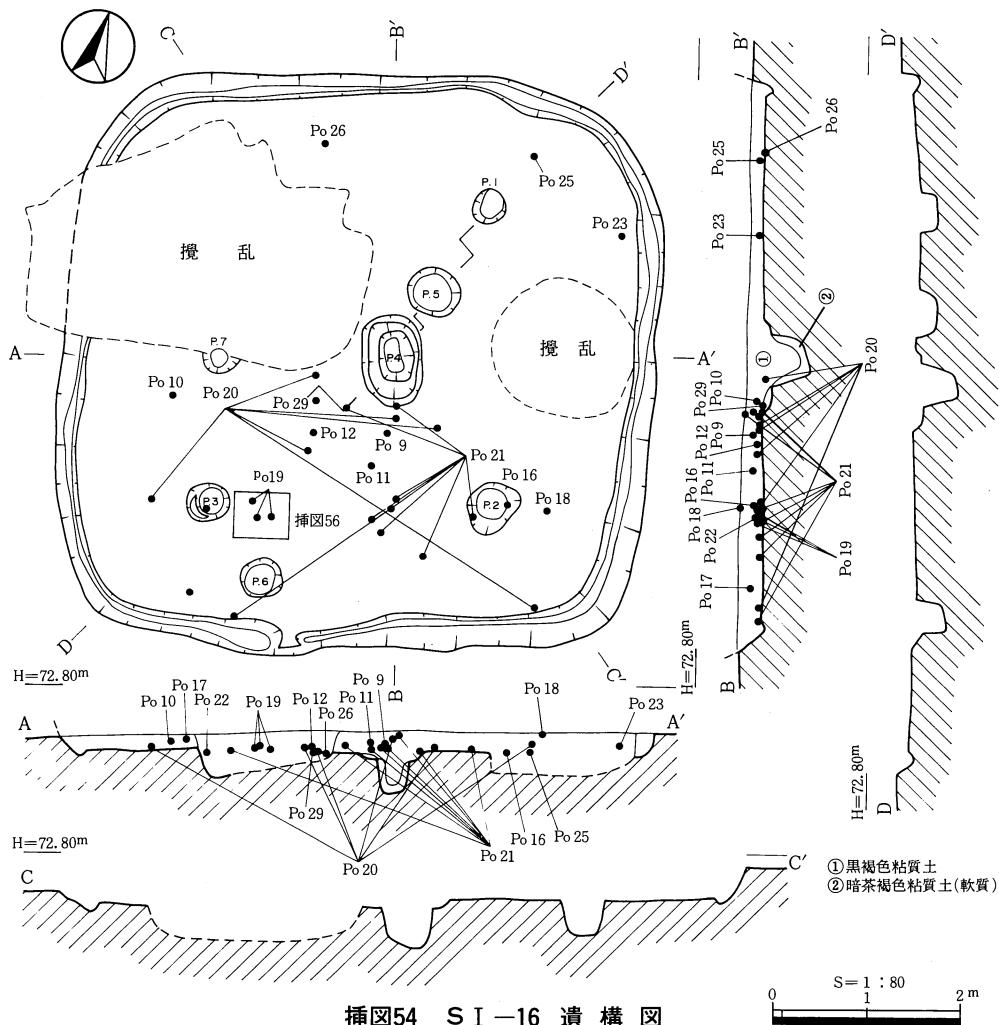
遺物 埋土から床面にかけて、特に西側隅で多数の土師器片、鉈片（F 1）を検出した。壺（Po 1）、甕（Po 2 ~ Po 7）、高坏（Po 8）、石錘（S 1）等が出土している。

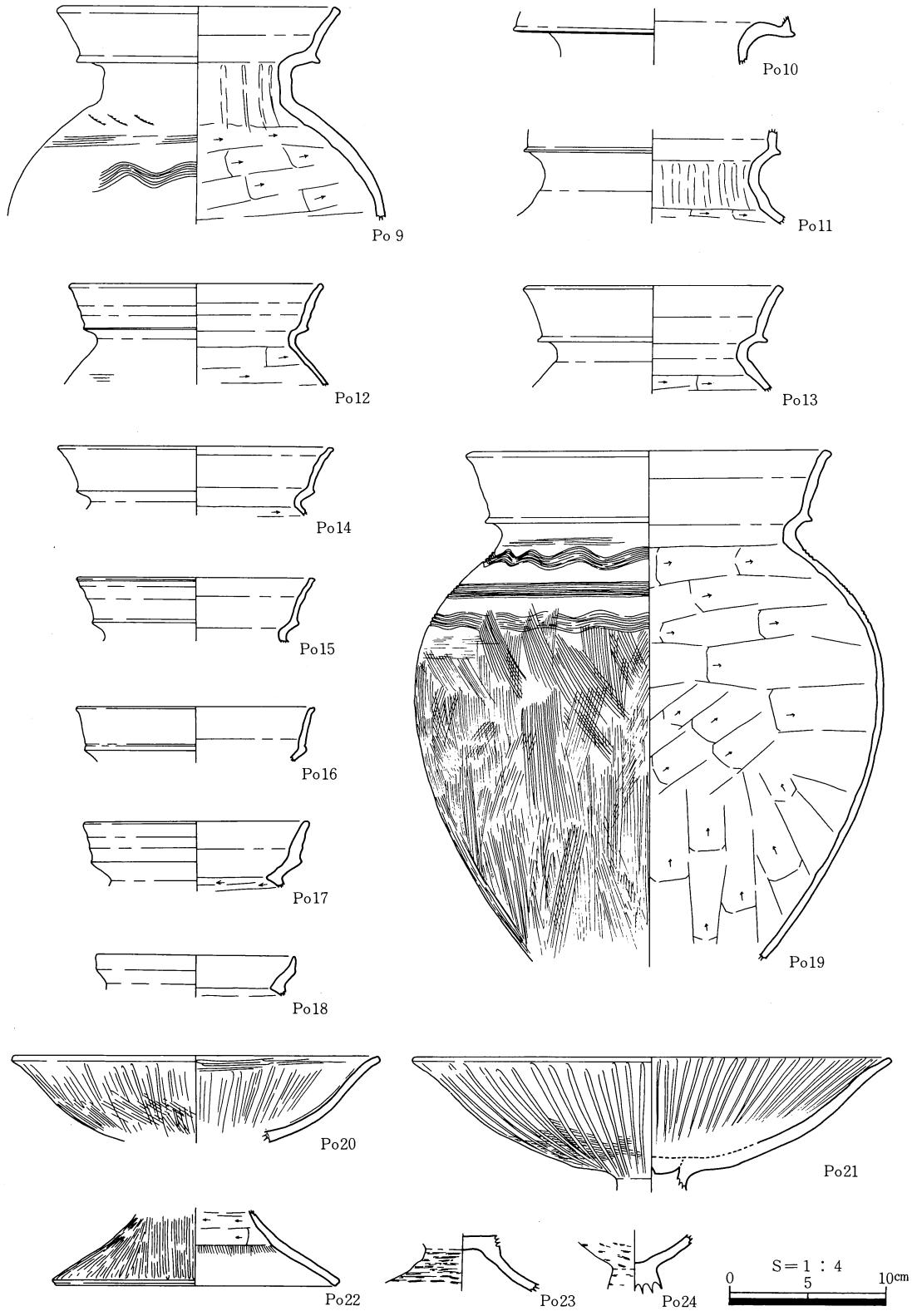
時期 出土遺物より古墳時代前期のものと考える。

S I - 16 (挿図54 図版16)

位置 2 A グリッドの西側に位置する。

形態 長辺 5.78 m、短辺 5.6 m の隅丸方形の住居で、床面積は 38m² である。残存壁高は、





挿図55 S I - 16 遺物図 1

南側で25cmを測る。西側、東側では攪乱を被る。

側溝 断面形がU字状を呈する幅10cm、深さ5cm程の溝が全周する。

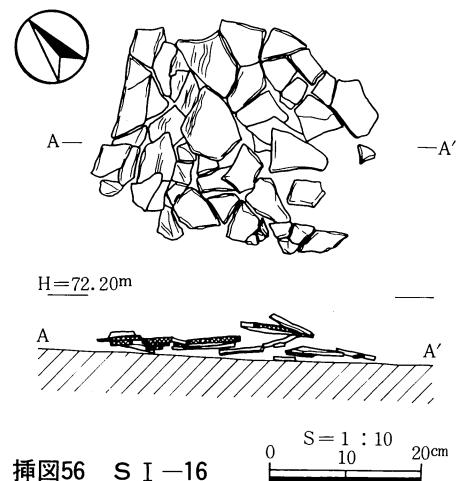
柱穴 主柱穴はP1～P3の3本と、西側隅の攪乱部に存在したと推定される1本の計4本と考えられる。主柱穴間距離はP1～P2で3.2m、P2～P3で3mを測る。各主柱穴の規模は、P1で38cm×32cm—20cm、P2で57cm×46cm—40cm、P3で42cm×34cm—35cmを測る。また、補助柱穴と考えられるP5(55cm×50cm—12cm)、P6(43cm×42cm—19cm)、P7(40cm×—24cm)を検出している。

特殊ピット 特殊ピットP4は住居跡のほぼ中央に位置し、平面形が方形を呈する。二段掘りの構造である。規模は97cm×63cm—50cmを測る。

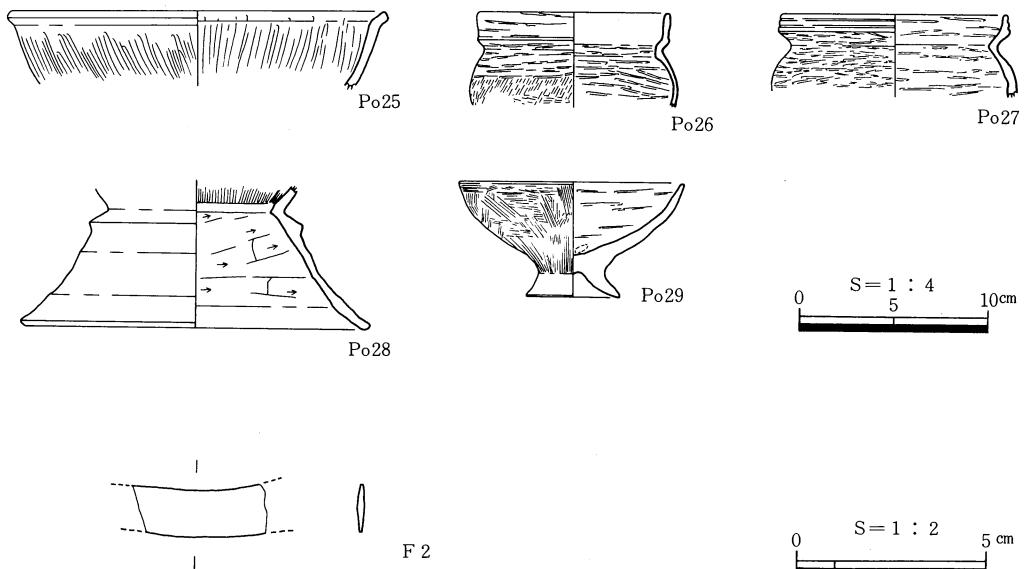
土層 埋土は黒褐色粘質土一層で、貼床は確認できなかった。

遺物 埋土から床面にかけて多数の土師器片と、床に貼り付いた状態で鉄片を数片検出した。壺(Po9～Po11)、甕(Po12～Po19)、高坏(Po20～Po24)、鉢(Po25)、小型壺(Po26～Po27)、器台(Po28)、低脚坏(Po29)、刀子(F2)等が出土している。

時期 出土遺物より古墳時代前期のものと考える。



挿図56 S I - 16
(Po19) 遺物出土状況図



挿図57 S I - 16 遺物図2

插表9 積穴住居一覧表

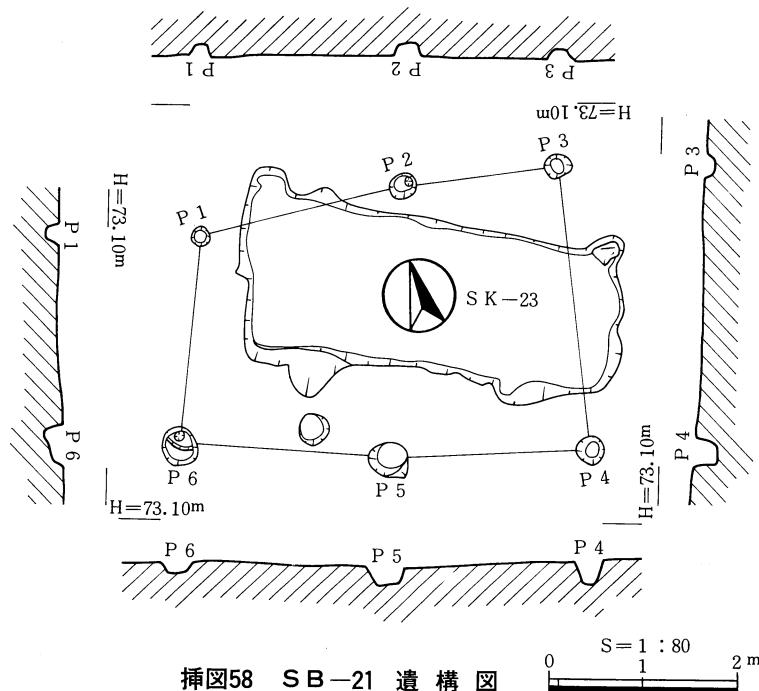
遺構番号	平面形	規模(m)	床面積(m ²)	残存壁高(cm)	主柱穴	側溝	貼床	中央ピット	出土遺物	時期
01	隅丸方形	5.55×5.35	30	29	4	あり	なし	あり (二段掘り)	甕、高坏、砥石	古墳時代前期
02	隅丸方形	4.80×4.72	22.66	—	4	あり	なし	あり (二段掘り)	壺、甕、高坏、鼓形器台、甑形土器	ク
07	隅丸五角形	6.52×6.52	33	60	5	あり		02と 共有	石錘、砥石、磨石、石製玉	ク
03	隅丸方形	4.80×4.68	22	65	4	あり	なし	あり (二段掘り)	甕、高坏、低脚坏、ガラス製小玉、砥石 軽石	ク
04	隅丸五角形	7.20×6.72	38	36	5	あり	なし	あり (二段掘り)	壺、甕、高坏、甑型土器	ク
05	隅丸五角形	8.00×7.55	47	45	5	あり	なし	あり	甕、高坏、鼓形器台 石錘	ク
06	隅丸方形	4.72×4.60	22	37	4	あり	なし	あり (二段掘り)	甕、低脚坏	ク
08	方形	8.50×7.70	26	20	2	あり	なし	あり	甕、高坏	ク
09	隅丸方形	3.44×2.80	9	26	2	あり	なし	なし	甕、磨石、砥石、平石	ク
10	隅丸方形	—	1.8	24	推定 2	なし	なし	なし	甕、高坏、低脚坏	ク
11	方形	6.40×5.84	37	25	4	あり	なし	あり	壺、小型丸底壺、甕 平石	ク
12	円形	4.80×4.80	18	70	4	あり	なし	あり	壺、甕、高坏、 低脚坏、鼓形器台、	ク
13	隅丸方形	5.04×4.80	24		4				砥石	ク
14	隅丸方形	4.90×4.60	22	10	4	なし	なし	なし	須恵器蓋、甕	古墳以降～ 奈良時代
15	隅丸方形	4.93×4.75	23.4	20	4	あり	あり	あり	壺、甕、高坏、鉈片	古墳時代前期
16	隅丸方形	5.78×5.60	38	25	推定 4	あり	なし	あり (二段掘り)	壺、甕、高坏、鉢、 小型壺、器台、 低脚坏、鉄片	ク

2 堀立柱建物 (SB)

堀立柱建物は、古墳時代のもの2棟、不明のもの2棟を検出した。前回の調査と合わせると計24棟となる。

SB-21 (挿図58 図版26)

- 位 置 1 C グリッドの南側に位置する。SK-23と切り合い関係にある。
- 形 態 梁間1間(3.05m)、桁間2間(4.35m)の建物で、床面積は、 13.27m^2 を測る。柱穴間距離はP1から1.5m、1.38m、2.05m、1.33m、1.5m、2.03mで、主軸方向はN-78°-Wである。
- 柱 穴 各柱穴の規模は、P1で $20\text{cm} \times 20\text{cm} - 12\text{cm}$ 、P2で $26\text{cm} \times 26\text{cm} - 24\text{cm}$ 、P3で $26\text{cm} \times 26\text{cm} - 11\text{cm}$ 、P4で $29\text{cm} \times 29\text{cm} - 26\text{cm}$ 、P5で $42\text{cm} \times 39\text{cm} - 20\text{cm}$ 、P6で $42\text{cm} \times 37\text{cm} - 12\text{cm}$ を測る。各柱穴からは柱痕は確認されなかった。
- 土 層 各柱穴とも埋土は、黒褐色粘質土一層である。
- 遺 物 検出しなかった。
- 時 期 不明である。
- 特筆事項 SK-23が建物内に存在しており何らかの付属施設の可能性も考えられる。



SB-22 (挿図59 図版26)

- 位 置 1 B、2 B グリッドにまたがって位置する。周辺には、SI-15、SB-23が存在する。
- 形 態 梁間1間(2.05m)、桁間2間(2.87m)の建物で、床面積は約 5.88m^2 を測る。柱穴間距離はP1から1.5m、1.38m、2.05m、1.5m、2.03mで、主軸方向はN-6°-Wである。

Eである。

柱穴 各柱穴の規模は、P 1 で34cm×30cm-13cm、P 2 で36cm×33cm-10cm、P 3 で44cm×42cm-17cm、P 4 で40cm×39cm-20cm、P 5 で32cm×32cm-30cm、P 6 で35cm×34cm-11cmを測る。各柱穴からは柱痕は確認されなかった。

土層 各柱穴とも埋土は、黒褐色粘質土一層である。

遺物 検出しなかった。

時期 不明である。

SB-23 (挿図60、図版26)

位置 2 B グリッドに位置する。周辺には S I - 15 が存在する。

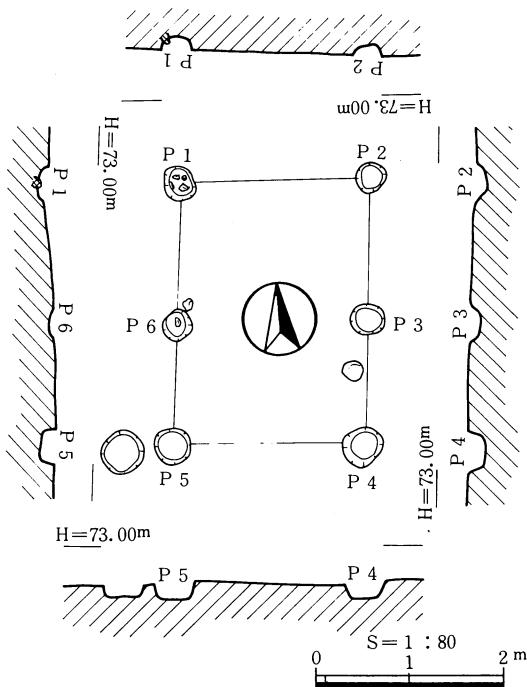
形態 梁間1間 (1.97m)、桁間2間 (3.85m) の建物で、床面積は7.58m²を測る。柱穴間距離は P 1 から 2.06m、1.88m、1.85m、2 m、1.8 m、1.97 m で主軸方向は N-30°-E である。

柱穴 各柱穴の規模は、P 1 で64cm×46cm-20cm、P 2 で69cm×56cm-21cm、P 3 で50cm×44cm-26cm、P 4 で40cm×38cm-32cm、P 5 で32cm×32cm-14cm、P 6 で62cm×58cm-15cmを測る。各柱穴からは柱痕は検出されなかった。

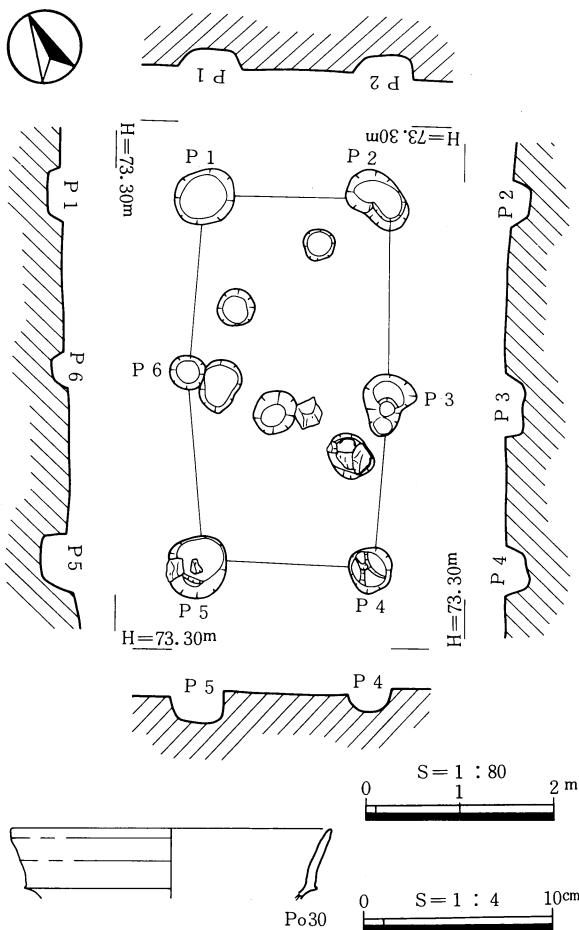
土層 各柱穴とも埋土は、黒褐色粘質土一層である。

遺物 P 3 より古墳時代の土師器片(甕口縁Po30)を検出した。

時期 遺物、埋土より古墳時代の建物と考えられる。



挿図59 SB-22 遺構図



挿図60 SB-23 遺構・遺物図

SB-24 (挿図61 図版26)

位 置 — 1 Y グリッドに位置する。

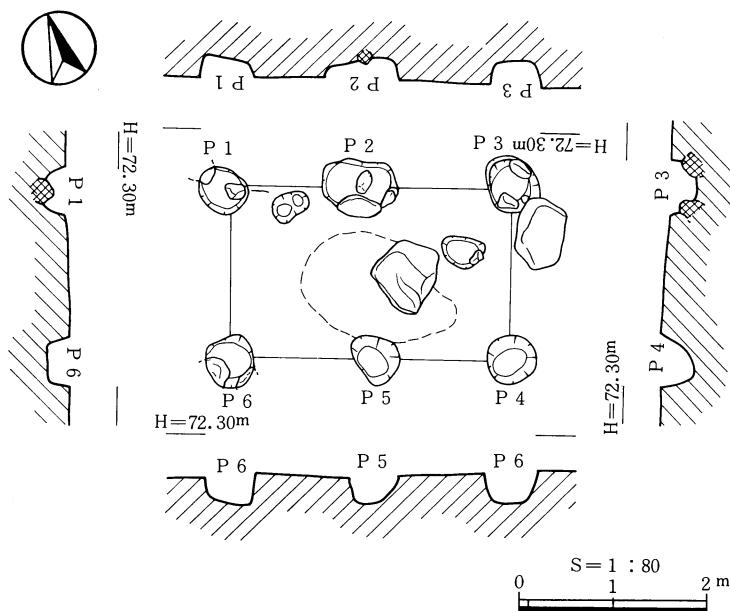
形 態 梁間1間(1.83m)、桁間2間(3.00m)の建物で、床面積は5.49m²を測る。柱穴間距離はP1から1.44m、1.52m、1.83m、1.34m、1.65m、1.92mで、主軸方向はN-73°-Wである。

柱 穴 各柱穴の規模は、P1で53cm×50cm-36cm、P2で50cm×48cm-30cm、P3で54cm×50cm-32cm、P4で52cm×48cm-24cm、P5で78cm×58cm-24cm、P6で58cm×54cm-30cmを測る。各柱穴とも柱痕は確認されなかった。

土 層 各柱穴とも埋土は、黒褐色粘質土一層である。

遺 物 土師器片を数片検出したが、図化できなかった。

時 期 遺物、埋土より古墳時代の建物と考えられる。



挿図61 SB-24 遺構図

挿表10 堀立柱建物一覧表

遺構名	桁×梁 (間)	桁行(m)		梁行(m)		長方形度	床面積 (m ²)	主軸方向	時期
SB-21	2×1	4.35	3.86	3.05	2.20	1.43	13.27	N-78°-W	不明
SB-22	2×1	2.87	2.83	2.05	2.03	1.40	5.88	N-6°-E	不明
SB-23	2×1	3.85	3.80	1.97	1.85	1.95	7.58	N-30°-E	古墳時代
SB-24	2×1	3.00	2.96	1.83	1.92	1.64	5.49	N-73°-W	古墳時代

註 長方形度=桁行(m)÷梁行(m)

3 土 坂 (SK)

古墳時代以降と思われる土坂を一基、中世のものと思われる土坂を2基、時期不明の土坂を2基、計6基を確認した。

SK-20 (挿図62 図版27)

位 置 2Cグリッドの南西側に位置する。周辺には、SK-21、22が存在する。

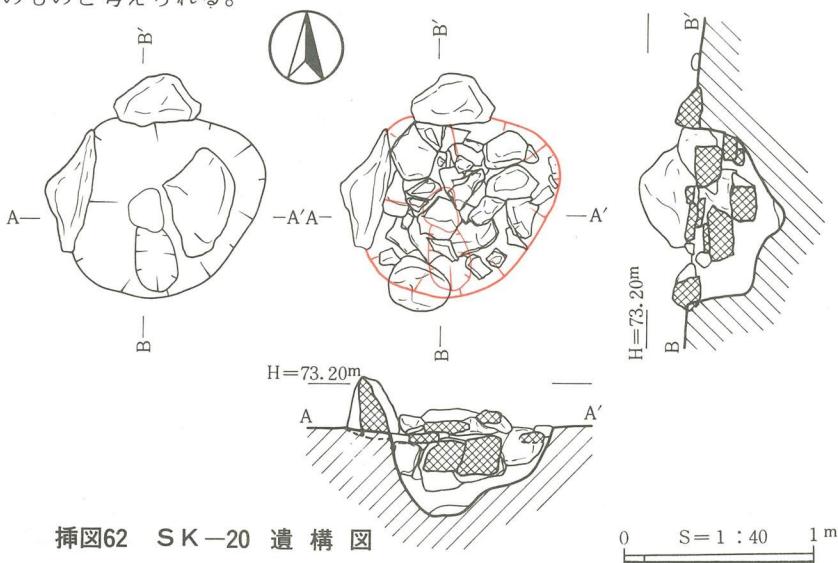
形 態 平面形がほぼ円形、底面形が不整形で床面が平坦でない土坂である。規模は、検出面で長径1.1m、短径1m、深さ0.45m、底面で長径0.2m、短径0.17mを測る。土坂の西側縁に高さ30cm、幅64cmの立石を裾え、内部には5~30cm程の角礫が落ち込んでいる。石の種類、形状が、SK-21と類似している。

土 層 埋土は、黒褐色粘質土一層である。

遺 物 検出しなかった。

性 格 規模は小さいものの、石の種類、形状、落ち込み方等がSK-21と類似している事から同じ性格の中世墓と推測される。規模から小児用のものであろう。

時 期 中世のものと考えられる。



挿図62 SK-20 遺構図

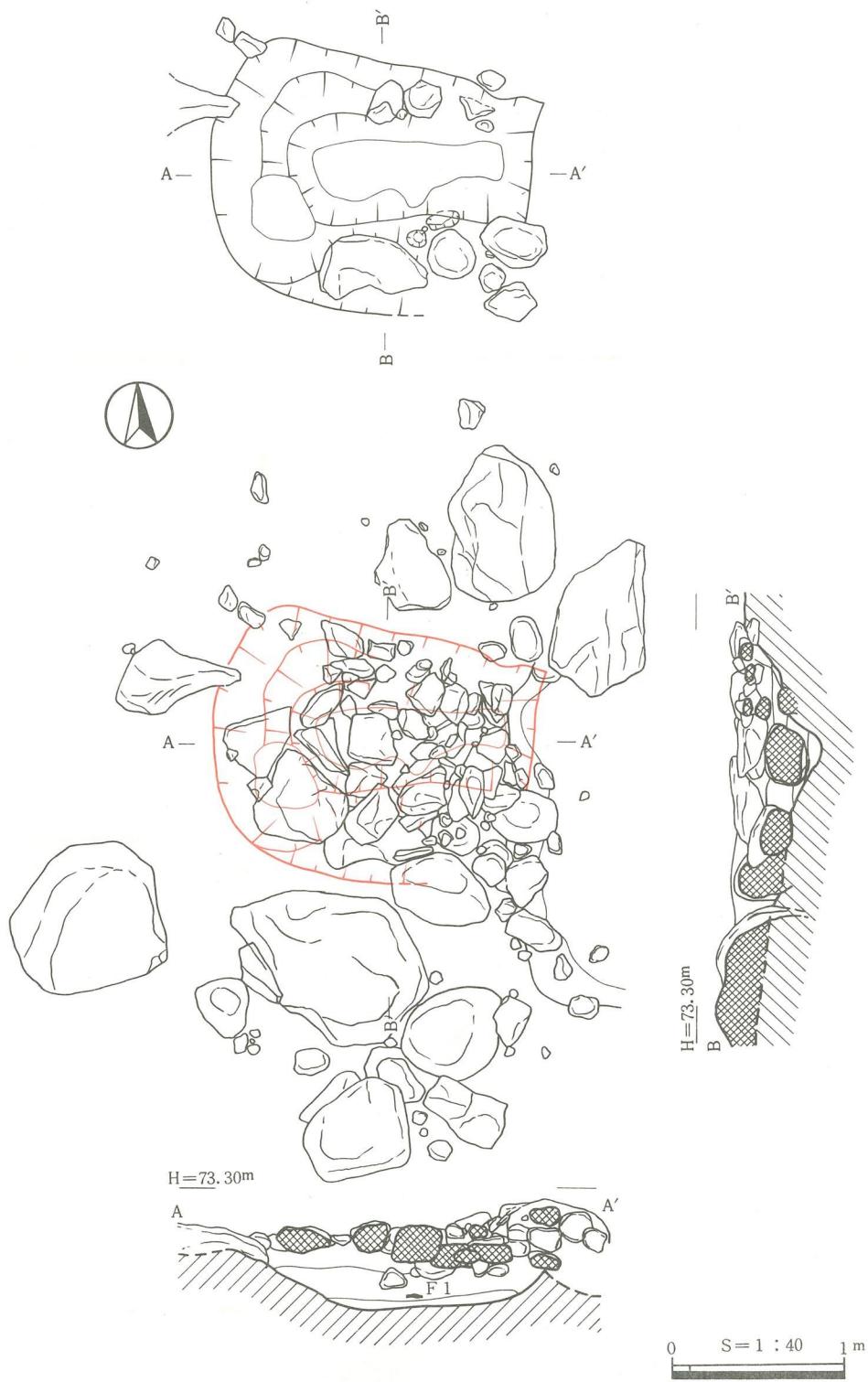
SK-21 (挿図63 図版28)

位 置 3Cグリッドの北側に位置し、周辺には、SK-20、22が隣接する。

形 態 東側隅が攪乱を受けている為、完形ではないが、平面形、底面形共に隅丸長方形の土坂だったと考えられ、二段掘りの構造を持つ。規模は、検出面で長径1.86m、短径1.46m、深さ0.48m、底面で長径1.1m、短径0.28mを測る。土坂内には、拳大から人頭大の割石が落ち込んでおり、これらの石の中に赤色顔料の付着した石もみられた。長軸方向はN-90°-Eをとる。

土 層 埋土は、黒褐色粘質土一層である。

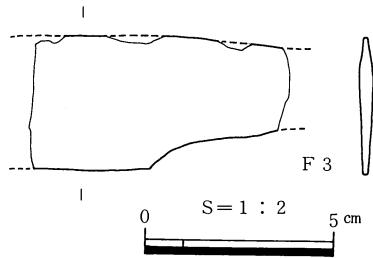
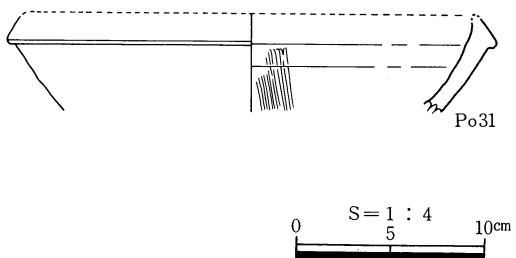
遺 物 土坂のほぼ中央に、床面に密着した状態で鉄刀(F3)を検出した。また、少量の土師器片と土坂上面より備前焼の器(Po31)が出土した。



挿図63 SK-21 遺構図

性 格 土塙内の状態から見て、遺体を東西方向に寝かせ土を被せた後、石を積んで造った土塙墓ではないかと推測される。

時 期 中世のものと考える。



挿図64 SK-21 遺物図

SK-22 (挿図65 図版27)

位 置 2 C グリッドの南側に位置する。周辺には、SK-20、21が隣接する。

形 態 平面形、底面形共にほぼ円形の土塙である。
規模は、検出面で長径0.7m、短径0.63m、深さ0.23m、底面で長径0.45m、短径0.35mを測る。

土 層 埋土は、黒褐色粘質土一層である。

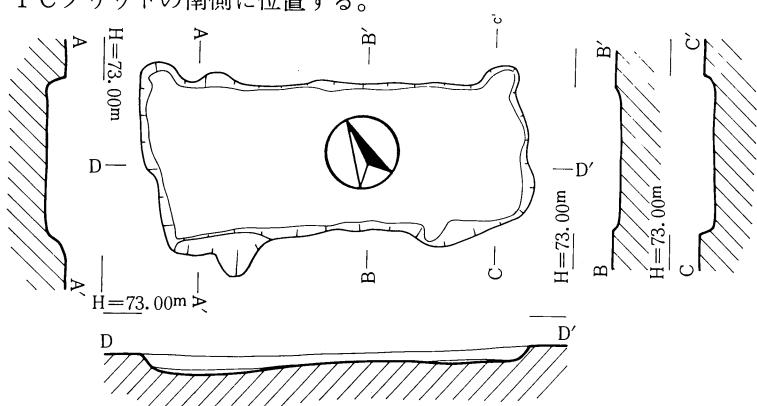
遺 物 検出しなかった。

性 格 不明である。

時 期 不明である。

SK-23 (挿図66 図版27)

位 置 1 C グリッドの南側に位置する。



挿図65 SK-22 遺構図



挿図66 SK-23 遺構・遺物図

形 態 平面形、底面形共に隅丸長方形、断面形が皿状を呈する土塙である。規模は、検出面で長辺2.05m、短辺0.78m、深さ0.2m、底面で長辺1.95m、短辺0.71mを測る。長軸方向は、N-64°-6をとる。1.95m、短辺0.71mを測る。

土 層 埋土は、黒褐色粘質土一層である。

遺 物 土師器片を数点検出した。Po32は渦巻文様を有する土器の脛部片である。

性 格 不明である。

時 期 遺物より古墳時代以降と考える。

S K-24 (挿図67 図版27)

位 置 2 C グリッドの北側に位置する。

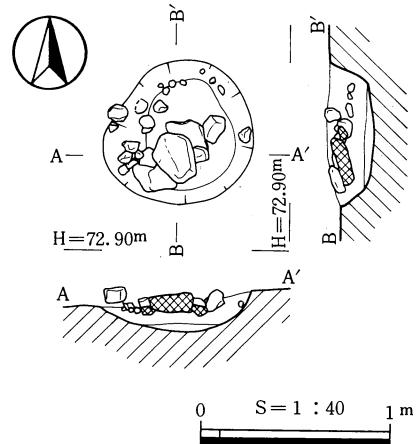
形 態 平面形、底面形共にほぼ円形で、断面形が皿状を呈する土塙である。規模は、検出面で長径0.8m、短径0.77m、深さ0.25m、底面で長径0.69m、短径0.47mを測る。5~50cm程の円礫、角礫が土塙の上面近くに落ち込んでいる。

土 層 埋土は、黒褐色粘質土一層である。

遺 物 検出しなかった。

性 格 不明である。

時 期 不明である。

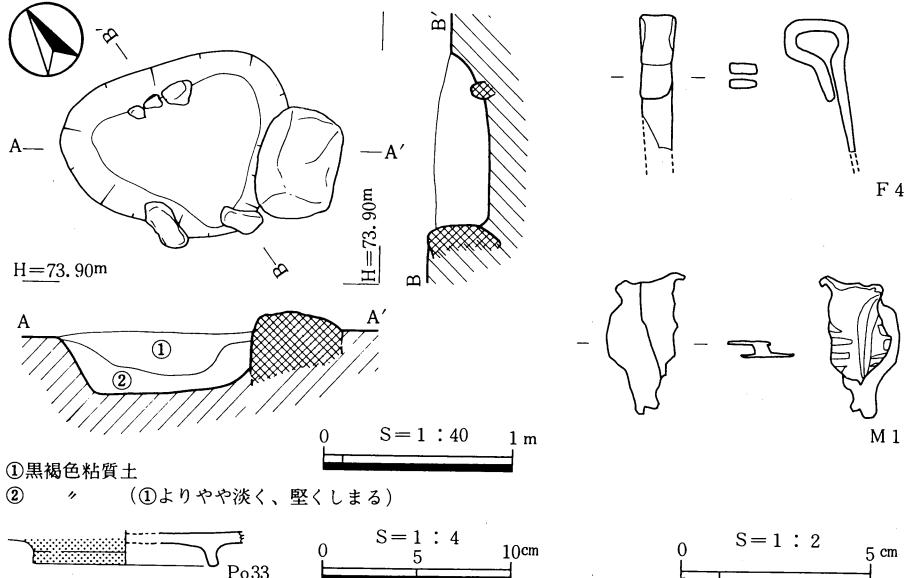


挿図67 SK-24 遺構図

S K-25 (挿図68 図版27)

位 置 2 B グリッドの南側に位置する。

形 態 平面形、底面形共に橢円形の土塙で、断面形は逆梯形を呈する。規模は検出面で、



挿図68 SK-25 遺構遺物図

長径1.21m、短径0.95m、深さ0.33m、底面で長径0.88m、短径0.74mを測る。

土層 黒褐色粘質土一層である。

遺物 皿(Po33)、青銅器片(M1)、ピン状鉄製品(F4)を検出した。

性格 不明である。

時期 遺物より奈良時代のものと考えられる。

挿表11 土塙一覧表

土塙名	平面形	規模 ① 検出面 ② 底面 m	遺物	時期	備考
02	楕円形	① 2.54×2.00—0.52	なし	古墳時代以降	
03	円形	① 1.90×1.88—0.62	〃	〃	
04	楕円形	① 1.90×0.76—0.14	〃	不明	
05	〃	① 1.36×1.20	甕	古墳時代	中央に落ち込む (0.42×0.36—0.36)
06	隅丸方形	① 1.30×1.22—0.35	壺、高台付壺、皿	奈良時代	赤色塗彩の皿、壺、 「奈」の字の墨書き土器
07	〃	① 1.92×0.70—0.34	なし	古墳時代	土塙墓
09	楕円形	① 0.97×0.67—0.30	高台付碗、台付碗 須恵器甕底部	奈良時代	
12	〃	① 2.45×2.16—0.26	甕、須恵器壺	〃	
13	〃	① 2.04×1.75—0.22	壺	古墳時代以降	
14	〃	① 2.00×1.34—0.32	なし	不明	
15	円形	① 1.15×1.00—0.24	〃	〃	
16	楕円形	① 1.37×1.25—0.26	〃	〃	
17	〃	① 2.25×1.18—0.24	〃	〃	
18	〃	① 2.07×1.85—0.20	〃	〃	
19	〃	① 2.00×0.97—0.23	〃	〃	
20	円形	① 1.10×1.00 ② 0.20×0.17—0.45	〃	中世?	土塙墓?
21	隅丸方形	① 1.86×1.46 ② 1.10×0.28—0.48	備前焼、土師器片	中世	土塙墓?
22	円形	① 0.70×0.63 ② 0.45×0.35—0.23	なし	不明	
23	隅丸長方形	① 2.05×0.78 ② 1.95×0.71—0.20	土師器片	古墳時代以降	
24	円形	① 0.80×0.77 ② 0.69×0.47—0.25	なし	不明	
25	楕円形	① 1.21×0.95 ② 0.88×0.74—0.33	皿、青銅器片 ピン状鉄製品	奈良時代	赤色塗彩の皿

4 溝状遺溝 (SD)

SD-01 (挿図69)

位 置 1Cグリッドのほぼ中央に位置する。溝の北側には石群が隣接し、またその周辺にはSK-23、SB-21が存在する。南から北に向って若干傾斜しており、15cm程の高低差を示す。

形 態 規模は幅50cm前後、深さ10cmを測る。平面形はL字状に曲がる。

土 層 黒褐色土一層である。

遺 物 土師器片を検出した。

性 格 不明である。

時 期 遺物より古墳時代以降と考えられる。

SD-02 (挿図71 図版28)

位 置 OAグリッドの南側に位置する。周辺には大小のピットを多数検出したが、溝に伴うものなのかどうかは確認する事ができなかった。

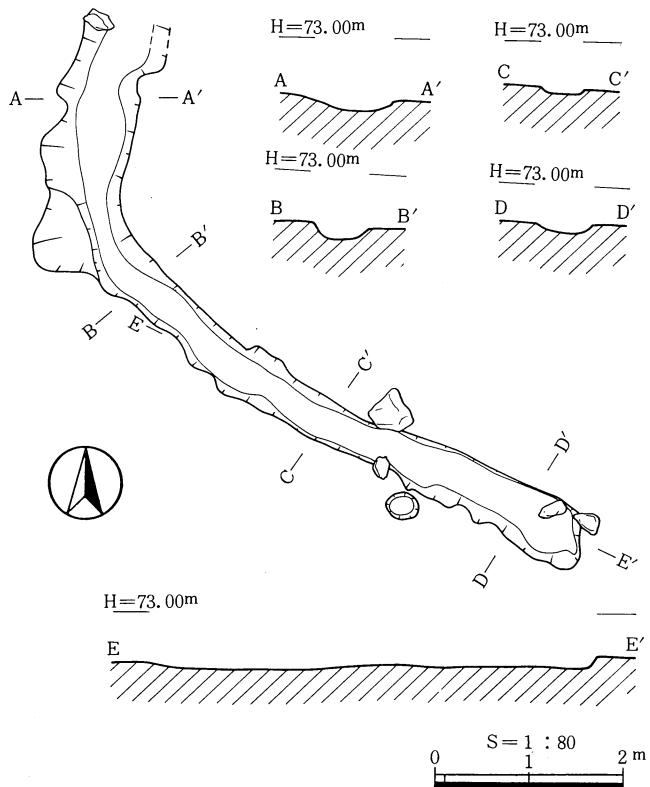
形 態 規模は、幅20~50cm、深さ15cmを測る。平面形はL字状に遺存する。

土 層 黒褐色土一層である。

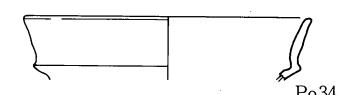
遺 物 検出しなかった。

性 格 このグリッドは、かつては畠地であったり、宅地造成地であったりしてかなり搅乱されており、溝の北側は削平されていると考えられる。かつては方形に溝が廻っていたと推定すると、ほぼ中央に位置するP1(特殊ピット?)が存在することとも合わせて竪穴住居であった可能性も考えられる。

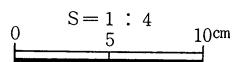
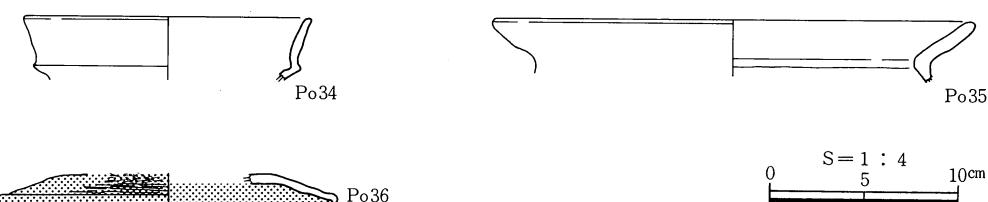
時 期 不明である。

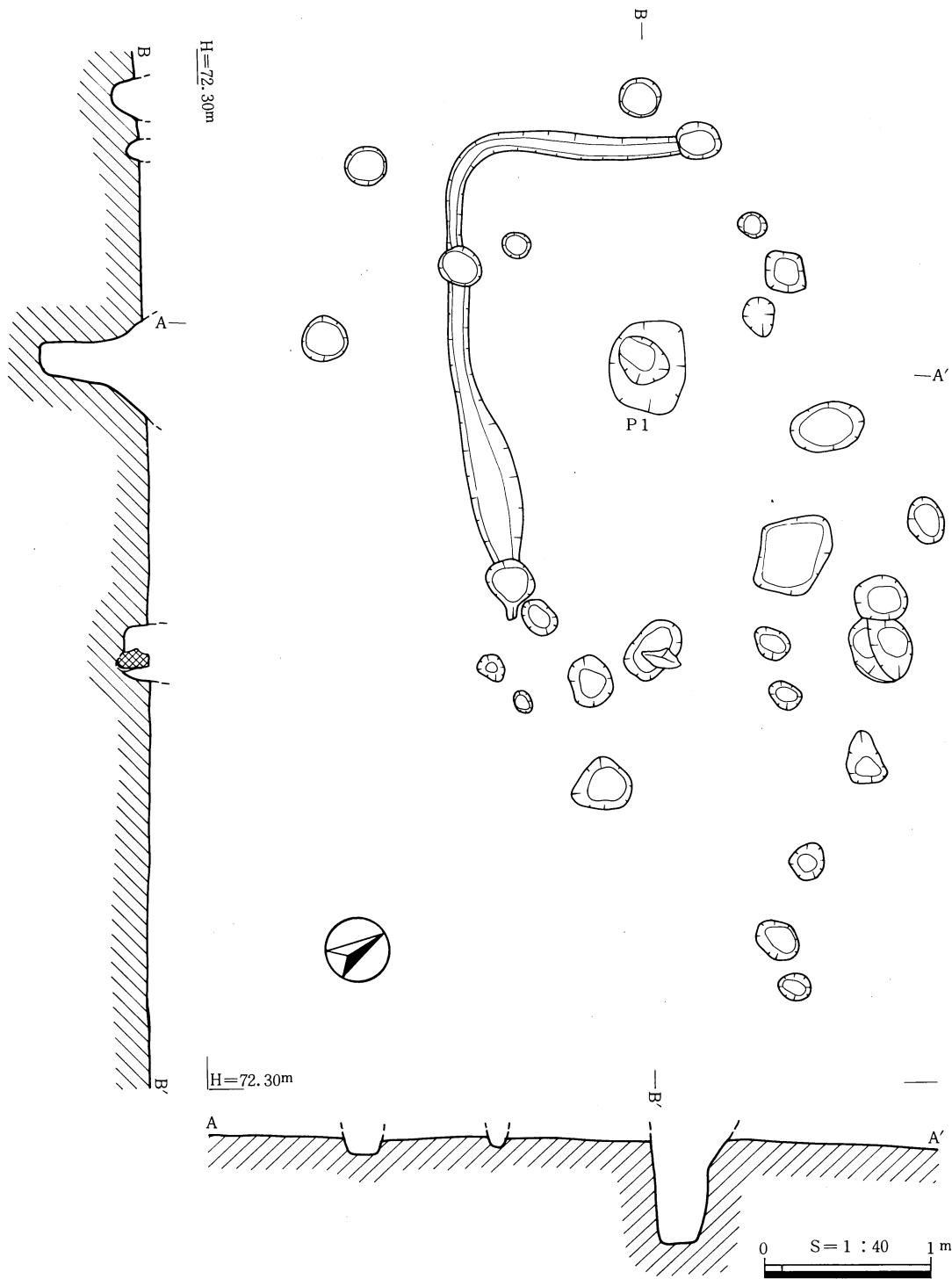


挿図69 SD-01 遺構図

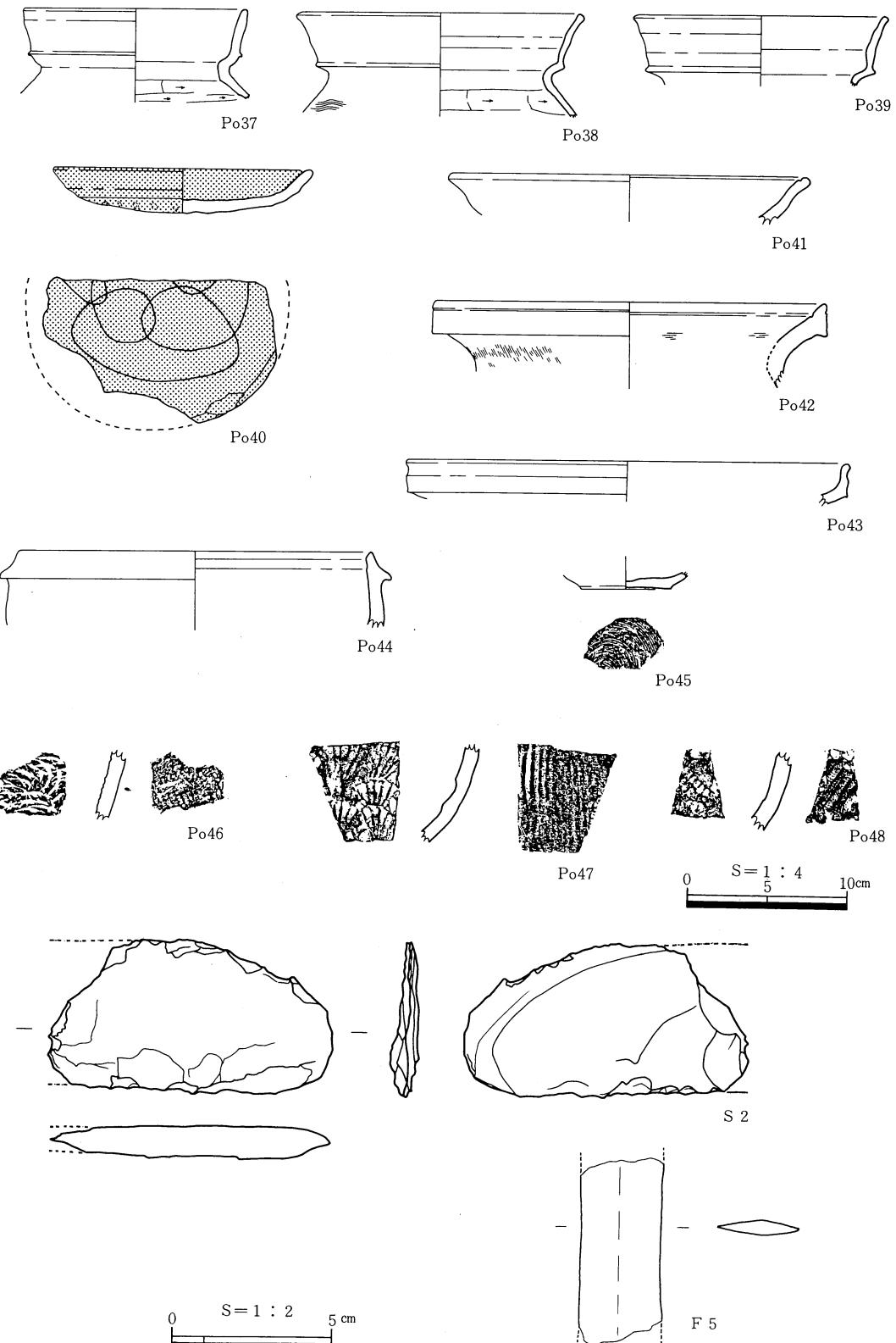


挿図70 Pitに伴う遺物図





挿図71 SD-02 遺構図



挿図72 遺構外遺物図

5 遺構外遺物

古墳時代～中世にかけての土器、石器を検出し、Po37～Po48、S 2、F 5を図化した。これらの遺物はすべて黒褐色粘質土層（クロボク層）中より出土したものである。詳しくは観察表に委ねる。

土器（挿図72 図版31）

Po40は、赤色塗彩する皿で、内面にラセン状暗文を施す。

Po45は、回転糸切り痕を残す底部片である。

Po47・48は、内面に車輪文叩きがみられる。Po47の原体は、ほぼ円形を呈する径5cm、凸線幅2mm程のものと推定される。外面は、両者とも平行叩きが施されている。平安初期のものと思われる。^{註1}

石器、鉄器（挿図72 図版31）

S 2は、サヌカイト製で剝片の端部を両面から打ち欠いている。外湾する長辺を背とし、内湾する長辺を刃部としている。欠損品だが、石庖丁形の形状を呈すると推測される。

註1 会見町 両部太郎窯に類例がある。

6 小 結

上福万遺跡（第1・2次調査）で検出された古墳時代から中世にかけての遺構は、竪穴住居16棟、掘立柱建物24棟、土塙21基、溝状遺構2を数える。以下時代別に概括する。

古墳時代の遺構は、竪穴住居16棟、掘立柱建物6棟、土塙2基を検出した。これらの遺構は、S I-02、07、S I-12、13に建て替えが見られ、若干の時間幅を考えられるが、切り合い関係が見られない事から継続して集落が存在したと思われる。遺物より古墳前期（青木V・VI～VII期）のものであろう。これらの遺構は、北西下がりの緩傾斜地に立地しており、それらの配置から遺跡は、東西方向に広がると思われる。また、遺跡周辺には、石州府29、30号墳（古墳前期）も存在し、上福万の集落とのつながりも考えられよう。

奈良時代の遺構は、掘立柱建物2棟、土塙4基（土塙墓2基を含む）を検出した。掘立柱建物は、遺跡のほぼ中央、西側隅に位置する。2棟とも2×3間の建物で床面積も20m²以上と、他の掘立柱建物に比して大型である。土塙墓SK-06は、赤色塗彩された「奈」の墨書土器が出土したほか、四隅に柱穴を持つ隅丸方形の土塙で注目される。また、奈良時代の布目瓦を検出しており、大寺廃寺や会見郡衙との関係も考慮すべきであろう。

中世の土塙墓をA区北側隅（第2次調査区）で確認した他、遺構外でも中世の陶磁器を数片検出した。住居は確認出来なかったが人々の往来が中世にもあった事が窺われる。

以上、上福万遺跡の集落は、古墳時代、奈良時代、中世にかけて断続して営まれたようである。

插表12 古墳時代遺構出土遺物観察表①

SI-15

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po 1	SI-15 No.108、70	壺	復口径 15.3	外傾する複合口縁で端部に平坦面を持つ。	口縁部内外面ヨコナデ。内面頸部以下ヘラケズリ。	胎土 繊密、砂粒を含む。 焼成 不良 色調 内外面淡褐色。
Po 2	SI-15 No.103、112	甕	復口径 17.1	外傾する複合口縁で端部を丸くおさめる。屈曲部は水平に突出する。肩部に波状文を施す。	口縁部外面ヨコナデ。頸部以下内面ヘラケズリ。	胎土 密、砂粒を含む。 焼成 不良 色調 淡褐色。
Po 3	SI-15 No.102、103	甕	口径 21.4	外傾する複合口縁で端部に平坦面を持つ倒卵形の胴部で肩部に櫛描波状文、平行線文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面不整ハケメ、タテハケメ、内面頸部以下ヘラケズリ、下位ケズリ後ナデ。底部内面指圧痕アリ。	胎土 密、砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面淡褐色
Po 4	SI-15 No.96	甕	復口径 14.8	外傾する複合口縁。屈曲部は水平に突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。内面頸部以下ヘラケズリ。	胎土 密、砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面淡褐色外面スス付着。
Po 5	SI-15 No.62	甕	復口径 16.7	外傾する複合口縁で端部には平坦面を持ち屈曲部は水平に突出する。	口縁部内外面ヨコナデ。	胎土 細密、砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面明黄褐色 外面スス付着。
Po 6	SI-15 No.62、83、84 89、101、105	甕	口径 17.2	外傾する複合口縁で端部は丸くおさめる。倒卵形の胴部で屈曲部は水平に突出する。肩部に櫛描波状文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ、外面頸部以下タテハケメ、ヨコハケメ、ナナメハケメ、内面頸部ナデ、以下ヘラケズリ。	胎土 1~2mm程の石英、長石を多く含む。 焼成 良好 色調 外面、明茶褐色 内面、明褐色 外面スス付着。
Po 7	SI-15 No.102、103	甕	口径 16.4	屈曲部は水平に突出する複合口縁で肩部に多条の櫛描平行線、波状文を施す。倒卵形の胴部。	口縁部内外面ヨコナデ、外面頸部以下ハケメ、内面頸部以下ヘラケズリ下位指圧痕アリ。	胎土 1~3mmの長石、石英を多く含む。 焼成 良好 色調 外面、暗茶褐色 内面、茶褐色 外面スス付着。
Po 8	SI-15 No.95	高 坏	復口径 26.8	ゆるやかに外傾する坏部で端部に沈線を施す。	外面ミガキ、内面ミガキ後ナデ。	胎土 密、砂粒を含む。 焼成 不良 色調 内外面淡黄色。

SI-16

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po 9	SI-16 No.76	壺	復口径 17.4	外傾する複合口縁で屈曲部は、やや下垂ぎみ。肩部は丸く、櫛描平行線、波状文を施す。貝殻腹縁圧痕アリ。	口縁部内外面ヨコナデ、内面頸部指おさえ後ナデ、肩部以下ヘラケズリ。	胎土 1~3mm程の石英を多量に含む。 焼成 良好 色調 内外面淡黃褐色
Po 10	SI-16 No.88	壺		口縁部は内湾ぎみに立ち上がる複合口縁で屈曲部は水平に突出する。	口縁部から頸部にかけて内外面ヨコナデ。	胎土 1~2mm程の長石、石英、黒雲母を含む。 焼成 良好 色調 内外面淡黃褐色
Po 11	SI-16 No.77	壺		口縁部は内湾ぎみに立ち上がる複合口縁で屈曲部の稜は水平に突出する。	内外面ヨコナデ、内面頸部指おさえ、頸部以下ヘラケズリ。	胎土 砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面暗褐色
Po 12	SI-16 No.92	甕	復口径 15.8	外傾する複合口縁で屈曲部は水平に突出する。肩部に櫛描平行線を施す。	内外面ヨコナデ。内面頸部以下ヘラケズリ。	胎土 1~2mm程の石英を少量含む。 焼成 良好 色調 外面、淡黃褐色 内面、明褐色
Po 13	SI-16 No.104、141	甕	復口径 16.0	外傾する複合口縁で屈曲部の稜は水平に突出する。	内外面ヨコナデ。内面頸部以下ヘラケズリ。	胎土 少量の石英を含む。 焼成 良好 色調 内外面暗茶褐色 外面スス付着。
Po 14	SI-16 No.46	甕	復口径 17.4	外傾する複合口縁で端部に平坦面を持つ。	内外面ヨコナデ。頸部以下ヘラケズリ。	胎土 0.5~1mm程の長石、石英を多く含む。 焼成 良好 色調 内外面明茶褐色
Po 15	SI-18 No.104	甕	復口径 14.9	外傾する複合口縁で、端部に平坦面を持つ。	内外面ヨコナデ。	胎土 少量の石英、墨雲母を含む。 焼成 良好 色調 内外面暗灰褐色

捕表12 古墳時代遺構出土遺物観察表②

S I - 16

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po16	SI-16 No.45、46	甕	復口径 15.0	端部に平坦面を持つ複合口縁。	内外面ヨコナデ。	胎土 1mm程の石英を少量含む。 色調 外面、スス付着 内面、暗茶褐色
Po17	SI-16 No.113	甕	復口径 14.1	端部を丸くおさめる複合口縁。	内外面ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ。	胎土 1～3mm程の石英を少量含む。 焼成色調 良好 外面、スス付着 内面、明灰褐色
Po18	SI-16 No.43	甕	復口径 12.6	屈曲部の稜は鈍くほぼ直立気味に立ち上がる。	内外面ヨコナデ。	胎土 0.5mm程の石英を少量含む。 焼成色調 良好 外面、スス付着 内面、淡黄褐色
Po19	SI-16 No.46、105	甕	復口径 22.5	端部に平坦面を持つ複合口縁で屈曲部の稜は水平に突出する。倒卵形の胴部で肩部に櫛描平行線、波状文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ 外面肩部以下ハケメ。 内面頸部から胴部中位にかけて右方向のヘラケズリ、以下タテ上方に向のヘラケズリ。	胎土 1～2mm程の石英、長石を含む。 焼成色調 良好 内外面暗灰褐色 外面スス付着
Po20	SI-16 No.63、75、80 83、92、109	高 坏	復口径 23.2	内湾気味に開く坏部で端部に平坦面を持つ。	外面ハケメ後タテヘラミガキ。口縁端部ナデ 内面口縁部ヨコヘラミガキ以下タテヘラミガキ。	胎土 砂粒を含む。 焼成色調 良好 内外面淡黄褐色
Po21	SI-16 No.4、5、57 74、79、115、 128、132、133	高 坏	復口径 30.3	外方に開く坏部。円盤充填痕がみられる。	外面ヨコハケメ後タテヘラミガキ。内面タテヘラミガキ。	胎土 1～2mm程の石英、長石を含む。 焼成色調 やや不良 内外面淡黄褐色
Po22	SI-16 No.108	高 坏	復底径 17.8	「ハ」の字状に開く脚部。脚端部に一条の沈線がみられる。	外面タテヘラミガキ、脚端部ナデ。内面脚上位左方向へラケズリ、下位タテハケメ後ヨコナデ。	胎土 1～2mm程の石英、長石多量含む。 焼成色調 良好 外面、黒褐色 内面、淡黄褐色
Po23	SI-16 No.30	高 坏	—	「ハ」の字状に開く小さな脚部。	外面ヘラミガキ。内面坏部ヘラミガキ、脚部ヨコナデ。	胎土 砂粒、1mm程の石英を多量に含む。 焼成色調 良好 外面、灰白色 内面、淡黄色
Po24	SI-16 No.104	高 坏	—	内湾気味に開く坏部。	外面ミガキ、内面ミガキ。	胎土 1～2mm程の長石石英多量に含む。 焼成色調 やや不良 内外面灰褐色
Po25	SI-16 No.25	鉢	復口径 19.8	椀状の鉢。口縁は外傾し、端部に平坦面を持つ。	外面タテヘラミガキ。口縁端部ヨコナデ。内面ナデ後タテヘラミガキ。	胎土 砂粒を含む。 焼成色調 良好 内外面淡黄色、黒斑アリ。
Po26	SI-16 No.6	小形壺	復口径 10.1	直立気味に立ち上がる複合口縁。	外面ヨコナデ後ヘラミガキ、肩部ナナメハケメ。内面白口縁部ヨコナデ、他ヘラミガキ。	胎土 砂粒、1mm程の石英を少量含む。 焼成色調 良好 内外面明黄褐色
Po27	SI-16 No.46	小型壺	復口径 11.8	内傾気味に立ち上がる複合口縁で2条の沈線を施す。	外面ヘラミガキ、内面白口縁部ヘラミガキ、以下ヘラケズリ後ヘラミガキ。	胎土 1mm程の石英少 量含む。 焼成色調 良好 内外淡黄褐色
Po28	SI-16 No.33	鼓形器台	復底径 18.0	ゆるやかに開く脚部。	外面ヨコナデ、内面右方向のヘラケズリ、脚端部ヨコナデ。	胎土 1mm程の石英、長石多量含む。 焼成色調 不良 外面灰白色、内面淡褐色
Po29	SI-16 No.81	低脚壺	復口径 11.5	内湾気味に開く坏部にあげ底の短い脚が続く。	外面不整ハケメ、脚部ナデ、内面ヨコヘラミガキ後ナデ、指押えアリ。	胎土 砂粒、0.5mm程の石英多量、黒斑母少量含む。 焼成色調 やや不良 淡黄色

S B - 23

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	備 考
Po30	SB-23 Pit 3 No.218	甕	復口径 17.0	外傾ぎみに立ち上がる複合口縁で端部は丸く収める。屈曲部は水平に突出する。	内外面ヨコナデ。	胎土 密、砂粒を含む。 焼成色調 やや不良 内外面淡黄色

插表12 古墳時代遺構出土遺物觀察表③

土塙内出土土器

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po31	SK-21 No.2	鉢		内湾ぎみに聞く体部。	備前焼。	胎土 砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面赤褐色
Po32	SK-23 No.167	不明		外面渦巻き文を施す。	内面不整タテハケメ。	胎土 密、砂粒を多量に含む。 焼成 良好 色調 内外面暗赤褐色
Po33	SK-25 No.332	皿	復底径 9.3	高台を持つ。	内外面ヨコナデ。	胎土 密、砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面赤褐色、(赤色塗彩)

Pit内出土土器

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po34	2-BG Pit 3 No.232	甕	復口径 25.3	大きく外傾する単純口縁で端部は丸くおさめる。	内外面ヨコナデ。内面頸部以下ヘラケズリ。	胎土 密、砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面淡黄褐色 外面スス付着
Po35	2-DG Pit 1 No.17	甕	復口径 15.2	外傾する複合口縁で端部は、丸くおさめる。屈曲部はやや突出する。	内外面ヨコナデ。	胎土 密、砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面灰白色
Po36	2-BG Pit17 No.231	蓋	復口径 17.7	ゆるやかにカーブする天井部を持つ。内面に暗文を施す。	外面ミガキ。内面ヨコナデ。	胎土 微密 焼成 良好 色調 内外面赤褐色 (赤色塗彩)

遺構外出土土器

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po37	トレンチ	甕	復口径 14.6	外傾する複合口縁で端部でややすぼまり、終わる。	内外面ヨコナデ。内面頸部以下ヘラケズリ。	胎土 1mm程の石英、長石を多量に、黒雲母を少量含む。 焼成 良好 色調 内外面淡黄色
Po38	0-ZG No. 2	甕	復口径 17.5	外傾する複合口縁で端部に平坦面を持つ。屈曲部は突出する。頸部外面に波状文を施す。	内外面ヨコナデ。内面頸部以下ヘラケズリ。	胎土 砂粒、石英を含む。 焼成 良好 色調 内外面、淡黄褐色 外面、スス付着
Po39	3-BG No. 4	甕	復口径 15.5	外傾する複合口縁で端部に平坦面を持つ。屈曲部は突出する。	内外面ヨコナデ。	胎土 砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面明橙色
Po40	トレンチ	皿	復口径 16.1	口径16.1、器高2.8cmの浅い皿で、内面にラセン状の暗文を施す。	外面ミガキ。内面ヨコナデ。外面部に指頭圧痕アリ。	胎土 1~3mm程の石英を少量含む。 焼成 良好 色調 内外面赤褐色 (赤色塗彩)
Po41	表採 No.14	高坏	復口径 22.2	端部は丸く終わり、内面に一条の凹線を施す。	内外面ヨコナデ。	胎土 1mm程の石英を含む。 焼成 良好 色調 内外面赤褐色 (赤色塗彩)
Po42	1トレンチ	壺	復口径 24.4	端部を上下に拡張するくりあげ口縁状を呈する。	内外面ヨコナデ。外面部頸部タテハケメ後ナデ。	胎土 1~3mm程の石英を多量に含む。 焼成 良好 色調 淡黄色
Po43	表採 No.33		復口径 27.6	直立気味に立ち上がる口縁で端部は丸く終わる。	内外面ミガキ。	胎土 1mm程の石英少 量含む。 焼成 良好 色調 内外面明橙色

插表12 古墳時代遺構出土遺物観察表④

遺構外出土土器

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
Po44	トレンチ	羽釜	復口径 22.0	丸い胴部で口縁につまみ出しあり。	内外面ヨコナデ。	胎土 1～3mm程の石英を多量に含む。 焼成 やや不良 色調 内外面灰白色 外面スズ付着
Po45	表採 3-AG	底部	復底径 5.5	平底。内湾気味の体部がつづく、平底の底部。	内外面にヨコナデ。 底面回転糸切り痕アリ。	胎土 1mm程の石英、長石を含む。 焼成 良好 色調 内面、黒褐色 外面、暗黄褐色
Po46	SI-15 No.31	須恵器片	—	胴部片。	外面格子目タタキ。内面青海波文タタキ。	胎土 細砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面青灰色
Po47	O-BG No.2	須恵器片	—	胴部片。	外面タタキ。内面車輪文タタキ。	胎土 1mm程の長石を含む。 焼成 良好 色調 内面、赤銅色 外面、淡黄褐色
Po48	O-BG No.3	須恵器片	—	胴部片。	外面タタキ。内面車輪文タタキ。	胎土 細砂粒を含む。 焼成 良好 色調 内外面青灰色

遺構内出土鉄器、青銅器、石器

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
F 1	SI-15 No.1	鎌	幅 0.6 厚 0.5	峰が若干反る。		
F 2	SI-16 No.84	刀子	幅 1.2 厚 0.2	背が若干反る。		
F 3	SK-21 No.260	鉄刀	身幅 3.5 茎幅 2.4 厚 0.3	茎を残す。		
F 4	SK-25 No.338	?	幅 0.9 厚 0.2	先を折り曲げ、輪状部をつくる。		
M 1	SK-25 No.309	止め金具 ?	厚 0.5	工字状を呈する断面、青銅製。		
S 1	SI-15	石錘	厚 1.6 重さ33g	両端を打ち欠く丸い小型の石錘。		石英安山岩製。

遺構外出土鉄器、石器

遺物番号	取上番号	器種	法量 (cm)	形態	手法	備考
F 5	2 トレンチ	鉄劍	幅 2.5 厚 0.5	鎬をわずかに残す。		
S 2	1-C G No.103	?	現存長 8.8 厚 1.0 重さ 62g	外湾する長辺を背とし内湾する長辺を刃部としている。石庵丁形の形状を呈する。	剝片の端部を内面から打ち欠く。	サヌカイト製。

第4章 考察

第1節 上福万遺跡出土の縄文時代早期の土器について

上福万遺跡出土の縄文早期の土器は総数35000片余にのぼる。その内訳は押型文土器3割、無文土器6割、その他の土器が1割である。前回の報告書においては、これら早期の土器を文様をもとに分類しているが、今回の調査で出土した資料も加え、改めて上福万遺跡出土の縄文土器の分類を整理する必要があると思われる。今回は時間的制約等で果せなかつたが、本節においては器形、文様について概略的にまとめを行ない、さらに各分類相互の相関関係について言及してみたい。

1 形態による分類

上福万遺跡出土の早期の土器は、器形が大型のものと小型のものとに分けられる。それらはさらに口縁部と胴部の形態により7つに分類される（挿図74）。

大型の土器

a タイプ

口縁が外反し、胴部は逆「く」の字状の屈曲をもつ。底部は尖底を呈する。楕円押型文（I類2群B種）、菱形押型文（I類2群C種）、縦位撚糸文（II類A種）、網目状撚糸文（II類B種）にみられる器形である。

b タイプ

口縁の外反、胴部の屈曲が緩やかなもの。底部は尖底を呈する。楕円押型文（I類2群B種）、菱形押型文（I類2群C種）、撚糸文（II類A、B、C種）にみられる器形である。

c タイプ

口縁が強く外反するもの。胴部を残すものがみられず、胴部の形態は不明である。楕円押型文（I類2群B種）、沈線文（IV類）にみられる。近畿の高山寺式土器の口縁部に類似する。

d タイプ

口縁が直口するもの。胴部は屈曲をもたず、わずかに膨む。楕円押型文（I類2群B種）にみられる。

小型の土器

e タイプ

口縁外反し、胴部屈曲するもの。底部は尖底または丸底に近い尖底を呈する。山型押型文（I類2群A種）、楕円押型文（I類2群B種）、縄文（III類）、沈線文（IV類）、貝殻文（V類）、刺突文（VI類）、無文（VII類）にみられる。

f タイプ

口縁の外反が緩やかなもの。楕円押型文（I類2群B種）、貝殻文（V類）、無文（VII類）にみられる。

g タイプ

口縁が直口するもの。山型押型文（I類2群A種）、刺突文（VI類）にみられる。

大型の土器は、橢円押型文（I類2群B種）、菱形押型文（I類2群C種）、撲糸文（II類A、B、C種）、沈線文（IV類）にみられる。また橢円押型文（I類2群B種）の器形はaタイプからfタイプまでみられ、豊富なバリエーションを示す。逆に出土数量的に希少な土器（I類2群A種、III類～VI類）は大形の器形をとらない。ただし沈線文でcタイプを示すものはある。タイプ別には、大型はbタイプ、小型はeタイプを呈するものが主流をなし、cタイプ、dタイプを呈するものは少ない。口縁端部の形状からみると、大型の土器は丸く終るものが多く、小型のものは角張るものが多い。小型のものは口縁端部に施文する例が多いこととも関連する。細かくみると、橢円押型文（I類2群B種）は丸く終るもの、菱形押型文（I類2群C種）は角張るものが多い。また撲糸文（II類）は尖り気味に終るもののが目立つ。器形のタイプごとにみると、aタイプは角張るもの、丸いもの、尖り気味のものと多様性を示し、bタイプは丸いものと尖り気味のものが多い。eタイプは角張るもの、丸いもの、尖り気味のものとそれみられるが、角張るもののが主流をなす。底部は、口縁部とつながるものが少なく、各タイプとの関連はつかめないが、全て尖底を呈し、平底のものはみられない。他地域の土器の器形と比較するならばaタイプは九州の田村式土器、cタイプは近畿の高山寺式土器、そしてeタイプは九州の手向山式土器に類似する。

2 各文様の概要

I類 押型文土器

1群

格子目文、いわゆるネガティブな橢円文、山形文、橢円文を施す。直径5mm前後の細い原体を用い、規則的な施文方向で文様が構成される。無文帯をもつ帶状施文と、密接施文の2つのパターンを示す。外面は口縁部から底部まで施文され、また口縁内面には横位方向の施文や原体条痕がみられる。器形は口縁部が外反し、胴部は逆「く」の字状の屈曲をもち、底部は尖底を呈する。ただし橢円文を施すものは直口する口縁をなす。2群の土器に比して器厚は薄く、器形も小型で、山形文は振幅が小さく、山形の頂部が丸味を帯びて波状に近いものもある。1群の土器は岡山県の黄島式土器及びそれ以前の土器に比定されるものと考え、2群の土器に先行すると思われる。

2群

山形文、橢円文、菱形文を施す。直径13mm前後の原体により縦位方向あるいは斜位方向に回転施文するが、文様の重複が処々認められる。施文は概ね器面全体に及ぶが、山形文は胴部上半にとどまる。また施文後部分的に文様をナデ消すことが多い。内面は、斜行沈線を施す例が顕著であり、胴部下半はケズリ調整を行なう。器形は概ねaタイプまたはbタイプを呈する。1群に比して器厚が厚く、器形は大型化し、文様は粗大化する。文様の粗大化に伴い、土器自体も粗製化する傾向にある。

A種 山形文土器

山形文土器は、器厚、文様等によりさらに2区分される。

(1) 器厚薄く、小型であり、山形の振幅が小さい。器形は概ねeタイプを呈するが、gタイプのものもみられる。口縁端部は平坦面をもち、山形文や刻みを施すものと、丸く収めるものとが

ある。施文は概ね縦位だが、横位施文のものが散見される。なお内面斜行沈線を施すものはみられない。

(2) 厚手で、(1)に比して大型であり、山形は振幅が多きい。eタイプを呈する。口縁端部に平坦面をもって山形文を施すものもある。また口縁内面に横位方向の施文がみられる。内面斜行沈線、口縁下の横方向の沈線と、楕円文や菱形文との共通要素がみられる。

B種 楕円文土器

楕円文の形状により、大きく3つに区分した。長径1cm未満のものを小楕円、1cm~2cmのものを中楕円、2cm以上のものを大楕円とし、中楕円はさらに細長いものを長楕円、円に近いものを正円と区別した。^{註1} 縦位方向あるいは斜位方向の回転施文を基調とするが、器形が小型のものは横位方向に施文する。口縁下に円孔刺突、沈線がみられ、また胴部に横方向に数条の沈線を施す例もある。内面は斜行沈線が顕著にみられるが、斜行沈線を施さないものはナデ調整、ケズリ調整がなされるものもあり、絡条体圧痕を施すものもある。また小型の土器には口縁内面に横位方向の施文がみられる。器形はaタイプからfタイプまでを呈し、多様性をみせる。dタイプ及びeタイプのものには内面斜行沈線がみられず、cタイプのものにはいわゆる波トタン板状の内面斜行沈線が施される。

C種 菱形文土器

菱形文の長径2cmを境に中菱形と大菱形に区分したが、長径1cm未満のものは見当らなかった。縦位方向あるいは斜位方向に施文され、口縁下に円孔刺突、沈線を施すものがある。内面斜行沈線がみられるが、楕円文のcタイプにみられる波トタン板状のものは見受けられない。器形はaタイプとbタイプがみられる。口縁端部は丸味を帯びるものと、角張るものとがある。

II類 摰糸文土器

撰糸文土器は施文方法によって、縦位に施文するもの、異方向に施文するもの、網目状に施文するものの3つに分けられる。器形はbタイプが主流をなす。内面斜行沈線、口縁下の円孔刺突、沈線と、押型文との共通要素を示す。

A種 縦位に施文するもの

縦位方向あるいは斜位方向に回転施文する。0段r撰り、1撰り、1段R撰り、L撰りの原体を用いる。撰糸文の条間が粗のものと密のものがあり、条間が密なものは内面に横位方向の施文がみられる場合が多い。また内面に横位方向の条線を施すものや、絡条体圧痕を施すものがある。内面斜行沈線は刻み状の細く短いものが施される。器形はbタイプが主となる。

B種 網目状に施文するもの

縦位方向あるいは斜位方向に回転施文する。原体は0段r撰り、1撰り、1段R撰り、L撰りのほか、1撰りとL撰りの2本の撰糸を用いたものもある。内面斜行沈線が施されるが短く終る。内面に横位方向の施文を施すものもある。器形はbタイプを呈する。

C種 異方向に施文するもの

一定方向ではなく、縦位方向や斜位方向に回転施文する。原体は0段r撰り、1撰り、1段R撰りのものがみられる。短い内面斜行沈線、絡条体圧痕がみられる。器形はbタイプを呈する。

III類 縄文土器

縄文土器は条痕地にLRの原体を用いて施文する。内面を条痕調整するものとナデ調整するものがあり、前者には内外面に縄文を施文するものが顕著である。器形はeタイプを呈する。

IV類 沈線文土器

施文方法により3つのタイプに区分される。

(1) 直線的な沈線により、格子状の文様をなすもの。口縁端部あるいは内面に貝殻の腹縁により押圧がみられる。また内面斜行沈線を施すものもある。器形はCタイプのものとeタイプのものがみられる。

(2) 条線を施すもの。縦位方向あるいは横位方向に施す。器形はeタイプを呈する。

(3) 波状文を施すもの。概ね横位方向に施され、内面にも施文がみられる。口縁端部に格子目文、外面に竹管刺突を施すものがある。器形はeタイプを呈する。

V類 ^{註2}貝殻文土器

貝殻の腹縁、殻頂による押圧、または腹縁、背面による条痕が施される。口縁端部に貝殻圧痕、格子目文がみられる。器形はeタイプ、fタイプがみられる。

VI類 刺突文土器

棒状工具や竹管による刺突がみられる。文様構成は円形のものを横位に列をなして施すもの、沈線を伴うもの、橢円形のものを縦位に列をなして施すものがあり、施文範囲は胴部上半にとどまる。器形はeタイプとgタイプがみられる。

VII類 無文土器

口縁端部に貝殻圧痕や刻みを施すもののがみられ、また極めて短い内面斜行沈線や絡条体圧痕を施すものもある。器形はeタイプとfタイプがみられる。

その他

I類2群A種の山形文に分類した土器に、九州の手向山式土器に類似するものがある。口縁下に刻み目隆帯を施し、その下に縦位方向の山形文と横方向の数条の押引き沈線を施す。口縁内面には横位に山形文を施す。また、前回はIII類の縄文に、今回はIV類の沈線文に分類したものに、九州の平桙式土器に類似するものがある。口縁下に沈線と刺突による施文がなされ、胴部外面に結節縄文を施すもので、これらを刺突を施す隆帯によって画するものもある。器形は口縁が若干外反し、波状口縁をなす。胴部が若干膨みをもち、平底を呈するものと思われる。

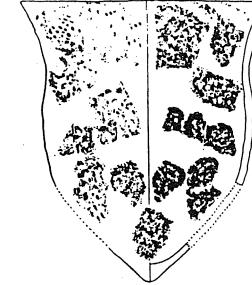
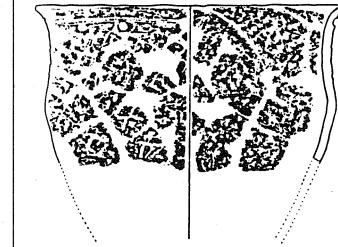
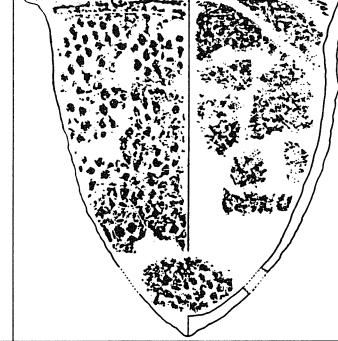
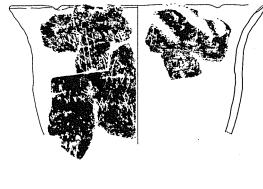
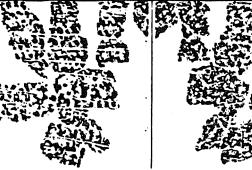
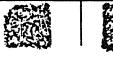
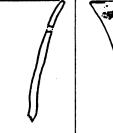
3 土器の諸要素（挿表13）

文様、器形以外の土器の諸特徴について以下に述べる。

(1) 口縁端部の施文

橢円押型文（I類2群B種）、縦位撚糸文（II類A種）、異方向撚糸文（II類C種）以外の土器に口縁端部の施文がみられる。

刻み I類1群、網目状撚糸文（II類B種）、縄文（III類）、沈線文（IV類）、貝殻文（V類）、刺突文（VI類）、無文（VII類）にみられる。網目状撚糸文（II類B種）の刻みはあるいは内面斜行沈線の極めて短いものかもしれない。縄文（III類）の刻みは綾杉状のもので、他と趣きを異にする。

	I類 2群 A(1)	I類 2群 A(2)	B	C	II類 A	II類 B	III類	IV類(1)	IV類(2)	IV類(3)	V類	VI類	VII類
a													
b													
c													
d													
e													
f													
g													

挿図73 繩文土器形態別分類図

る。

山形文 山形押型文（I類2群A種）にみられる。

貝殻压痕 沈線文（IV類(1)）、貝殻文（V類）、無文（VII類）にみられる。

格子目文 沈線文（IV類(3)）、貝殻文（V類）にみられる。

刺突 山型押型文（I類2群A種(1)）にみられる。

沈線 山型押型文（I類2群A種(1)）、菱形押型文（I類2群C種）にみられる。また、沈線文（IV類(3)）に外面と同じ波状の沈線を施すものがある。

縄文 縄文（III類）にのみみられる。

口縁端部に外面と同様な文様を施すのは、山形文（I類2群A種）、縄文（III類）、沈線文（IV類(3)）、貝殻文（V類）である。逆に沈線文（IV類(1)）、無文（VII類）には外面文様と異なる貝殻压痕を施すものがある。また沈線文（IV類(3)）、貝殻文（V類）には格子目文を施すものがみられる。

(2) 内面斜行沈線

内面斜行沈線を施すのは、山形押型文（I類2群A種(2)）、楕円押型文（I類2群B種）、菱形押型文（I類2群C種）、撚糸文（II類A、B、C種）、沈線文（IV類）、無文（VII類）である。断面形、間隔、長さ、幅にバラエティがあるが、これらは斜行沈線を施す原体、あるいはその使用法により多様性を示すものであろう。斜行沈線を施す範囲を、長（10cm以上）、中（10～5cm）、短（5～2cm）、極短（2cm以下）と便宜的に区分し、斜行沈線自体の幅を太、細に分け（中間的な

挿表13 縄文土器の諸特徴と文様の対応

	I 1 2 A (1)	I 2 A (2)	I 2 B	I 2 C	II A	II B	II C	III	IV (1)	IV (2)	IV (3)	V	VI	VII
口縁端部施文	○—○—○				○		○		○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○
刻み	○—○—○					○—○—○			○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○
山形文	○—○—○													
貝殻压痕									○—○—○			○—○—○		○—○—○
格子目											○—○—○			
刺突	○													
沈線	○—○—○		○—○—○								○—○—○			
縄文									○					
内面斜行沈線		○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○		○—○—○	○—○—○				
内面条線					○—○—○	○—○—○				○—○—○				
絡条体压痕			○—○—○	○—○—○	○—○—○									
内面具殻压痕									○—○—○			○—○—○		○—○—○
内面施文	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○		○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○
口縁下沈線		○—○—○	○—○—○	○—○—○		○—○—○								
口縁下刺突	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○	○—○—○									
竹管刺突											○—○—○		○—○—○	

* 1 ……綾杉文状の刻み

* 2 ……波状文

幅のものはみられない)、文様との関わりをみると(挿表14)、楕円押型文(I類2群B種)は全て幅が太で、長から極短までのバラエティを示す。菱型押型文(I類2群C種)も概ね幅は太で、長さは長から短までを呈するが、幅が細で長のものもある。撚糸文(II類A、B、C種)は、幅が太、細の両者がみられるが、長さは短、あるいは極短で、網目状撚糸文(II類B種)のみ長さが中のものがみられる。沈線文(IV類(1)、(2))は長さは長だが、IV類(1)は幅が太で、IV類(2)は細である。無文(VI類)は幅は太、細両方あり、長さはすべて短あるいは極短を呈する。形態との関わりでみると(挿表15)、aタイプは多様性を示すが、幅が太のものが多い。bタイプは長さに多様性はあるが、幅は太が主である。cタイプはすべて幅が太で、長さは長を示す。dタイプでは内面斜行沈線を施すものは見当らず、小型の土器は概ね長さは短、あるいは極短で、幅は太、細両方を呈する。

以上の結果から、内面斜行沈線の施し方は土器の形態と密接な関連をもつことがうかがわれる。すなわち大型の土器は幅太で長さの長い斜行沈線が施され、小型の土器は短い斜行沈線が施される傾向がある。例えば強く外反する口縁をもつcタイプはすべて幅太で、長さが長くその間隔が密で、いわゆる波トタン板状である。内面斜行沈線は口縁部を外反させる過程で施される調整痕であると思われる。内面斜行沈線が斜走し、弧を描くのも口縁を外反させる手法と考える。楕円押型文(I類2群B種)の斜行沈線が多様性を示すのは、その形態が多様性を示すからであろう。

(3) 条 線

条線は沈線文(IV類(2))にみられる施文だが、縦位撚糸文(II類A種)、異方向撚糸文(II類C種)の内面にもみられる。これらは外面の撚糸文と条の太さ、間隔が同様であることから、撚糸文の原体を用い、これを器壁に押し当て回転させずそのまま引搔いたものと考えられる。沈線文の条線は撚糸文の条線より派生したものと思われる。

(4) 絡条体圧痕

楕円押型文(I類2群B種)、縦位撚糸文(II類A種)、異方向撚糸文(II類C種)、無文(VI類)にみられる。絡条体圧痕を施す土器には内面斜行沈線がみられない。すべて口縁端部内面に斜位に押圧されており、その様は短い内面斜行沈線を思わせる。

(5) 内面貝殻圧痕

内面に貝殻圧痕を施す土器は、沈線文(IV類(1))、貝殻文(V類)、無文(VI類)にみられる。沈線文(IV類(1))、無文(VI類)は腹縁による押圧、貝殻文(V類)は腹縁、殻頂による押圧が施される。

挿表14 内面斜行沈線と文様

	太				細	
長	IB IC			IV(1)	IC	
中	IA(2) IB IC				II B	VII
短	IB	IC	II A	II B	II C	VII
極 短	IB	II A		VII		VII

挿表15 内面斜行沈線と器形

	a	b	c	d	e	f	g
太 長	○	○	○		●		
細 長	●				●		
太 中	●	○			●	●	
細 中	●						
太 短	○	○				●	
細 短	●	●				●	●
太 極 短		○					
細 極 短		●				●	

○……よくみられるもの

●……若干みられるもの

(6) 内面施文

内面に外面と同様の文様を施す土器は、I類1群、山形押型文(I類2群A種)、楕円押型文(I類2群B種)のeタイプのもの、撚糸文(II類A、B、C種)、縄文(III類)、沈線文(IV類)、貝殻文(V類)にみられる。押型文(I類)及び網目状撚糸文(II類B種)は口縁内面に横位に施している。

(7) 口縁下の沈線、刺突

口縁下に沈線を施すものは、山形押型文(I類2群A種(2))、楕円押型文(I類2群B種)、菱形押型文(I類2群C種)、網目状撚糸文(II類B種)にみられる。また口縁下に円孔刺突を施す土器は、山形押型文(I類2群A種(1))、楕円押型文(I類2群B種)、菱形押型文(I類2群C種)、撚糸文(II類A、B、C種)にみられる。これらの刺突は、その直径が施文原体の直径とほぼ同じ数値を示すことにより、施文原体の端部よって施されたものと思われる。

(8) 竹管刺突

刺突文(VI類)と波状文を施す沈線文(IV類(3))にみられる。

4 分類相互の相関関係

当遺跡出土の土器は、文様による分類を越えて概括すれば、大型の土器と小型の土器という区分と内面斜行沈線の有無による区分の2つの視点からまとめられる。必ずしも両区分がうまく合致するわけではないが、前でみたように、内面斜行沈線は大型の土器に施されることが多いといえよう。逆に無文以外の小型の土器には内面斜行沈線はほとんど施されない。この傾向は文様の分類相互の相関関係を考える上での大枠となる。

内面斜行沈線を施す一群の土器についてみれば、形態的にはaタイプ、bタイプ、cタイプを共通の器形とし、かつ押型文と撚糸文のように原体を回転施文するという手法の共通性をみせる。口縁下に沈線、刺突を施すという点も、共通してみられる特徴である。沈線文(IV類(1)、(2))は回転施文するものではないが、IV類(1)は菱形文→網目状撚糸文→格子目を施す沈線文という、菱型を指向する文様の系譜が連れよう。またIV類(2)は縦位撚糸文→内面条線を施す撚糸文→条線による沈線文という系譜が連れよう。なお山形押型文(I類2群A種(2))のうち、内面斜行沈線を施すものは1点のみであったが、その施し方は楕円押型文(I類2群B種)中の1例に極めて類似する(今回出土の23と43)。

内面斜行沈線を施さない土器群はeタイプの土器に代表される一群である。これらの中では、楕円押型文(I類2群B種)・縦位撚糸文(II類A種)・異方向撚糸文(II類C種)・無文(VI類)にみられる絡条体圧痕、山形押型文(I類2群A種)・eタイプ、fタイプを呈する楕円押型文(I類2群B種)・縄文(III類)・沈線文(IV類)・貝殻文(V類)・刺突文(VI類)・無文の小型の器形、山形押型文(I類2群A種)・楕円押型文(I類2群B種)・縄文(III類)・沈線文(V類)・

貝殻文（V類）・刺突文（VI類）にみられる内面施文、沈線文（IV類(1)）・貝殻文（V類）・無文（VII類）にみられる貝殻腹縁圧痕、沈線文（IV類(3)）・貝殻文（V類）にみられる口縁端部の格子目施文、沈線文（IV類(3)）・刺突文（VI類）にみられる竹管刺突等の共通性が指摘できる。

以上の各分類相互の共通性をまとめ、各分類の相関関係と先後関係をまとめたものが挿表16である。内面斜行沈線をメルクマールとするが、沈線文（IV類）と他の土器との相関関係が柱となる。沈線文（IV類(1)、(2)）は内面斜行沈線をもつ土器群との共通性がみられ、IV類(3)は内面斜行沈線を施さない土器群との共通性が認められる。従ってIV類(1)、(2)とIV類(3)は一線を画するものと考える。ただしIV類(1)は小型化すると格子目文を残しながらも、内面斜行沈線を施さない土器群との共通性を示し、IV類(3)との関接的な結びつきを持つ。

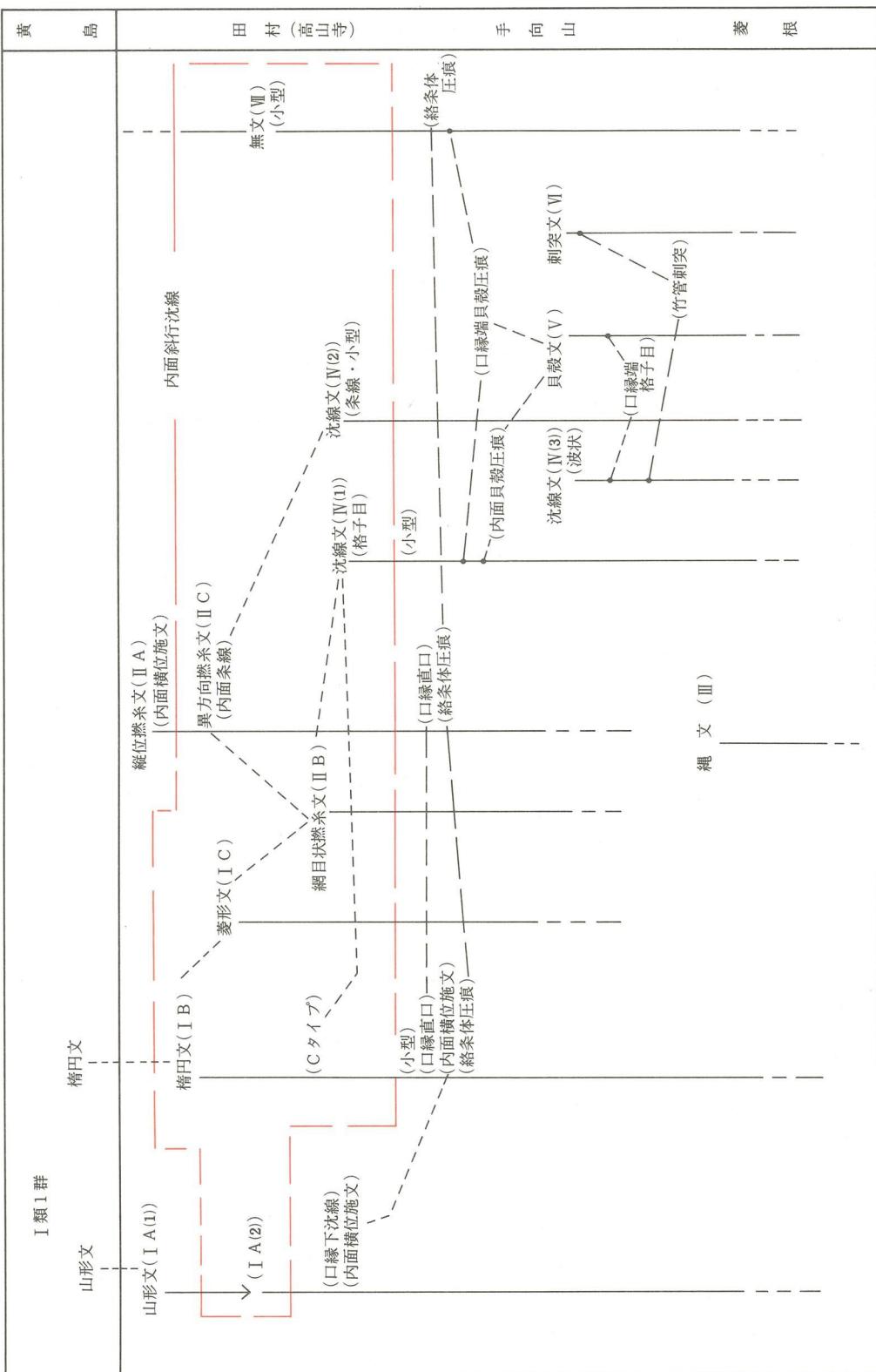
この前提をもとに土器全体を概観すれば、内面斜行沈線を施す大型の土器を主体とする一群と、内面斜行沈線を施さない小型の土器を主体とする一群とは一線を画するものと思われる。前者は前段階（I類1群）から継続する押型文を主流としており、後者に先出すると考える。なお縄文（III類）は他の共通要素があまり認められず、後者の一群の範疇に入れ難い。他地域においては、^{註3}条痕地に条文を施す土器は早期末～前期初頭に位置付けられており、縄文（III類）は早期の土器群中最も後出するものと位置付けられよう。

註1 正円はその形状から橢円文の範疇に収めたが、土器成形後乾燥した胎土に施文した場合、または原体のプレスが弱い場合、菱形の角が不明瞭となり円形状の文様になる。よって、あるいは菱形文である可能性もある。

註2 大分県管無田遺跡出土のⅦC類に類例がある。『管無田遺跡・野津川流域の遺跡Ⅶ』野津町教育委員会 1986年

註3 酒詰仲男、石部正志「島根県菱根遺跡発掘調査報告」『出雲古文化調査報告書』同志社大学出雲古文化調査団 1959年

今回考察を執筆するにあたり、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々から多くの御教示、御指導を戴いた。特に久保穰二朗氏からは遺物整理の段階から懇切なる御指導を載き、当稿執筆に際し氏の御意見を大いに参考にさせて戴いた。記して謝意を表したい。



插表17 上幡万遺跡出土繩文土器編年的位置付け

	近畿	上幡萬遺跡	鳥取・周辺地区	九州
神代 葛籠尾崎 早期	寺川 山寺谷 穂	I類 1群 I類 2群 II III IV V VI VII 長山第1・北田山・井後草里 塚田 寄倉11層・菱根 平格	島 長山第1・陰田第9・タチヨウ・竹ノ花・西川津 島 目久美	川原荷台 下管生B 田ヤトコロ 手向山 平格 轟 佐太講武

第2節 上福万遺跡の性格

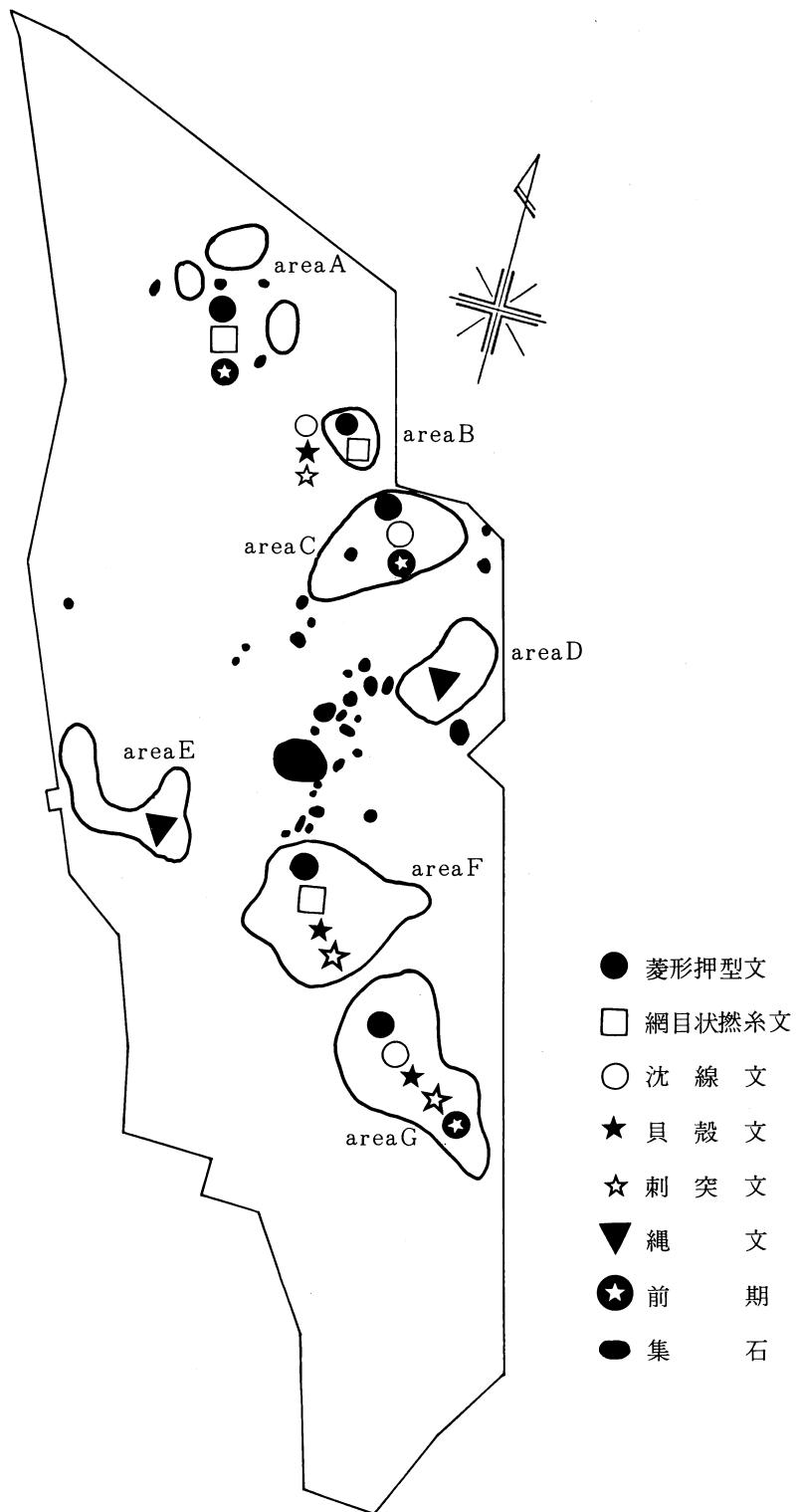
上福万遺跡において検出された集石は35基を数える。拳大～人頭大の石を円形状あるいは橢円形状に配し、その規模は最大で径8m、最小で径0.6mを測る。その下層に土塙を伴うものや、付近に使用痕を有する巨石塊を伴うものもある。遺物は、磨石、敲石、石皿の類が顕著にみられる。また伴出する土器は縄文早期に相当するが、全て破片である。当遺跡の集石について前回の報告書においては、土塙の有無、石の配列をもとに分類を試みた上で、埋葬施設の可能性を指摘している。すなわち集石は墓標であり、土塙を有さないものは遺体を石で被覆したものと考察している。また磨石等の石器が集石の石材の一つとして使用されており、その配置に意図的なものを看取している。今回検出した4基の集石は、石がやや小ぶりではあるものの、前回検出した集石と構造的に変るものではない。ただし集石34が使用痕をもつ巨石塊を伴うのは注目される。

集石の構造は、その性格に規定された結果であろうが、集石の石の配列や規模に多様性が認められ、単一の規格をとらないことは集石の意味を考える上で留意されよう。また石材として礫石器を使用に供することは、単に無作為の結果としては捉え難く、集石の性格との密接な関連が想起される。土器片の出土は概ね集石の下部からで、集石上に土器が据え置かれた形跡は認められない。他遺跡の集石の例では炉跡の可能性を指摘されるものがあるが、当遺跡の集石には一定範囲での焼痕や炭化物の出土は認められず、石材中に焼石を使用するものはあるが、当遺跡においてはその可能性は少ないのであろう。

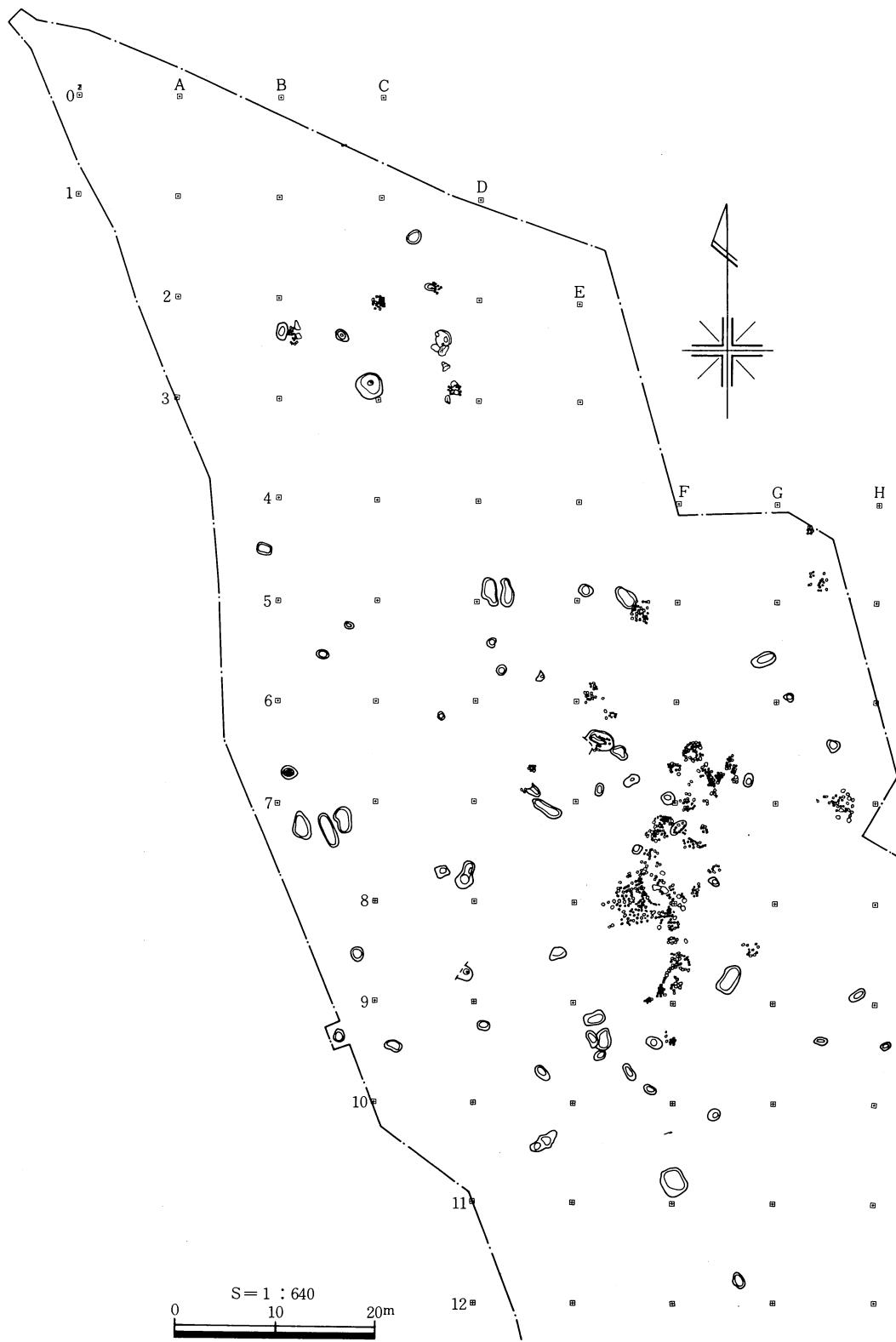
遺跡を概観するに、集石は概ね5EG～9EG、6FG～8FGに集中する。これをとり囲む様に土器の集中出土がみられる。土器の集中出土箇所は、7つのareaに概括され、それぞれが集石の密集範囲を囲んで位置する(挿図75)。各エリアは橢円押型文(I類2群B種)が主流をなすが、その他の土器の出土状況はエリアによって様相を異にする。菱形押型文(I類2群C種)はエリアA、B、C、F、Gに、撚糸文(II類)は各エリアにみられるが網目状撚糸文(II類B種)はエリアA、B、Fに特に顕著にみられる。沈線文(IV類)はエリアB、C、G、貝殻文(V類)と刺突文(VI類)はエリアD、F、Gに、縄文(III類)はエリアD、Eに顕著である。また前期の土器はエリアA、C、Gに顕著である。

これらのエリアは、礫群の帶の間の凹部に形成されており、礫群を避けているが、エリアは居住空間を示すものと考えられる。従って居住空間に囲まれた集石の集中する範囲は、日常生活を営む空間とは区別された場所と思われる。その性格として、墓域あるいは祭祀の場としての位置付けが想起されよう。前回の報告書で示されているように、集石を埋葬施設と考えれば、集石に伴う土塙はすなわち墓塙と捉えられる。土塙を伴わない集石に関しては、石により遺体を被覆したものとも考えられるが、あるいは何らかの祭祀がとり行なわれた施設としての位置付けも考慮されよう。集石の石材として堅果類食物の調理器具としての礫石器が使用に供されるという事象は居住空間と墓域、あるいは祭祀空間との密接な関わりがうかがわれる。

上福万遺跡は、いくつかの生活空間をもち、それらと区別された墓域、祭祀空間を有する集落であったであろう。その盛行期は、主流をなす橢円押型文土器の製作された時期で、その後前期初頭まで継続する。



挿図74 繩文土器集中出土地域分布図



挿図75 縄文遺構全体配置図

第3節 竪穴住居について

1 上福万遺跡の竪穴住居

上福万遺跡で検出された竪穴住居は、計16棟である。その内2棟は建て替えがなされていた。これらの竪穴住居には、時期差がほとんど認められず、SI-14を除くと青木V・VI～VIIの範疇に含まれる。以下、上福万遺跡の竪穴住居の構造について概観する。

平面形 当遺跡の竪穴住居の平面プランは、円形1棟、隅丸五角形3棟、隅丸方形10棟、方形2棟と多様性を示す。また、建て替えのみられる住居が、円形→隅丸方形、あるいは、隅丸方形→隅丸五角形へとプランを変えている。

柱穴 主柱穴は、2本、4本、5本のものが見られる。平面形との関わりを見ると、隅丸五角形住居は5本、隅丸方形、方形、円形住居は4本、あるいは、2本で建てられている。

補助柱穴 SI-05（挿表18・④）の補助柱穴のあり方は、特徴的である。各主柱穴の間に補助柱穴がそれぞれ掘られており、側溝内には、小ピットが25ヶ所見られる。この事は、竪穴住居の構造を考える上で興味深い。その他、SI-04がこれに類似し、他遺跡では林ヶ原遺跡^{註1}で見られる。（挿表18・①）。

床面積 床面積は、最小で9m²、最大で47m²とばらつきが見られ、平均すると27.5m²となる。概して、面積の広い住居は、主柱穴の本数も多い。

特殊ピット 特殊ピットは、SI-06・09以外のすべての竪穴住居に見られる。形態的には、円形（SI-01、03、05）、楕円形（SI-06、11、12、13、15）、不整形（SI-04）、方形（SI-16）のものがあり、二段掘りの構造を持つもの（SI-01、02、03、04、06、16）も存在する。中には、溝を伴うもの（SI-02、03、06、07）もあるが、この機能については、明確でない。また、注目される例として、SI-08、11の小規模な特殊ピットがある。SI-08（挿表18・⑦）は39cm×32cm-12cmとピット幅が他の主柱穴よりも狭く深さも他の特殊ピットに対して浅い。またSI-11は、186cm×140cm-26cmとピット幅は、他の主柱穴よりも広いが、深さがそれに比して26cmと浅い。この現象は、これら二つの竪穴住居の壁際に柱穴とは異なるピットが存在する事と関係すると思われる。青木遺跡において、特殊ピットが中央から壁際へ移動するという報告がされているが、上福万遺跡でも同様に壁際のピットは中央から移動したものと考えたい。中央の小規模な特殊ピットは、他の特殊ピットとは様相を異にしており、同様な機能をはたしていたとは考え難く、所謂、特殊ピットとは区別されるものであろう。また、SI-08に伴う壁際の特殊ピット周辺に炭と粘土面（焼土面？）が検出された。特殊ピットの性格として炉または、カマドが考慮されよう。

その他 SI-11は、二つの主柱穴を起点とする溝で区切られた北側及び、南側の一区画の床面が、住居中央部よりやや高くなっている、他の床面空間とは、意識的に区別して造られた可能性が考えられる。^{註5}

以上、上福万遺跡の竪穴住居について概説したが、次に、日野川流域における竪穴住居の変遷

を時代的に概括する。

2 日野川流域における竪穴住居の変遷

平面形、特殊ピットの形態、ベット状遺構の有無などの視点から考える。

弥生中期 弥生中期の遺跡として日野川右岸においては、大山山麓の台地上、丘陵上に立地する下山南通遺跡、林ヶ原遺跡、貝田原遺跡、また、日野川左岸においては、長者原台地上に青木遺跡、山陵の支尾根部に東宗像遺跡が存在する。平面形は、円形、楕円形、隅丸方形、隅丸長方形、と多様性を示すが円形が大半を占める。特殊ピットの平面形には、方形、楕円形、円形がみられ、二段掘りの構造を持つものや土堤を巡らすものもある。

弥生後期 下山南通遺跡、福市遺跡（吉塚A区）、東宗像遺跡、青木遺跡がある。福市遺跡（吉塚A区）は、日野川左岸の丘陵上に立地する。平面形は、円形、隅丸方形、隅丸多角形（長方形）^{註6}と多様であるが、隅丸方形、隅丸多角形が多い傾向にある。特殊ピットは、円形、楕円形、隅丸方形、方形の平面形に二段掘りの構造を持つもの、土堤を巡らすものがある。

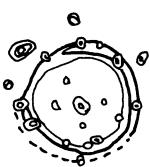
古墳前期 上福万遺跡、林ヶ原遺跡、諏訪遺跡群（西山ノ後地区）、福市遺跡（吉塚A区）、奈喜良遺跡、青木遺跡がある。日野川左岸に位置する諏訪遺跡群（西山ノ後地区）、奈喜良遺跡は丘陵上に立地している。平面形は、円形、隅丸方形、隅丸五角形、長方形、方形など多様であるが、円形が僅んどなく多角形、方形、長方形が多い。特殊ピットは、円形、楕円形、不整円形、方形を呈し、二段掘りの構造を持つものが中央に存在するほか、壁際にもみられる。奈喜良遺跡1号住居跡（挿表18・⑧）は、南壁中央に小ピットと細い溝を有する方形のピットを持ち、南東コーナーには土堤をもって区切られた場所にピットを掘り込んでいる。中央にはピットは掘られず多量の炭化物が検出されたのみであった。また住居の切り合い関係を見せる奈喜良8号住居跡は、中央特殊ピットを有する隅丸方形住居が壁際特殊ピットを持つ方形住居に切られている。後者は、浅い皿状の炉跡（焼土充満）を伴うものであった。次にベット状遺構を有する例としては、福市遺跡（吉塚A区）、青木遺跡、上福万遺跡が挙げられる。

古墳中期 福市遺跡（吉塚A区）、樋ノ口第3、第4遺跡、東宗像遺跡、青木遺跡がある。樋ノ口第3、第4遺跡は、長者原台地の東辺丘陵上に立地する。平面形は、方形、隅丸方形、長方形を呈し、円形、多角形は、全くみられない。特殊ピットは壁際にみられるものばかりで、床面中央には、皿状に凹む焼土面が検出される事も少なくない。樋ノ口第3遺跡S I-01（挿表18・10）は、壁際中央に二段掘りのピットを有し、両脇に溝を伴っている。また、床面中央には、皿状に凹む焼土面が検出されている。

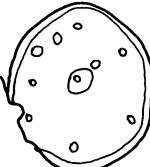
古墳後期 久古第3遺跡、福市遺跡（吉塚A区）、諏訪遺跡群（新田地区）が存在する。久古第3遺跡は日野川右岸の大山山麓に立地している。平面形は、方形を呈するものばかりで、特殊ピットはみられない。また、ベット状遺構が久古第3遺跡（挿表18・12）でみられ、平面形が長方形またはL字状を呈するものがある。

挿表18 日野川流域における堅穴住居の時期別分類表

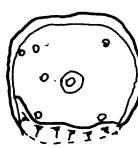
遺 跡 名			平 面 プ ラ ン	特 殊 ピ ッ ト	ベット状 遺 構			
弥 期	中 下 林 貝 東 青	山 ケ 田 原 像 木	通 原 原 像 木	円 隅 隅 隅 楕	形 丸 長 方 円 形 形 形 形	円 楕 隅 方 ※ ※	形 円形 方形 二段掘り 土堤	中央 中央
	後 福 東 青	市 宗 像 木	(吉塚A区)	円 隅 隅 (長 方 形) 青木遺跡で1例認められる	形 丸 多 角 形	円 楕 方 隅丸方形 ※ ※	形 円形 方形 二段掘り 土堤	中央
古 期	前 上 林 福 福 諏 訪 奈 喜 青	福 ケ 市 (吉塚A区) 訪 (西山1後) 良 木	万 原 方 五 角 方 長	円 隅 隅 方	形 形 形 方 形 形	円 楕 不整円形 方 ※	形 円形 壁 中央 際 二段掘り	青 木 上 福 万 塚 吉
	中 樋 樋 東 青	市 ノ 口 第 3 4 宗 像 木	(吉塚A区)	方 長 隅	形 方 丸 方 形	円 楕 方 形 ※	形 円形 壁 際 二段掘り	
墳 期	後 久 福 諏 訪	古 市 (吉塚A区) 新田地区	第 3 久 古 第 3	方	形			久古第3



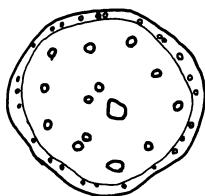
① 林ヶ原
SI-10



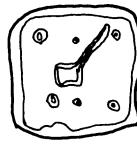
② 吉塚A区
SI-01



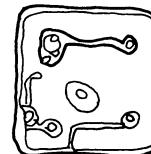
③ 下山南通
SI-10



④ 上福万
SI-05



⑤ 上福万
SI-03



⑥ 上福万
SI-11



⑦ 上福万
SI-08



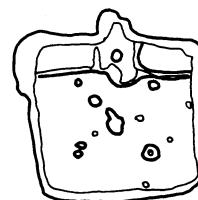
⑩ 桶ノ口第3
SI-01



⑪ 桶ノ口第3
SI-03



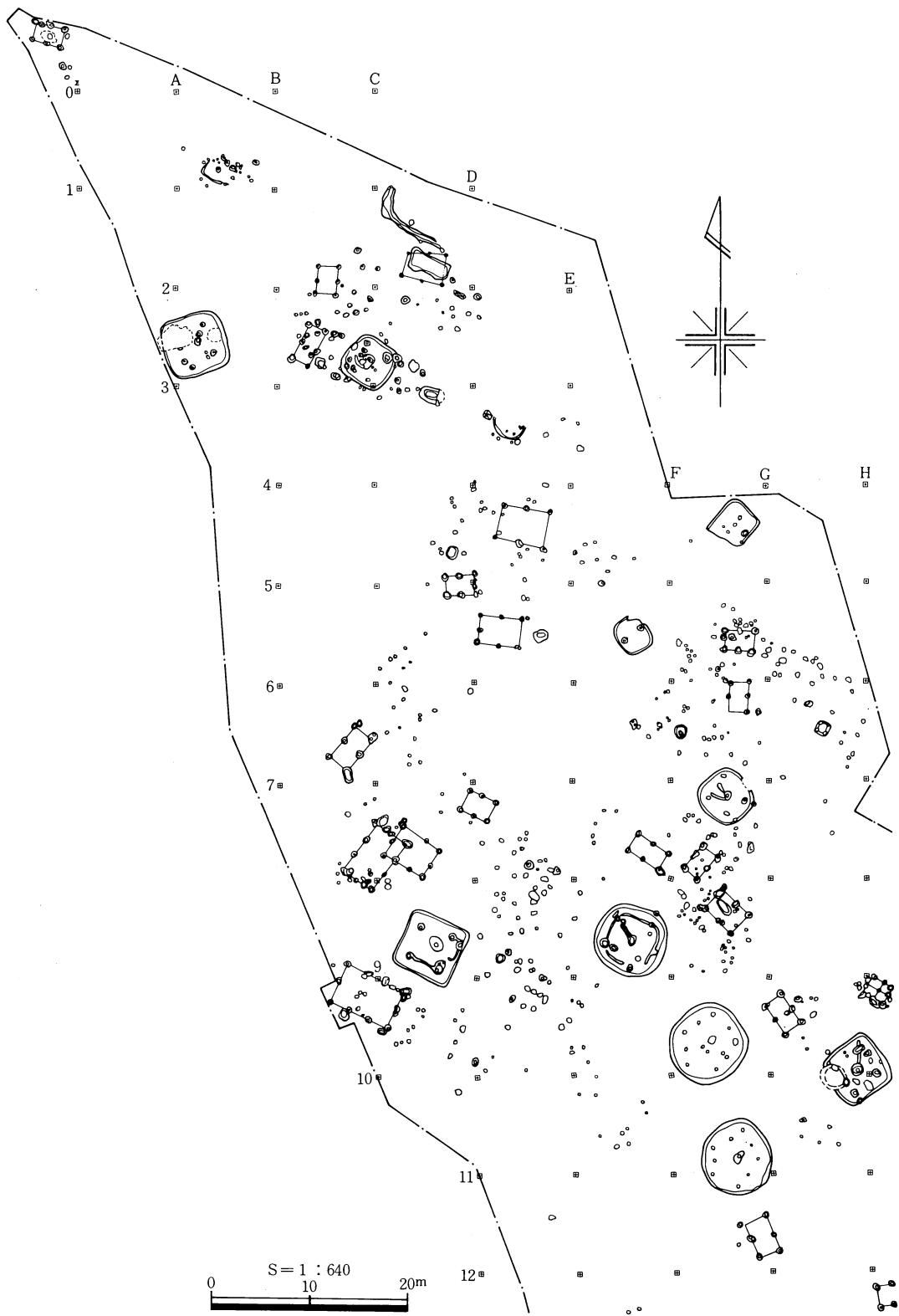
⑧ 奈喜良
SI-01



⑨ 青木H区
SI-07



⑫ 久古第3
SI-06



插図76 古墳遺構全体配置図

日野川流域における弥生時代中期～古墳時代後期までの竪穴住居の特徴を概観してきたが、それを各時期別にまとめたものが挿表18である。弥生時代～古墳時代の竪穴住居の平面プランの変遷は、概ね、弥生中期（円形、隅丸方形）⇒弥生後期（円形、隅丸方形、隅丸多角形）⇒古墳前期（円形、隅丸方形、隅丸多角形、方形、長方形）⇒古墳中期（隅丸方形、方形、長方形）⇒古墳後期（方形）といった流れを辿るようである。ここで興味深いのは、古墳時代前期までみられた多様な平面プランが、中期に入ると隅丸方形、方形、長方形プランのみとなり、後期には方形プランしか見られなくなるという事である。既に、青木遺跡では弥生時代～古墳時代に至る変遷が円形→隅丸方形→隅丸多角形→長方形→方形をとる事、また古墳時代前期（V・VI期）に方形化に向う事が指摘されている。この方形化を辿る一連の流れは日野川流域でもみられる事である。しかし、日野川右岸域では古墳時代中期に方形化がみられ、地域差があったものと思われる。

特殊ピットの変遷をみると、弥生時代後期までは、円形、橢円形、方形のピットが中央に掘られるものが大半を占め、その構造は、二段掘りするもの、ピットのまわりに土堤を巡すものが多い。古墳時代前期に入るとこれらのほか、方形二段掘りのピットが壁際付設されるものも現われる。中期には、壁際の方形二段掘りのピットのみがみられ、後期には、特殊ピットを付設するものはみられない。前述したとおり、特殊ピットは、中央から壁際に移動するとされるが、これは平面プランの方形化とあいまっておこる現象で、竪穴住居の構造上、何らかの変化があり、その結果として壁際に付設されるようになったと考えられる。

ベッド状遺構については古墳時代前期に青木遺跡、上福万遺跡、福市遺跡（吉塚A区）遺跡でみられるほか、古墳時代後期の久古第3遺跡でも検出されている。しかし、類例が少なく、変遷を辿る事は難しい。形態的には、壁際中央の特殊ピットを狭んで両脇に付設するものが大半を占める。機能については寝所説、祭壇説などが挙げられるが、これらベット状遺構が古墳時代前に出現し、その多くが特殊ピットの両脇に存在するということからして、住居プランの方形化とも合わせて考えられるべきであろう。

日野川流域における竪穴住居を平面プラン、特殊ピット、ベット状遺構から概括してきたが、特に住居の平面プランの方形化と、特殊ピットの壁際固定化の時期が一致する事は、注目される事象であった。また、日野川左岸域（青木遺跡、福市遺跡吉塚A区、諏訪遺跡群西山ノ後地区）では平面プランの方形化が日野川右岸域（上福万遺跡、久古第3遺跡）に比して、若干早くみられる事が、一連の中国横断道の調査で明らかとなった。今後、日野川水系の集落の様相を考える上で留意されよう。

- 註1 第10竪穴住居では、側溝中に深いピットを4ヶ所確認している。『林ヶ原遺跡発掘調査報告書』 鳥取県教育文化財団 1984年
- 註2 柱穴とは明らかに異なるピットで一般に特殊ピットと呼称されるものである。特殊ピットの性格には、炉跡、工作用ピット、祭祀関係跡、排水、防水施設等が考えられている。
- 註3 「地下水や湿気抜きの用途」等が推測されている。金閑恕「総論」『弥生文化の研究・7』 1986年

- 註4 他の竪穴住居の中央ピットは、主柱穴に比して大きい。
- 註5 前報告書では言及していないがベット状遺構の可能性が考えられる。
- 註6 青木遺跡で1例見られるのみである。

【参考文献】

- 『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第一遺跡・石州府古墳群』 鳥取県教育文化財団 1985年
- 『下山南通遺跡』 鳥取県教育文化財団 1986年
- 『久古第3遺跡、貝田原遺跡、林ヶ原遺跡発掘調査報告書』 鳥取県教育文化財団 1984年
- 『東宗像遺跡』 鳥取県教育文化財団 1985年
- 『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』 米子市教育委員会 1981、1982年
- 『陰田』 米子市教育委員会 1984年
- 『埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』 米子市教育委員会 1976年
- 『鳥取県米子市青木遺跡H地区遺構確認調査報告』 米子市教育委員会 1977年
- 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 鳥取県教育委員会 1978年
- 『福市遺跡』 米子市教育委員会・米子市福市遺跡調査団 1968年



調査参加者

調査組織

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもと下記の組織で実施された。

調査団体 財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西尾邑次

副理事長 坂田昭三

常務理事兼事務局長 平木安市

財団法人鳥取県教育文化財団 鳥取県文埋蔵文財センター

所長 田渕康允

次長 田中幸治郎

庶務課長係 竹内茂

調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 上福万埋蔵文化財調査事務所

所長 永原功

調査員 北浦弘人 浅川美佐子

調査補助員 野崎正美 左藤博 西田直史

下記の方々に発掘調査作業員、整理作業員として御協力いただいた。記して謝意を表したい。

発掘参加者（五十音順）

飯塚富吉、石本茂雄、植田玉枝、遠藤和子、大谷淑江、岡本恵美子、岡本千鶴子、加藤美津子、
加藤充代、金丸浩、金山勢津子、木下勉、幸形勝男、小杉久美子、佐藤節子、下村君子、下村磨
理枝、杉田千津子、高木八代枝、仲田茂、西村武雄、野々村恵美子、畠繁秋、福島栄、船岡幹子、
前田衛、松井嘉子、松波綾子、松原孝雄、松本堅、松本良子、宗政久和子、森下秀夫、森田美津
枝、矢田貝真澄、山上勝子、山口富美江、山根由喜江、山村節子、山本邦丈、吉岡幹江、米山喜
美栄、渡辺義行

整理参加者（五十音順）

桑崎知早子、福田和美、松岡朋子、山崎保子

図 版
(1 ~31)



調査前(南東より)



調査後(南より)



礫群(東より)



礫群(西より)



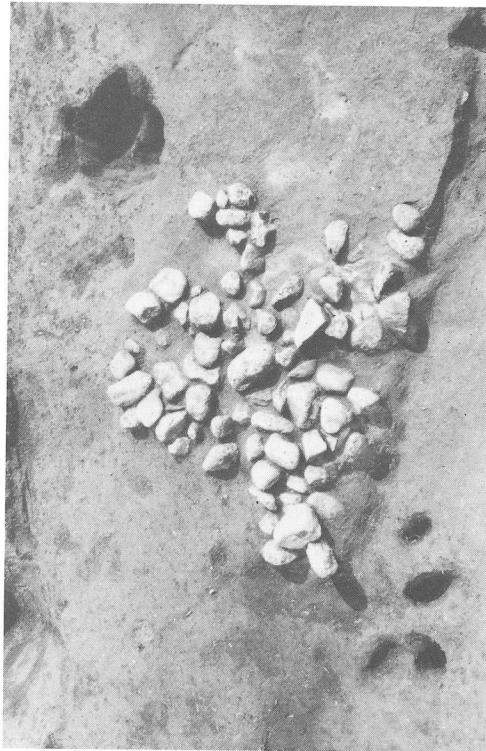
集石分布状況



集石34(西より)



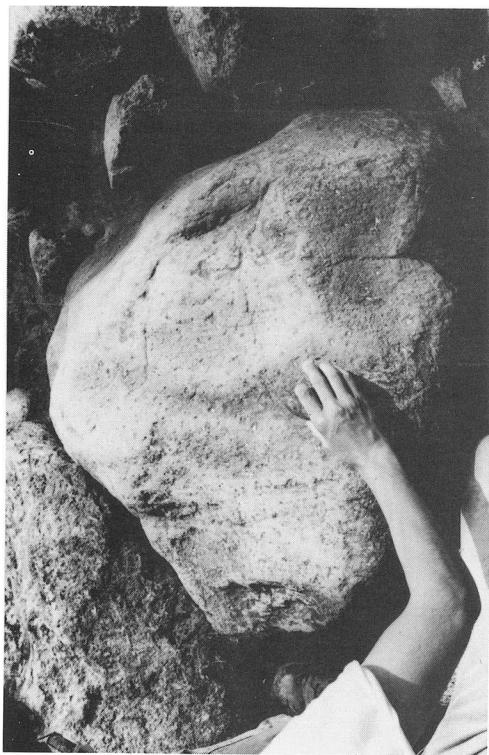
集石34に伴う土塗(東より)



集石33(北より)



集石33に伴う土塗(北より)



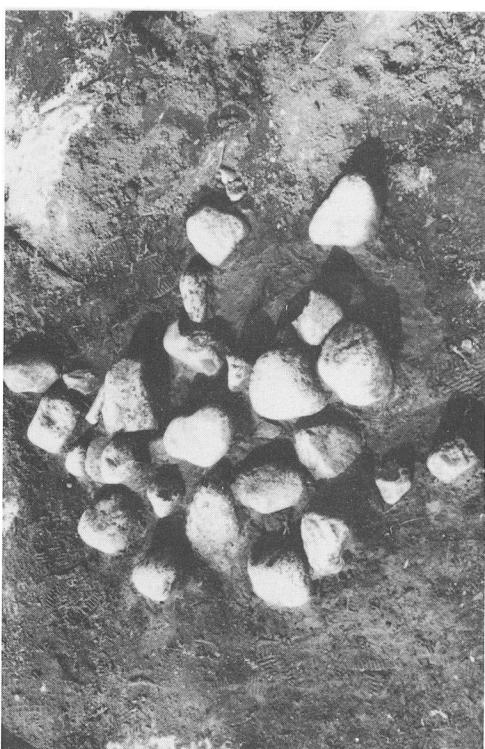
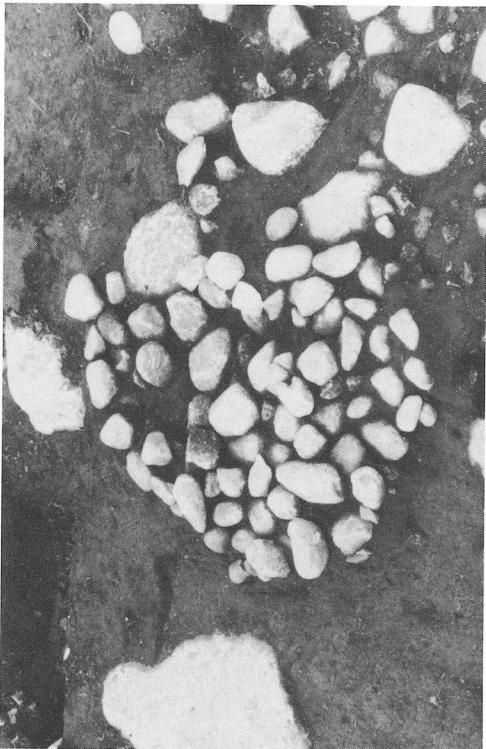
使用痕のある石2(北東より)



縄文時代層の掘り下げ



使用痕のある石1(北より)





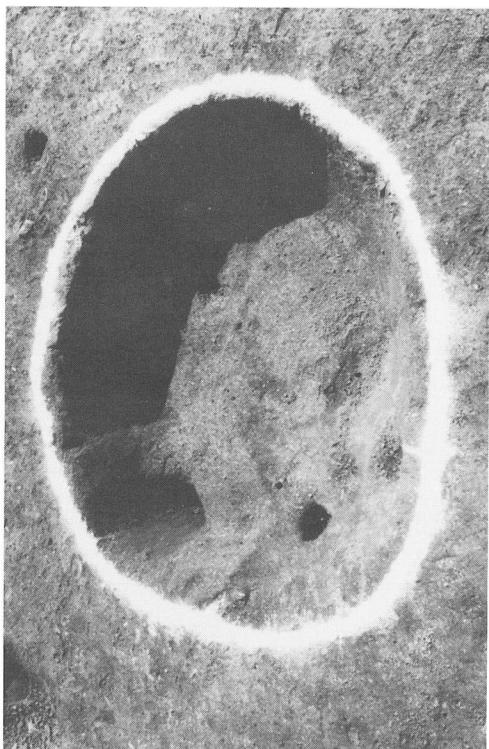
JSK-61 遺物出土状況(西より)



JSK-61 遺物取上後(西より)



JSK-60(南より)



JSK-60 掘り下げる(北より)



JSK-62 遺物出土状況(東より)



JSK-62 掘り下げる(北より)



JSK-61 掘り下げる(西より)



JSK-61 中央のピット(西より)



I類2群B種②a出土状況(4)(北より)



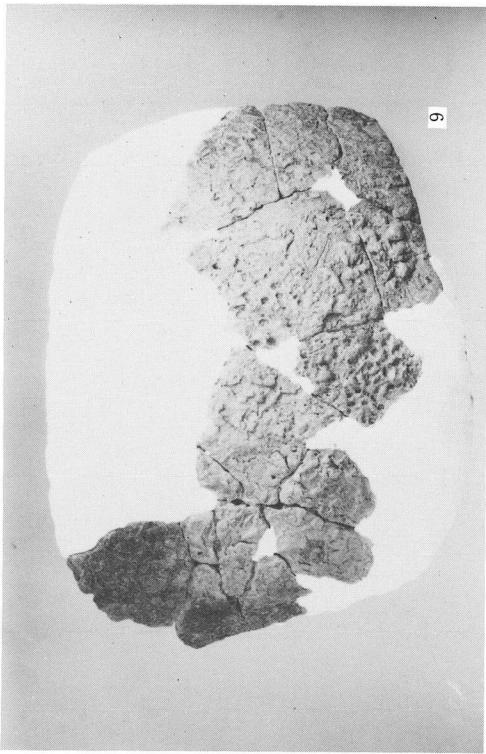
I類2群C種②出土状況(9)(南より)



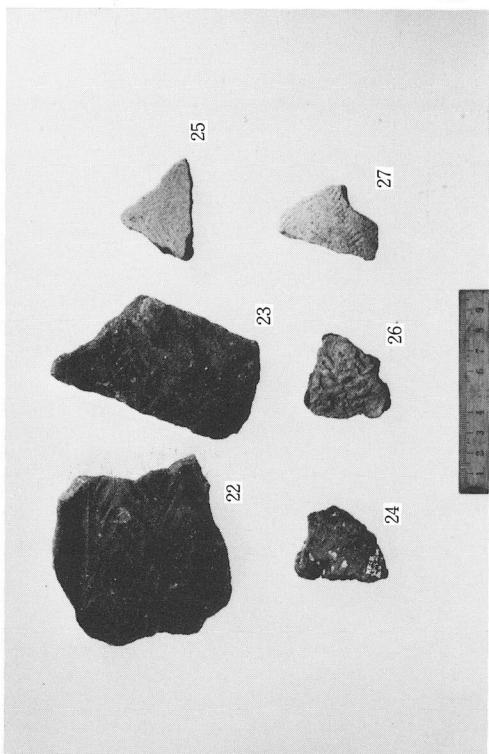
JSK-63(東より)



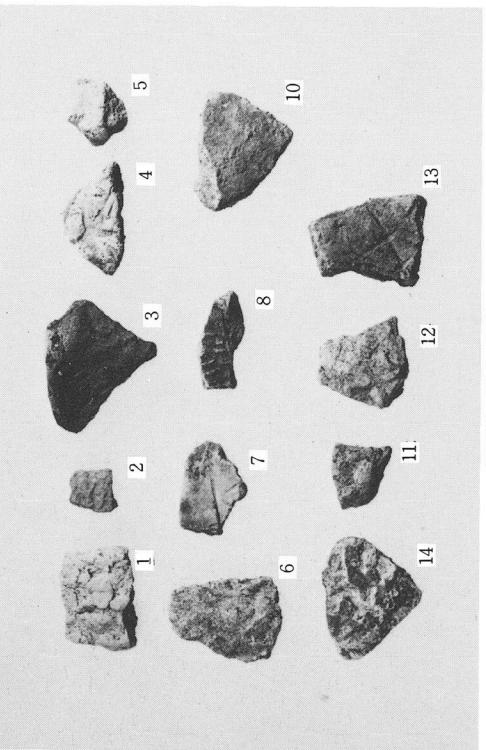
JSK-64(西より)



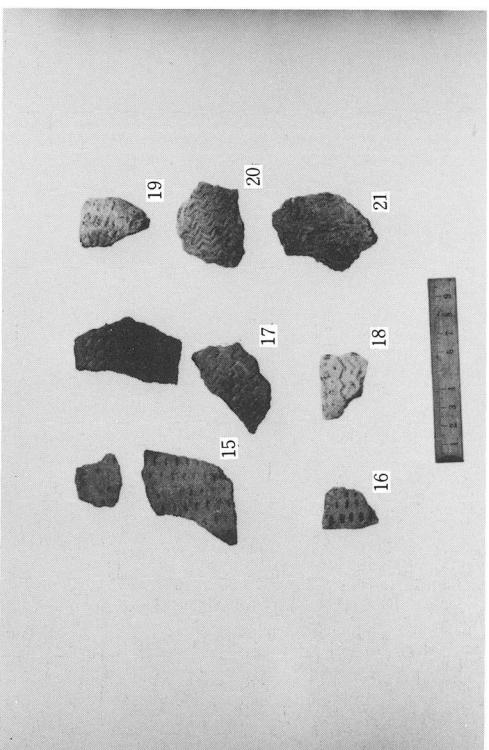
遺構に伴う土器



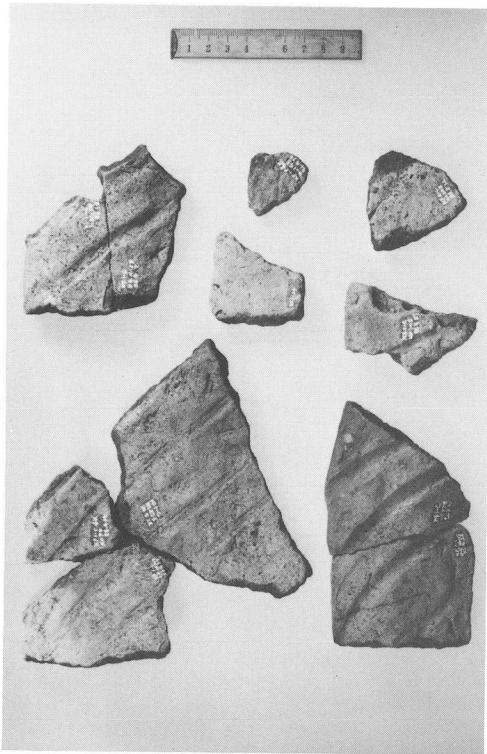
I類2群A種



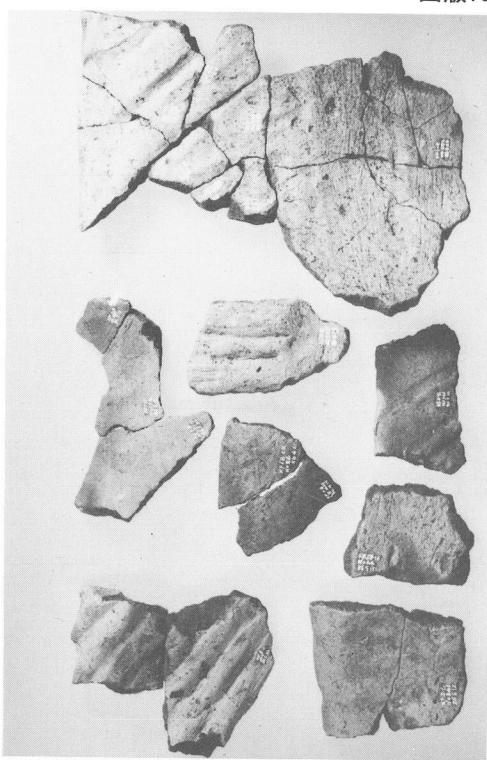
遺構に伴う土器



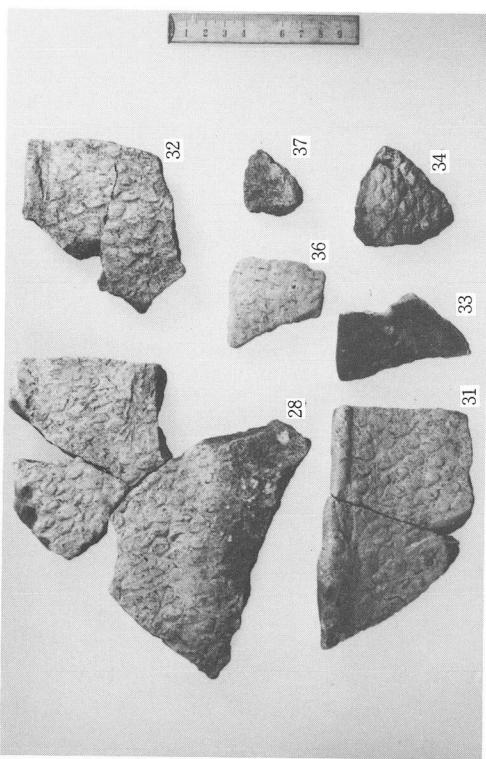
I類1群



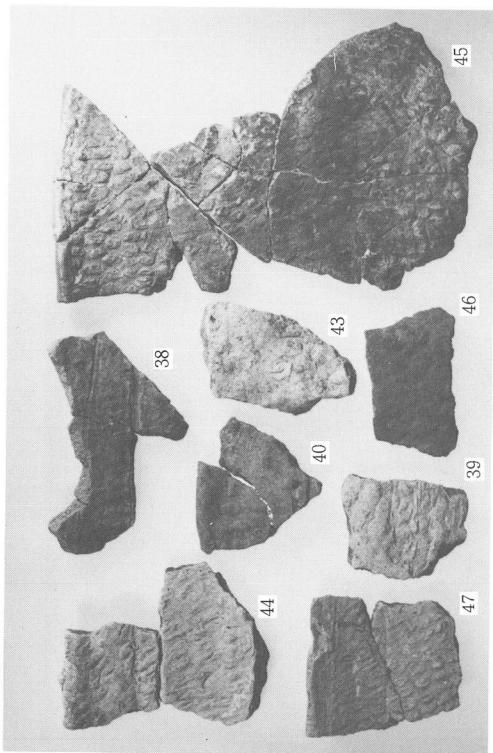
同左内面



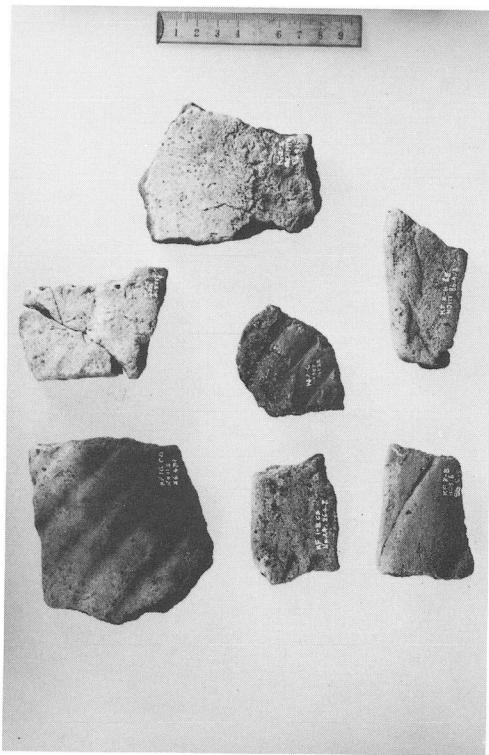
同左内面



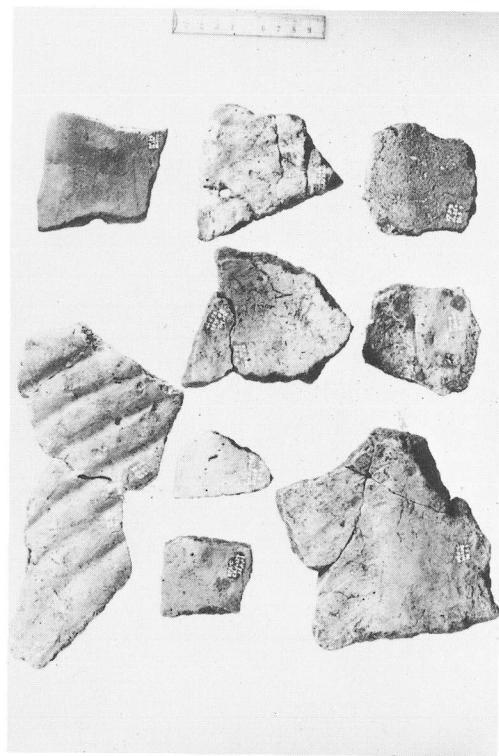
I類2群B種①



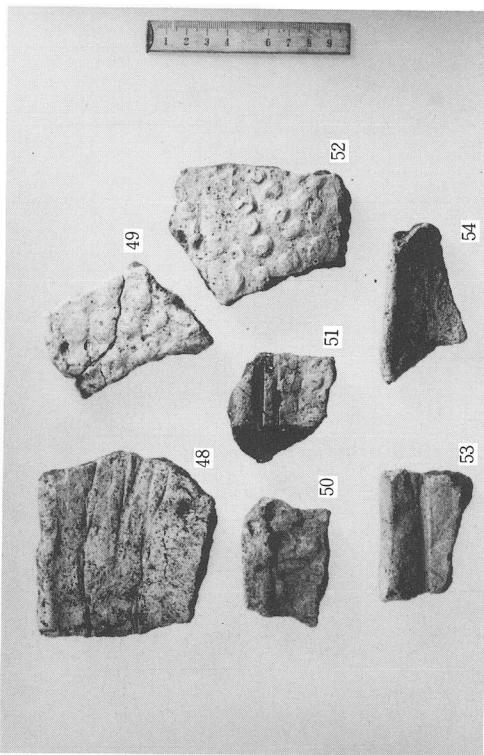
I類2群B種②a



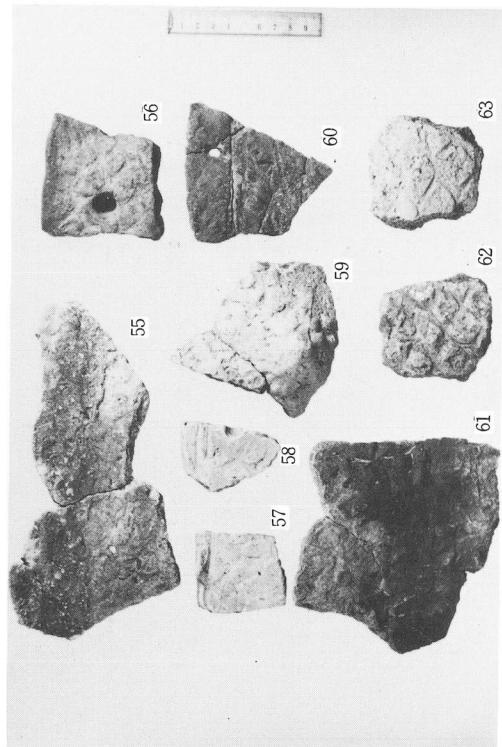
同左内面



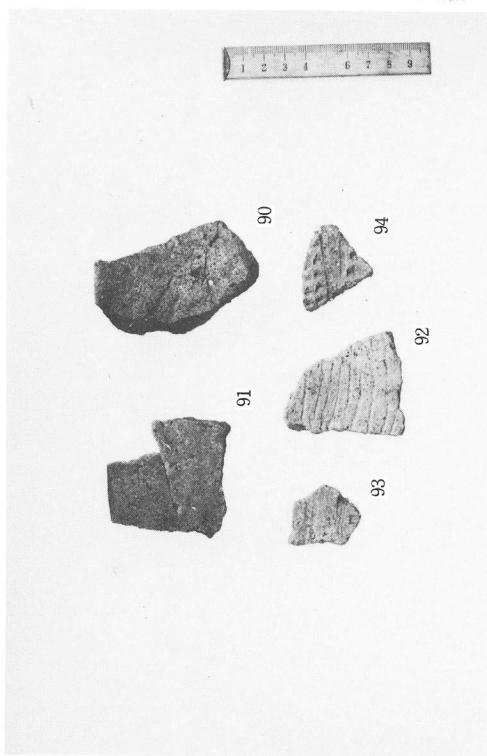
同左内面



I類2群B種②b・③

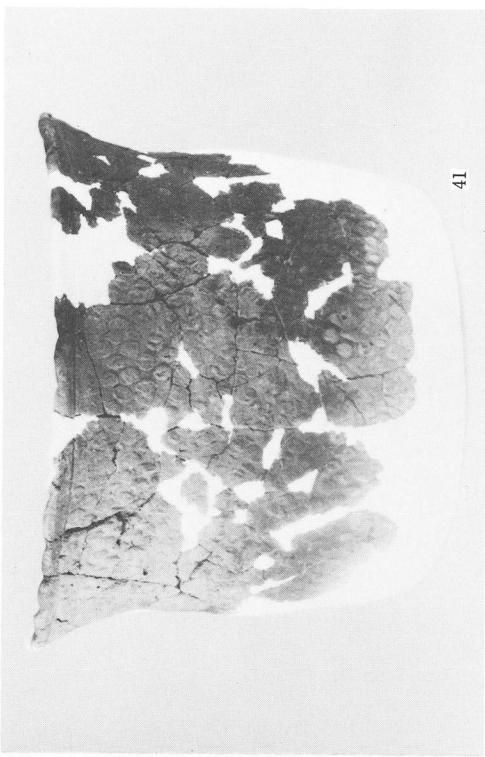


I類2群C種①・②

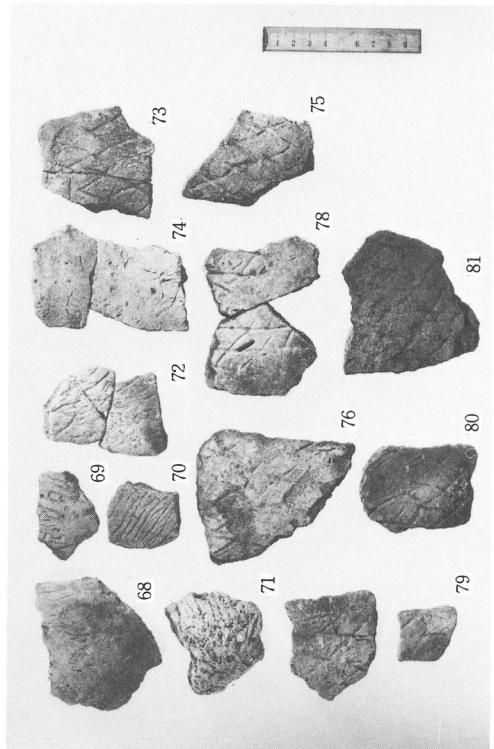


IV類、VI類、VII類

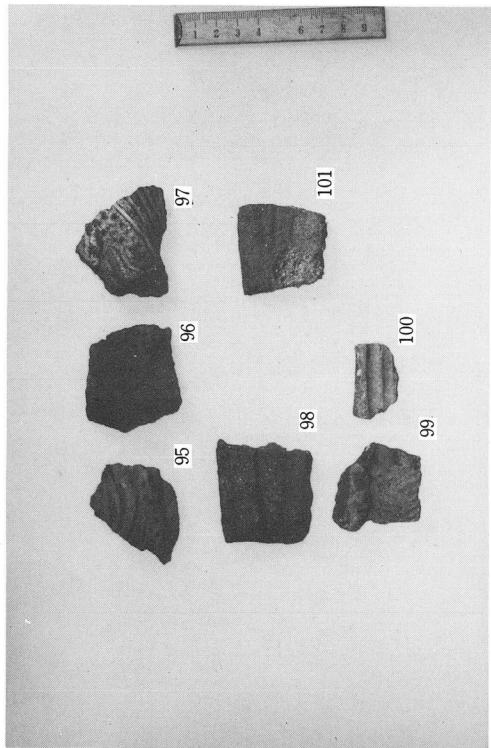
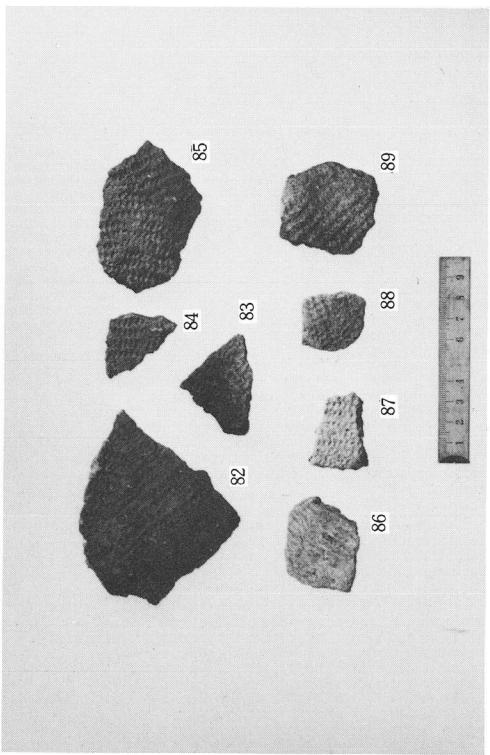
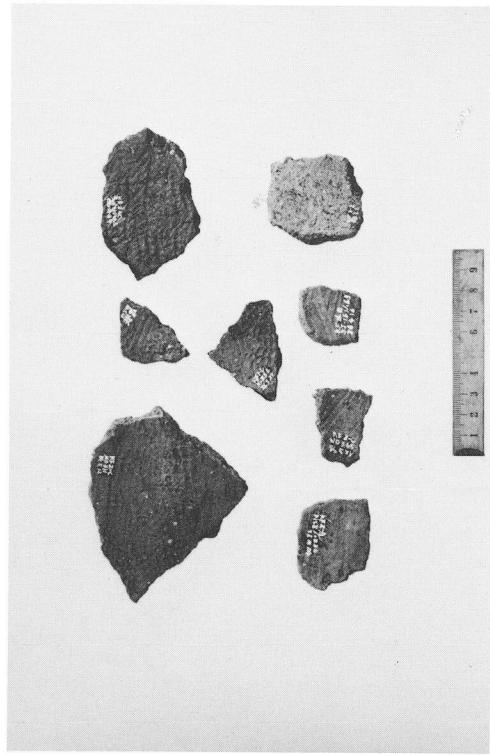
ナデ消し

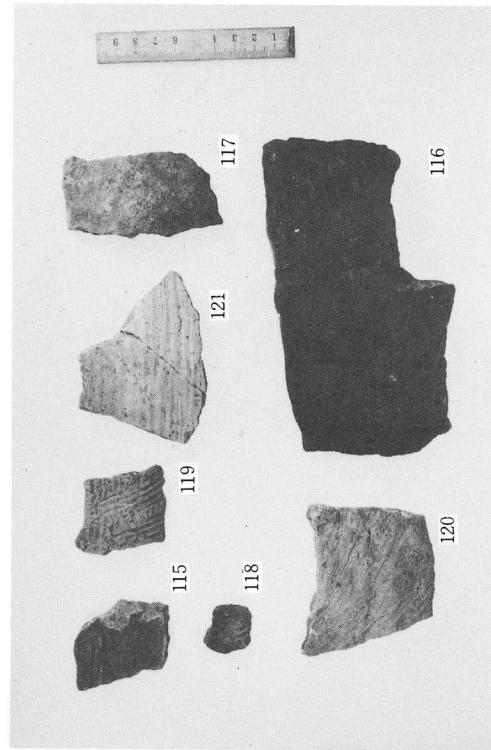


I類2群B種②a

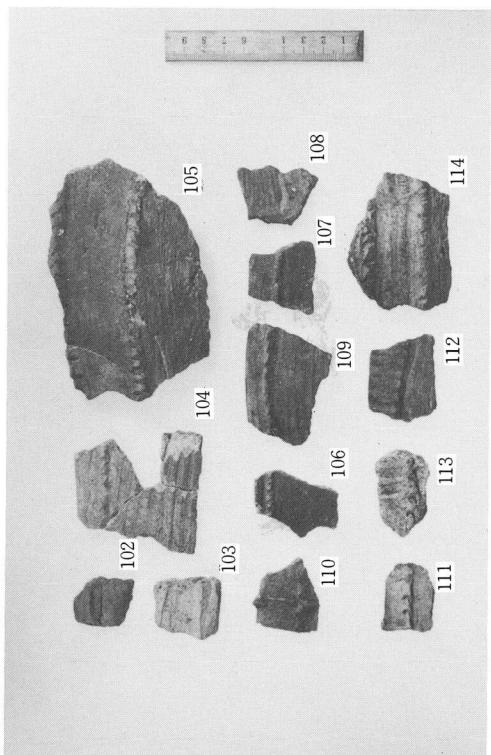


II類A種・B種

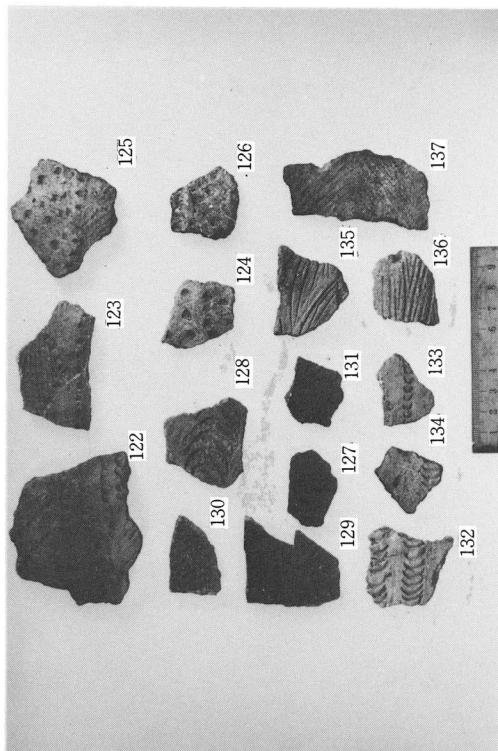




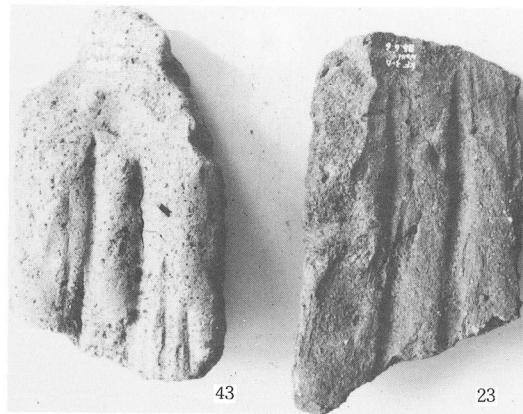
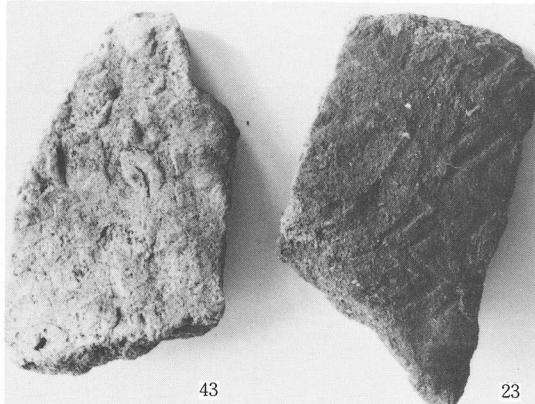
前期の土器 Z I類A種



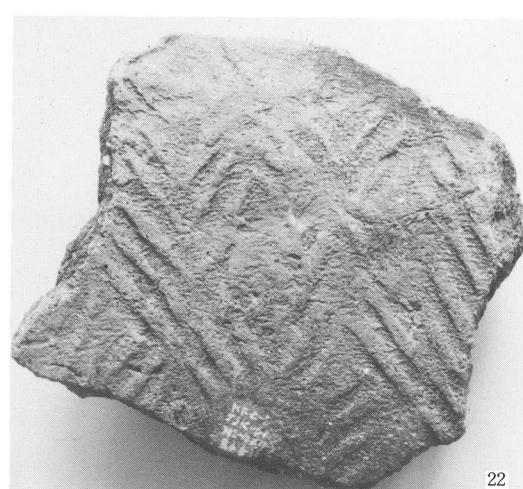
前期の土器 Z I類A種



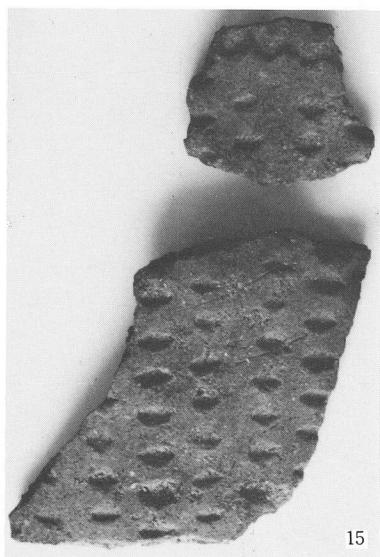
前期の土器 Z I類B種・C種、Z II類A種・B種



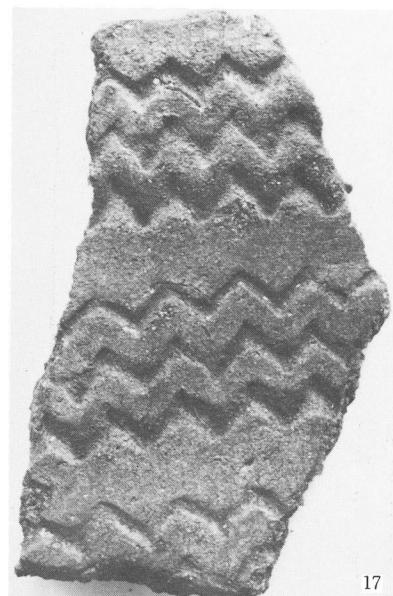
23、43の内面斜行沈線の比較



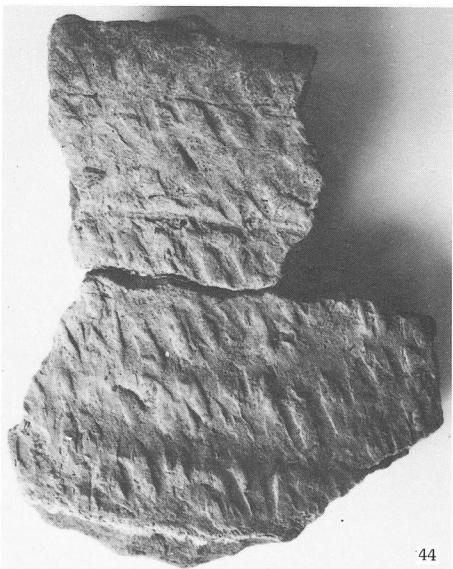
山形文



ネガティブな楕円文



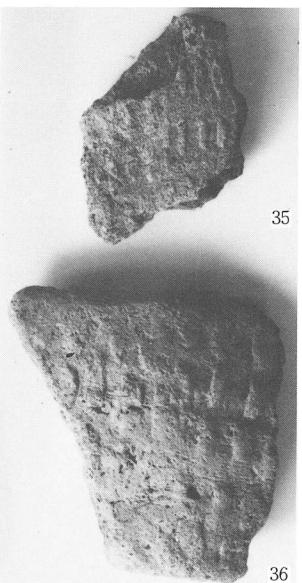
山形文(帯状施文)



44



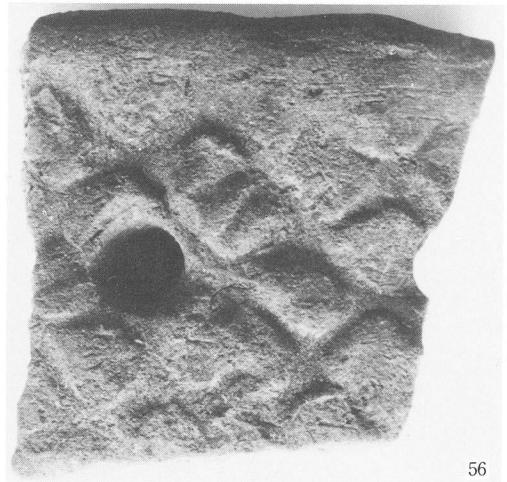
44



35

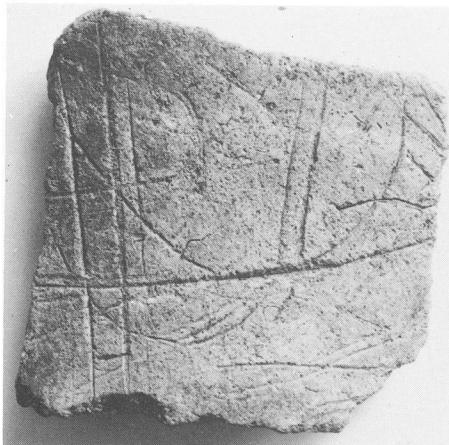


31

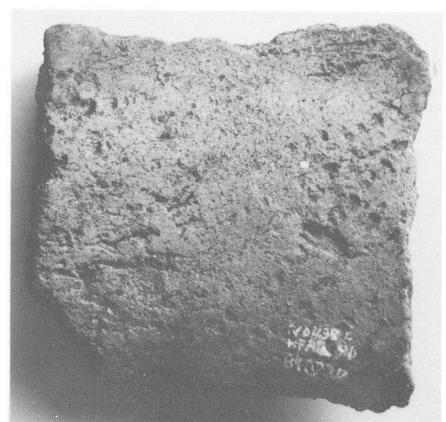


56

橢円文と菱形文



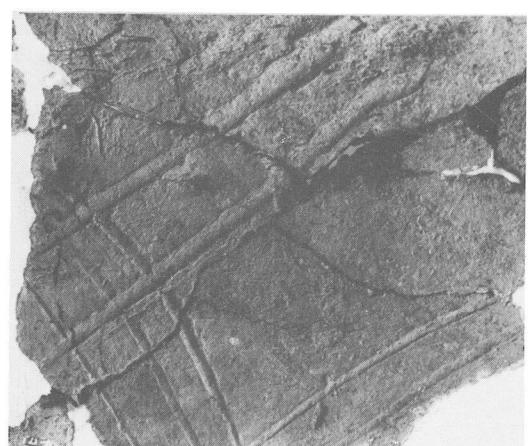
IV 類



同左内面貝殻圧痕



II 類 B 種



IV 類

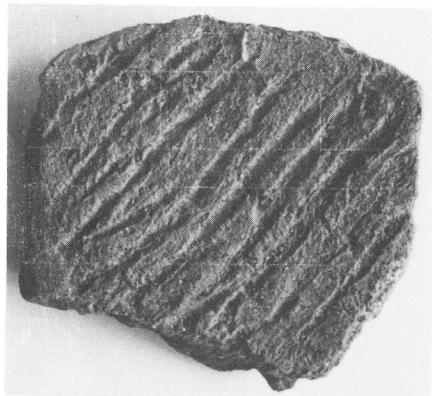


同上内面

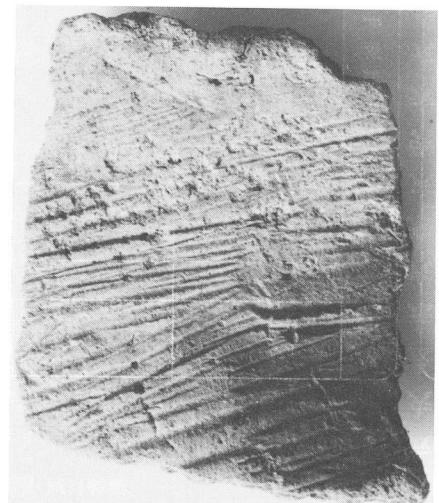
菱形を指向する文様



II類A種

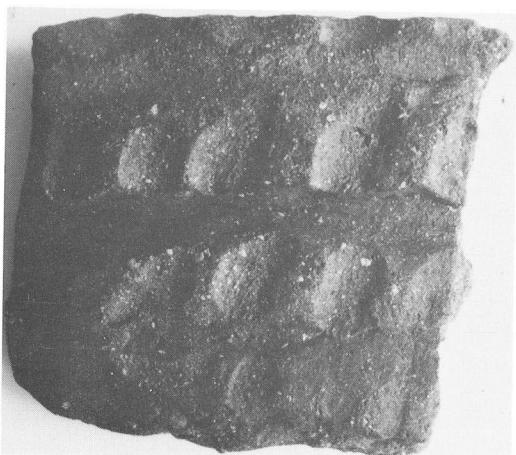


IV類(1)



IV類(2)

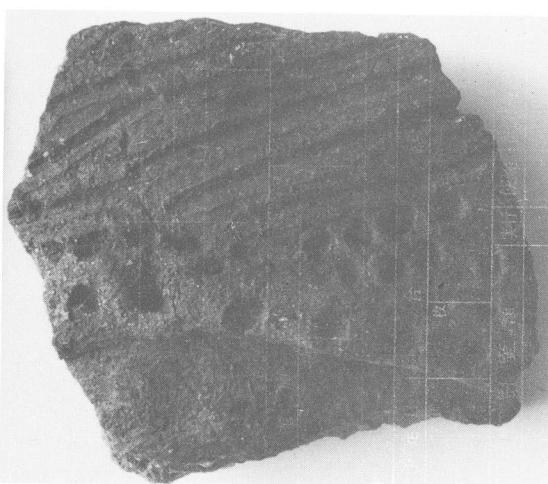
燃糸文の内面横位施文と条線



98

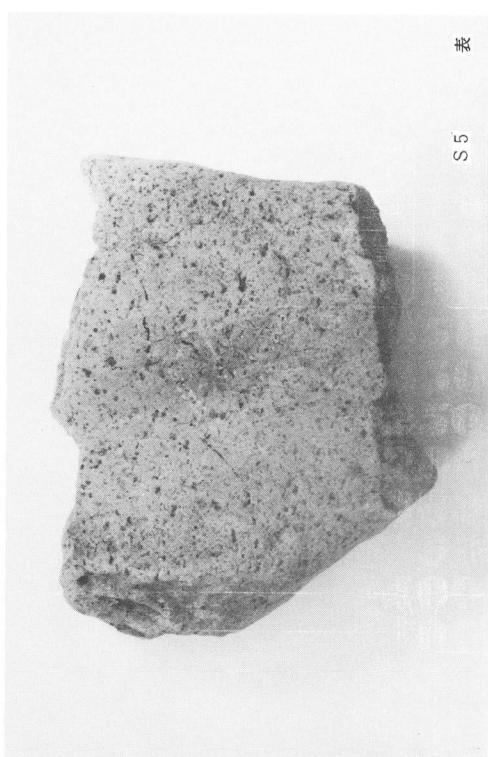
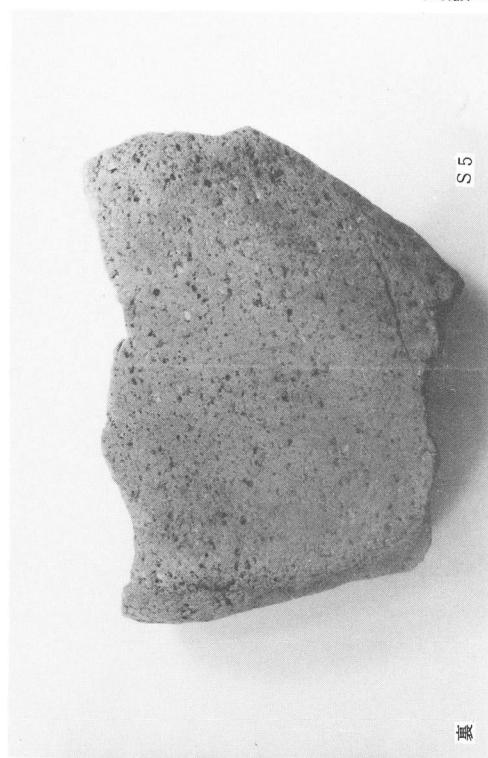


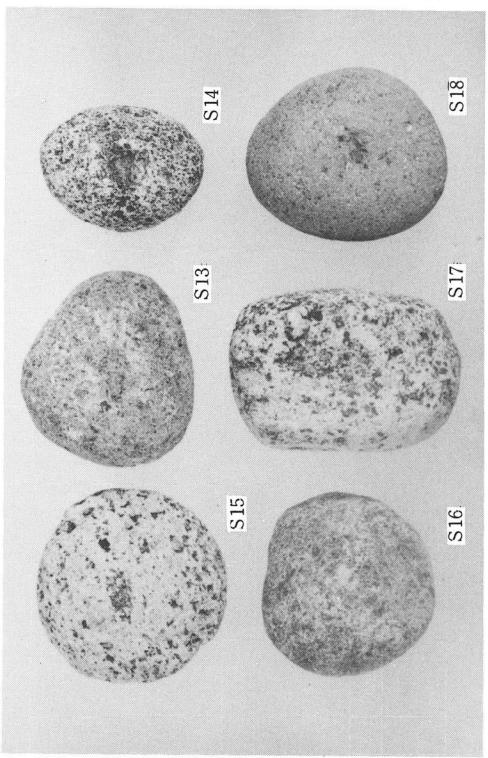
98



96

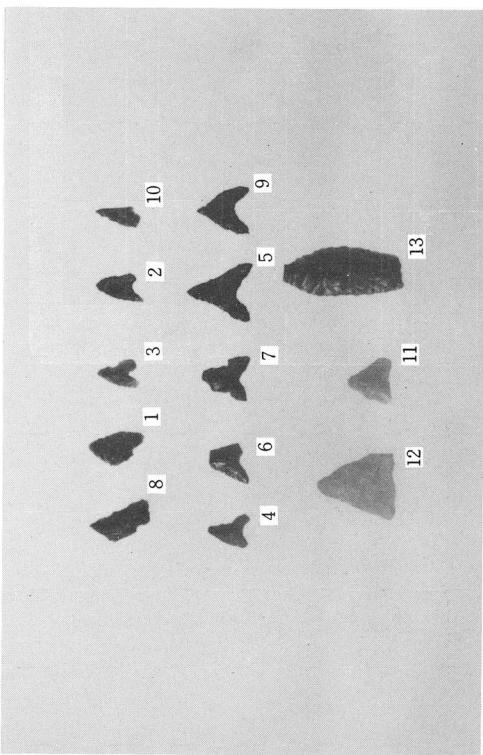
特殊な土器文様拡大



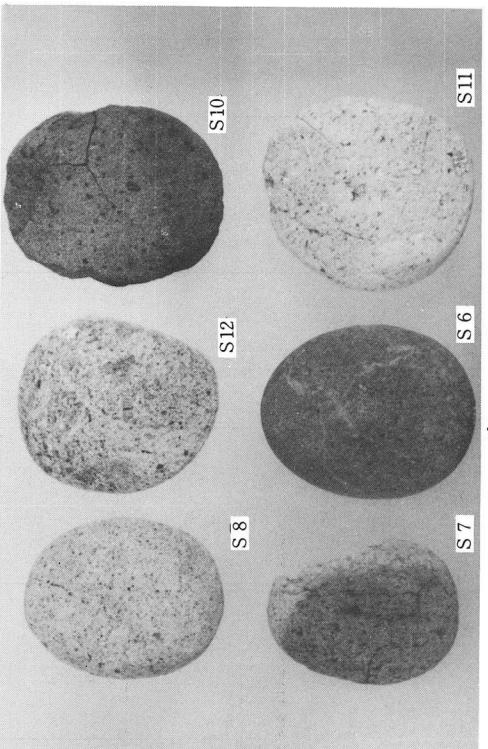


石
磨

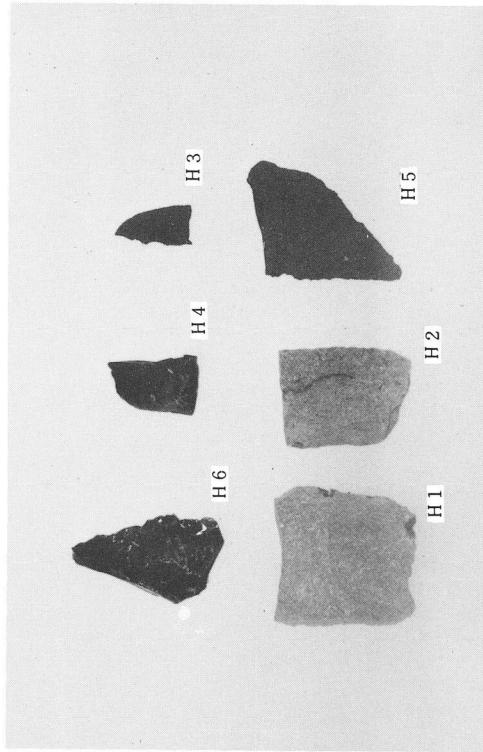
2次加工のある剝片



石
鏽 (Z)

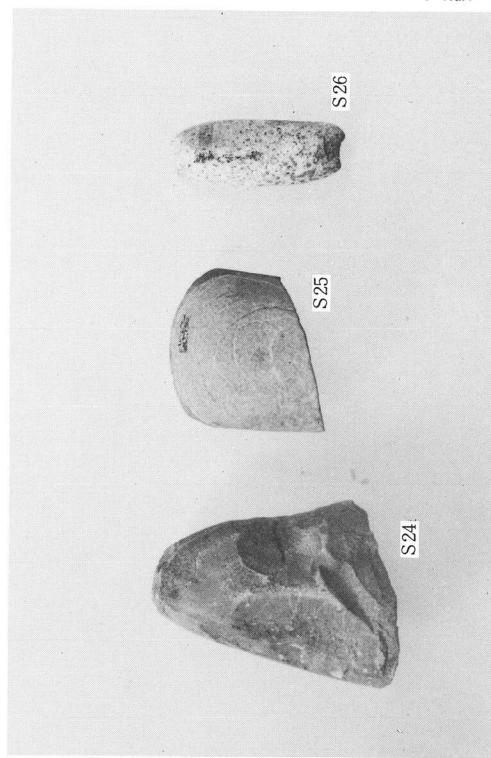


石
磨



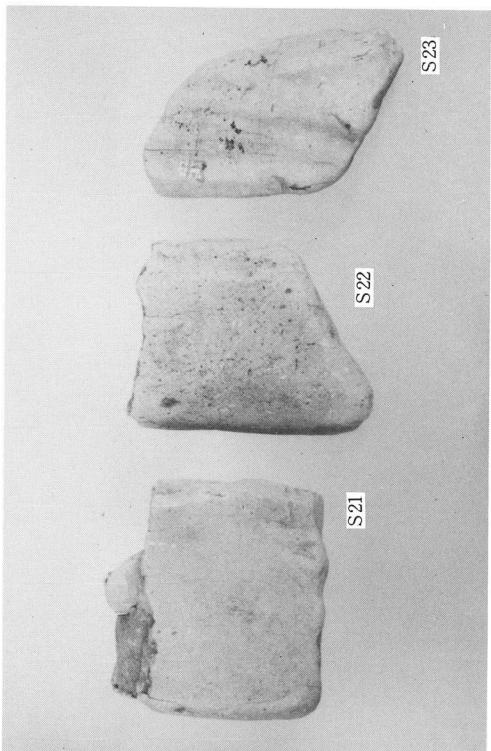
H 3
H 4
H 5
H 1
H 2
H 6

石斧・石錘

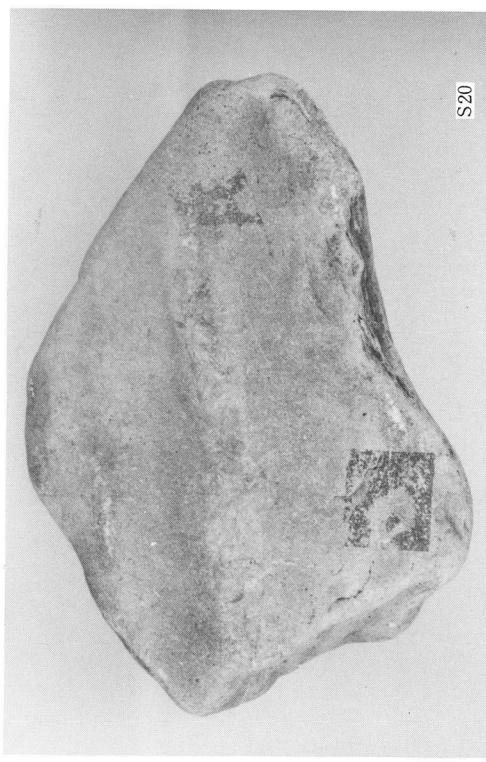


石

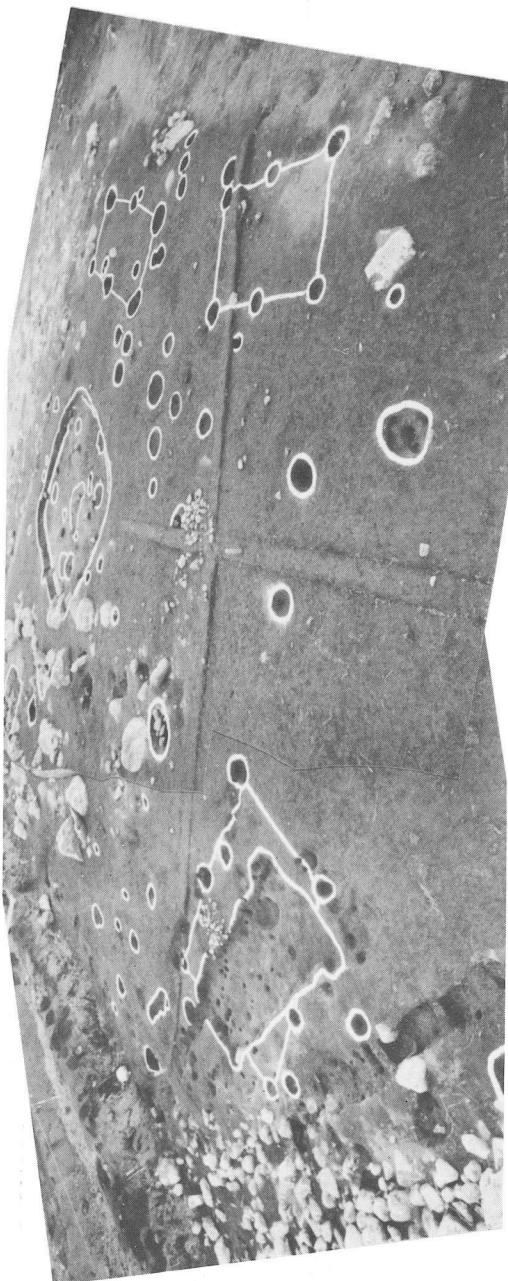
砥石



砥石



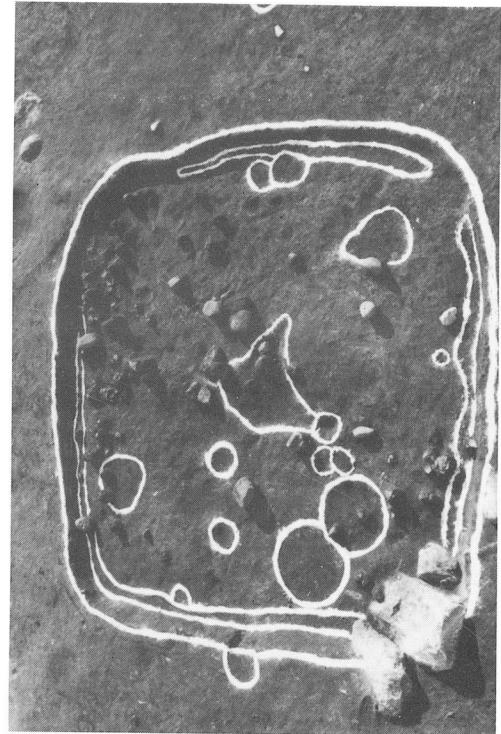
S20



古墳時代遺構全景(北より)



S I-15 遺物出土状況(北より)



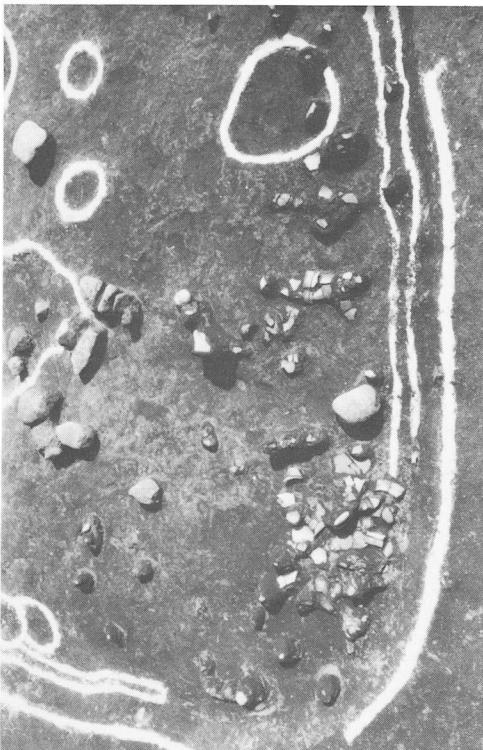
S I-15 遺物出土状況(北より)



S I-15 遺物出土状況(北より)



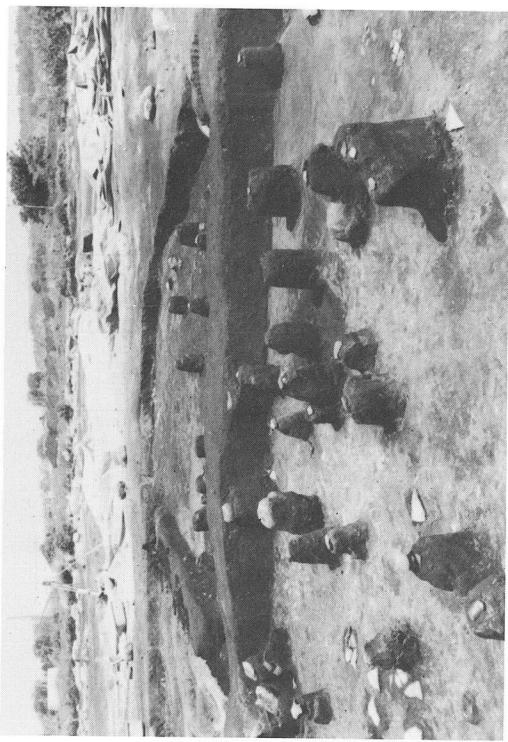
S I-15 挖り下げ



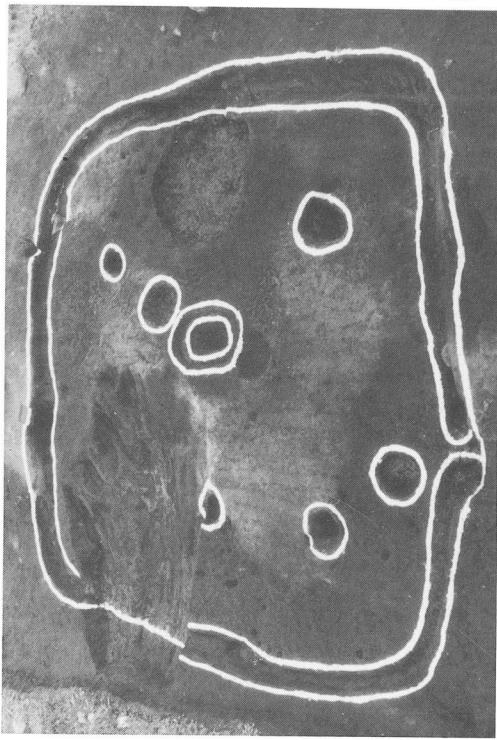
S I-15 遺物出土状況(南より)



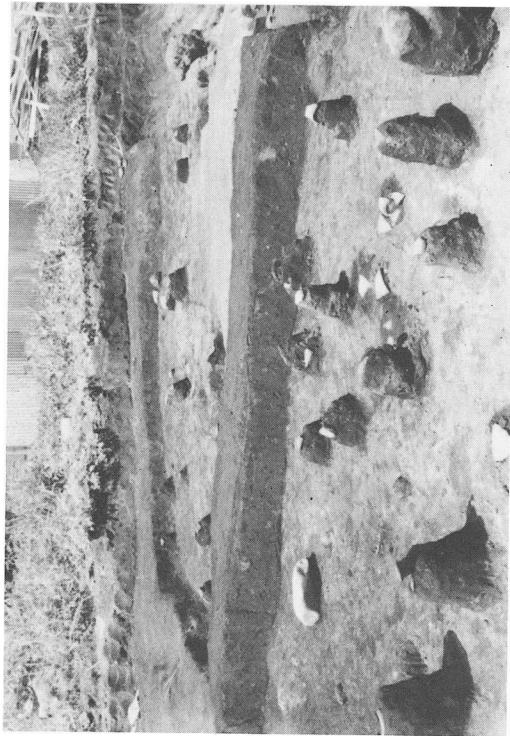
S I-15 Pit 1 土盛状況(東より)



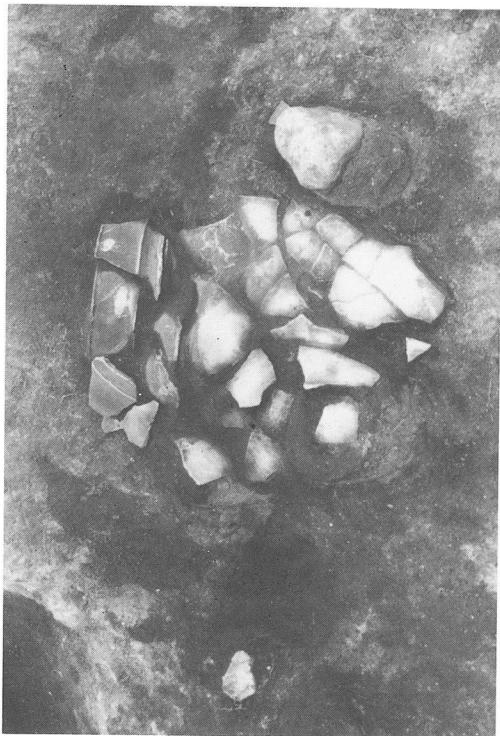
SI-16 遺物出土状況(南より)



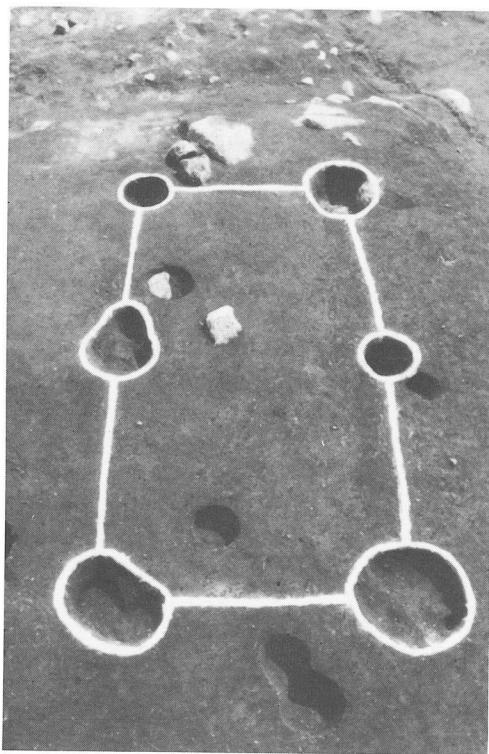
SI-16 掘り上げ(南より)



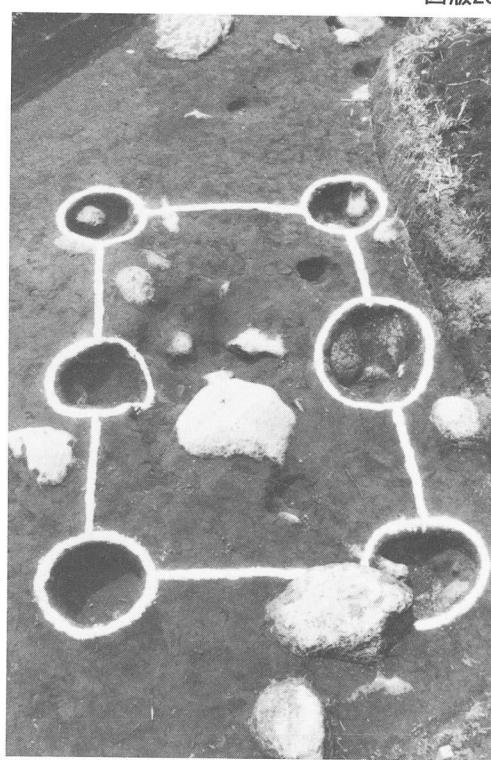
SI-16 遺物出土状況(東より)



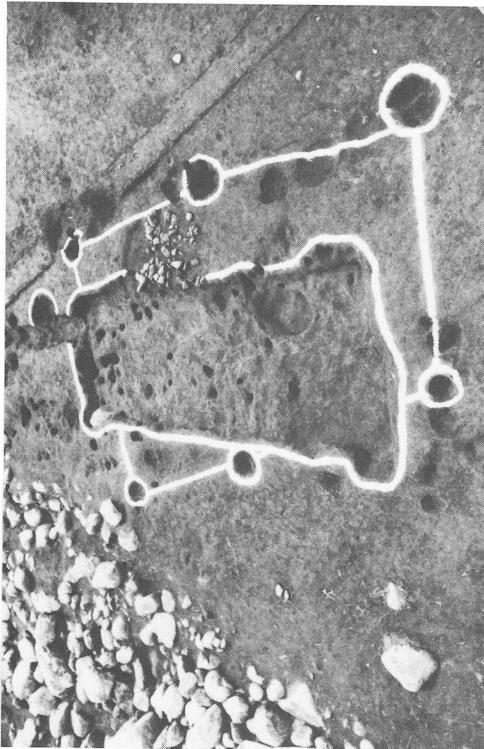
SI-16 遺物出土状況(東より)



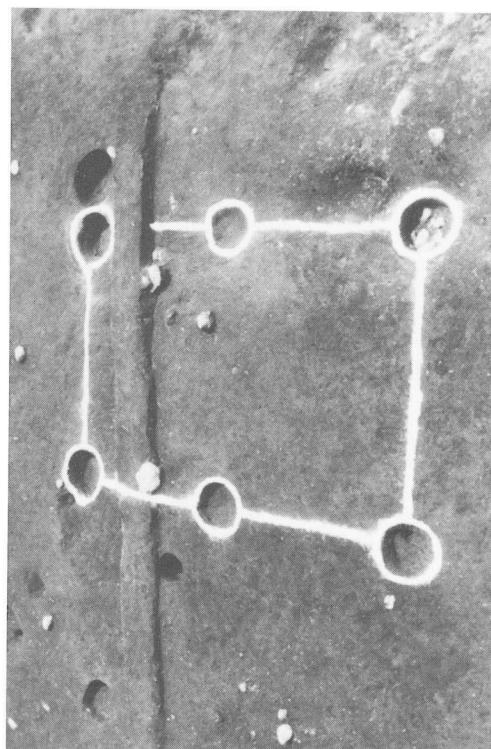
SB-23(南より)



SB-24(東より)



SB-21、SK-23(西より)



SB-22(南より)



SK-24(南より)



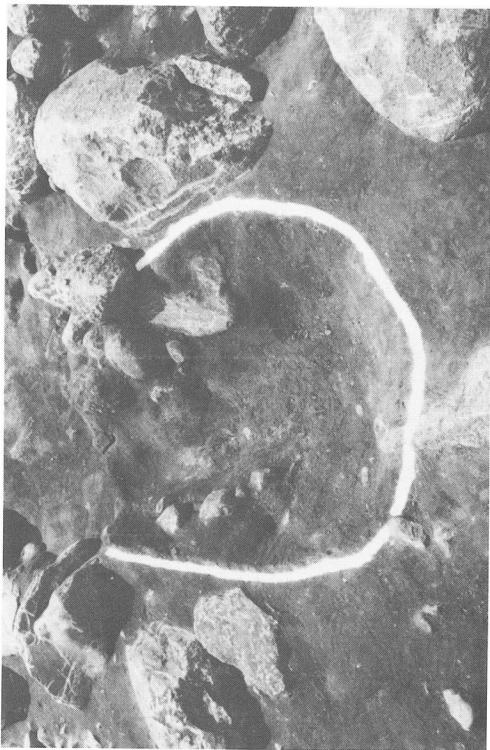
SK-25(北より)



SK-20(南より)



SK-20、22 掘り上げ(南より)



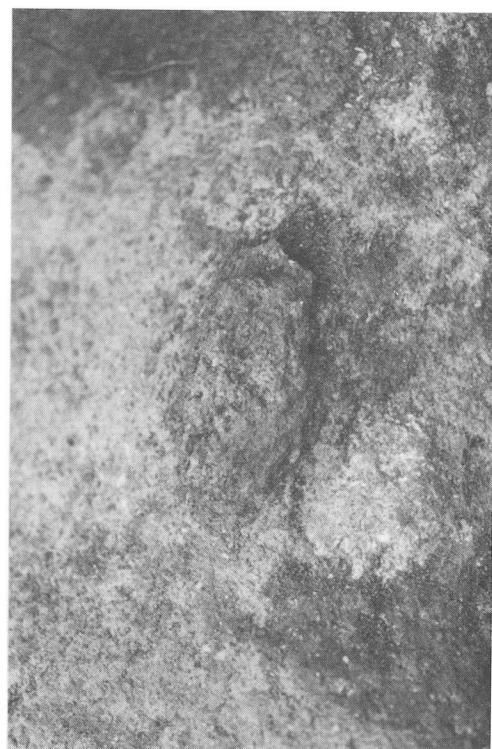
SK-21 挖り上げ(西より)



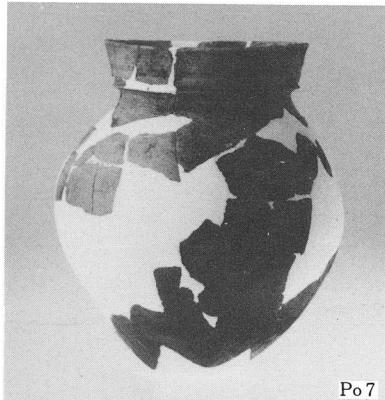
SD-02及びピット群(東より)



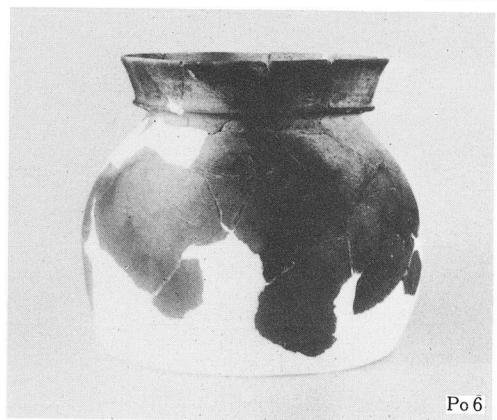
SK-21(西より)



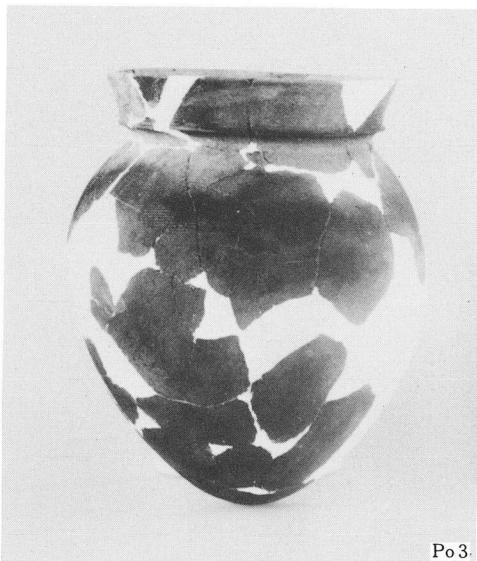
SK-21 出土鉄器(F-3)



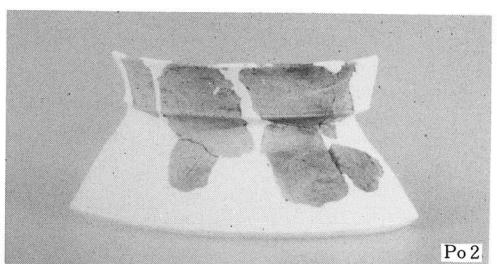
Po 7



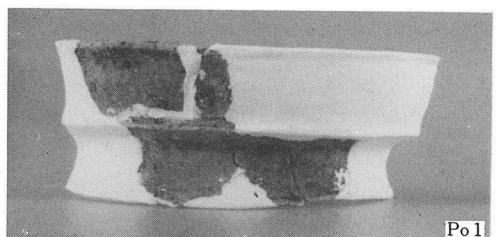
Po 6



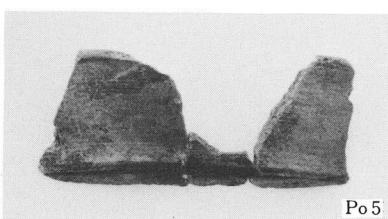
Po 3



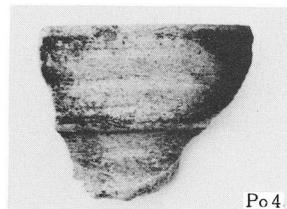
Po 2



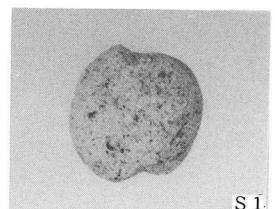
Po 1



Po 5

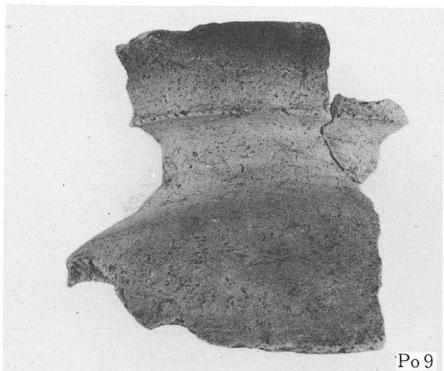


Po 4

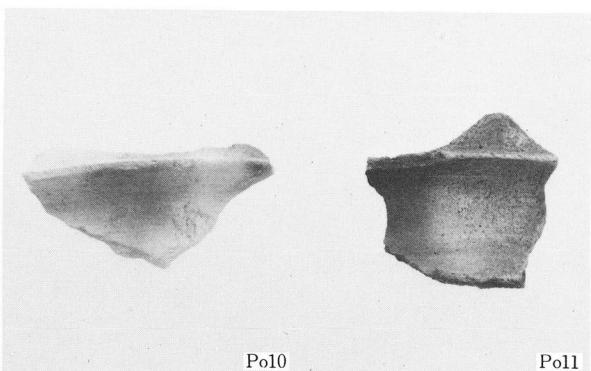


S 1

S I -15 出土遺物

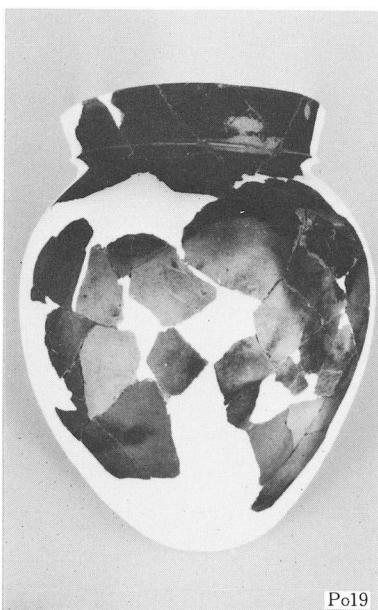


Po 9

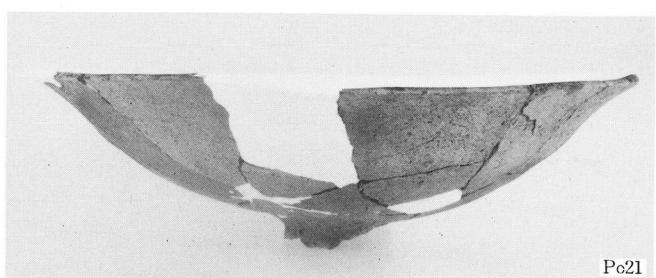


Po 10

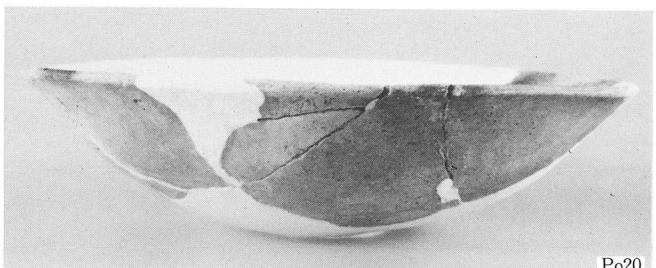
Po 11



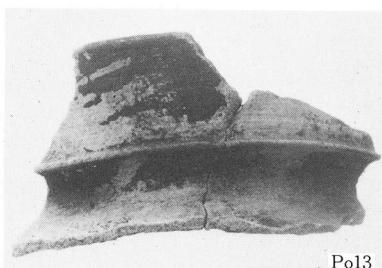
Po 19



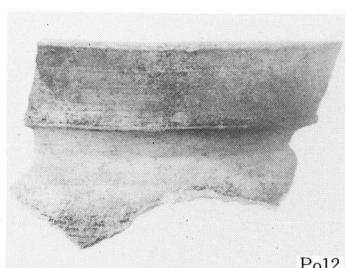
Po 21



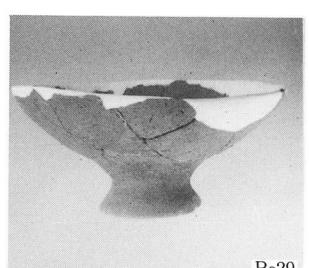
Po 20



Po 13

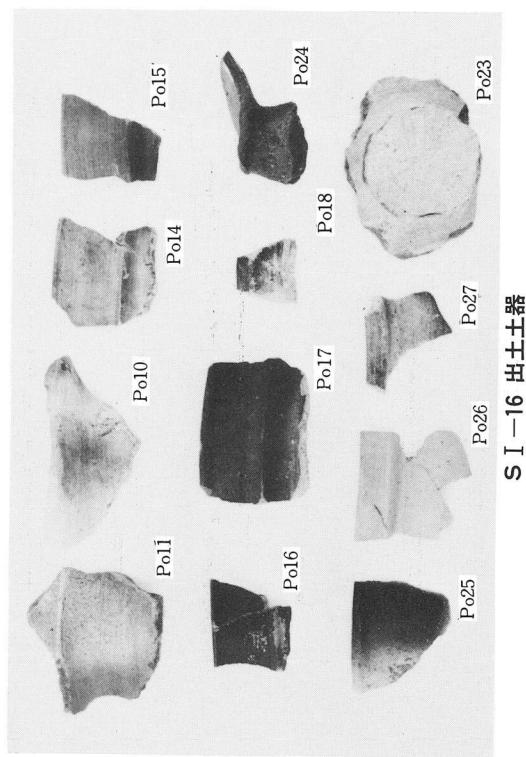


Po 12

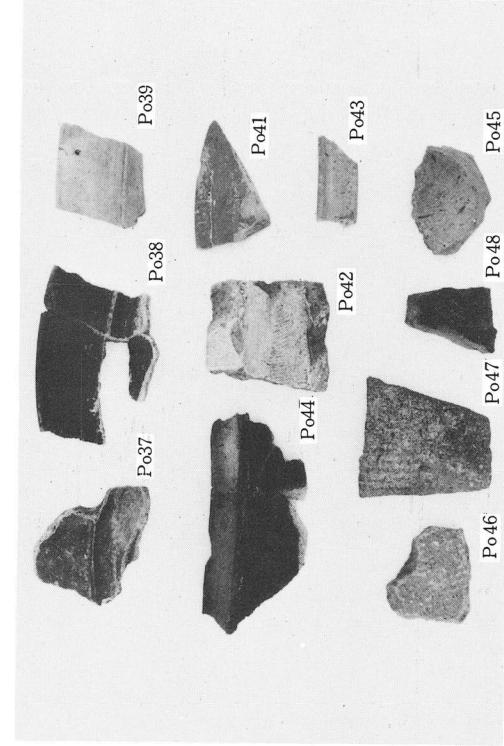


Po 29

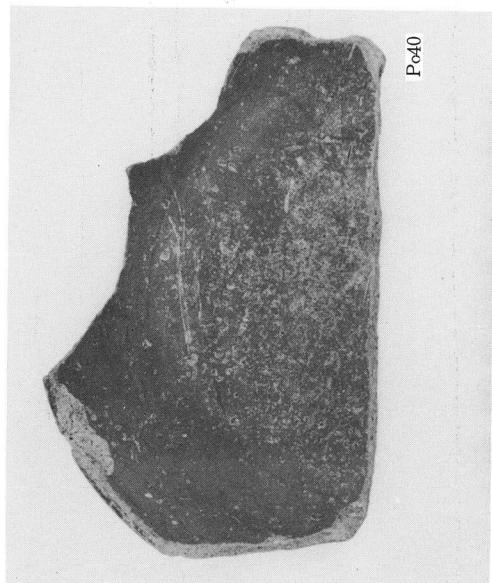
S I -16 出土遺物



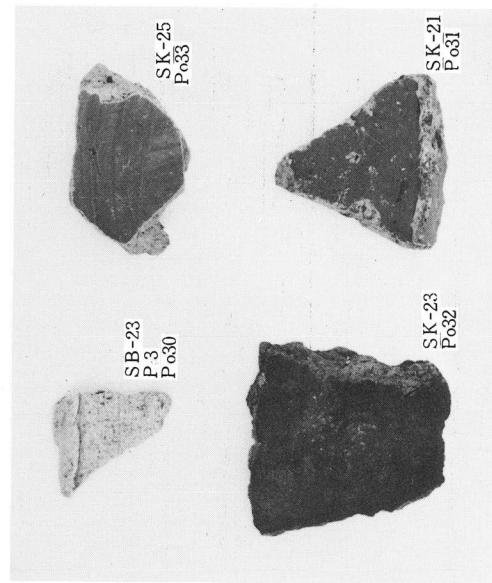
遺構外出土土器



遺構外出土土器



遺構外出土土器



遺構内出土土器

遺構外出土石器

遺構内出土石器

S 2

鳥取県教育文化財団報告書22
中国横断自動車道岡山・米子線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

上 福 万 遺 跡 II

発 行 1986年12月

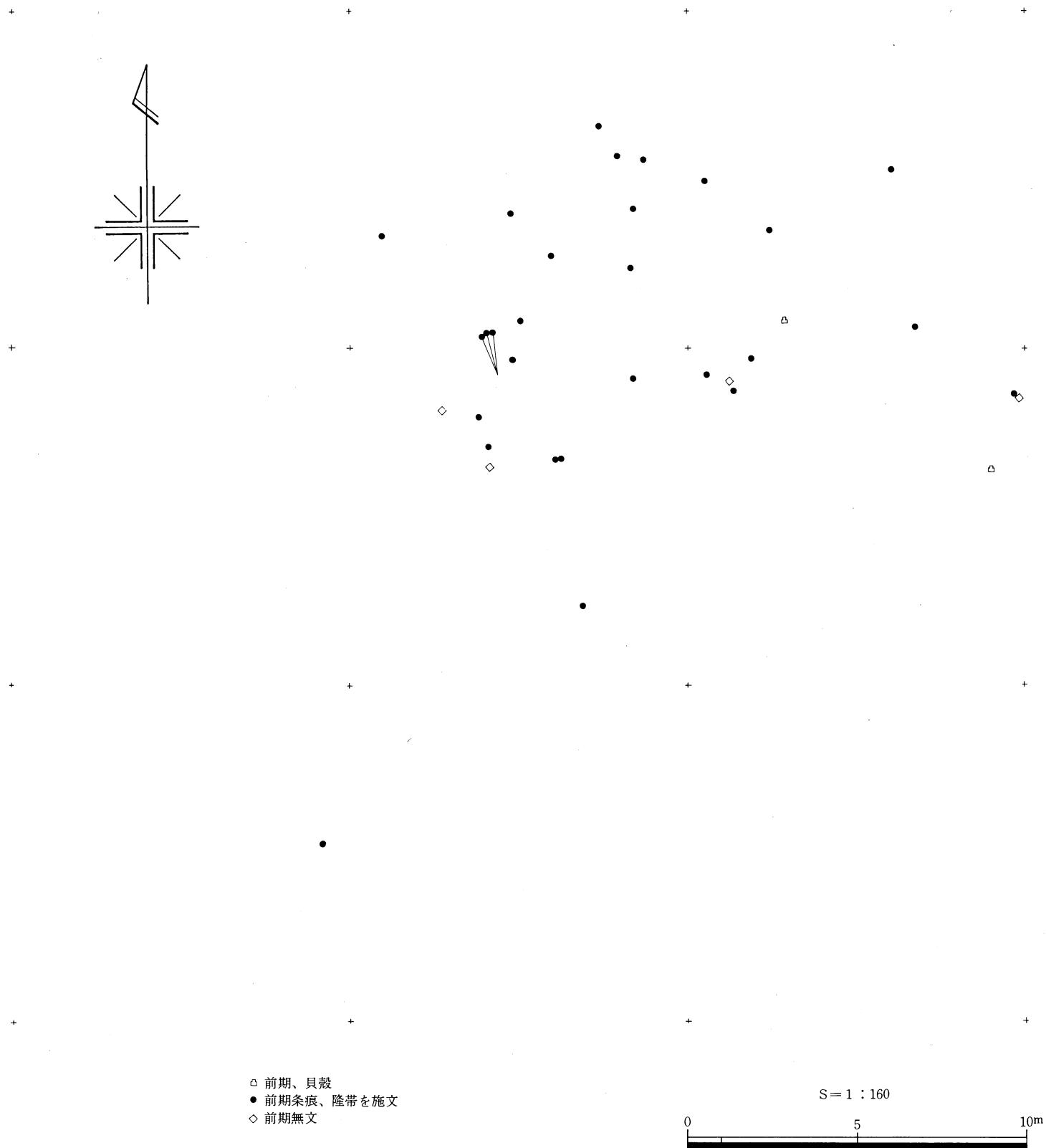
発行者 財団法人鳥取県教育文化財団
〒680 鳥取県社会教育福祉会館内
TEL (0857)27-5252(代表)

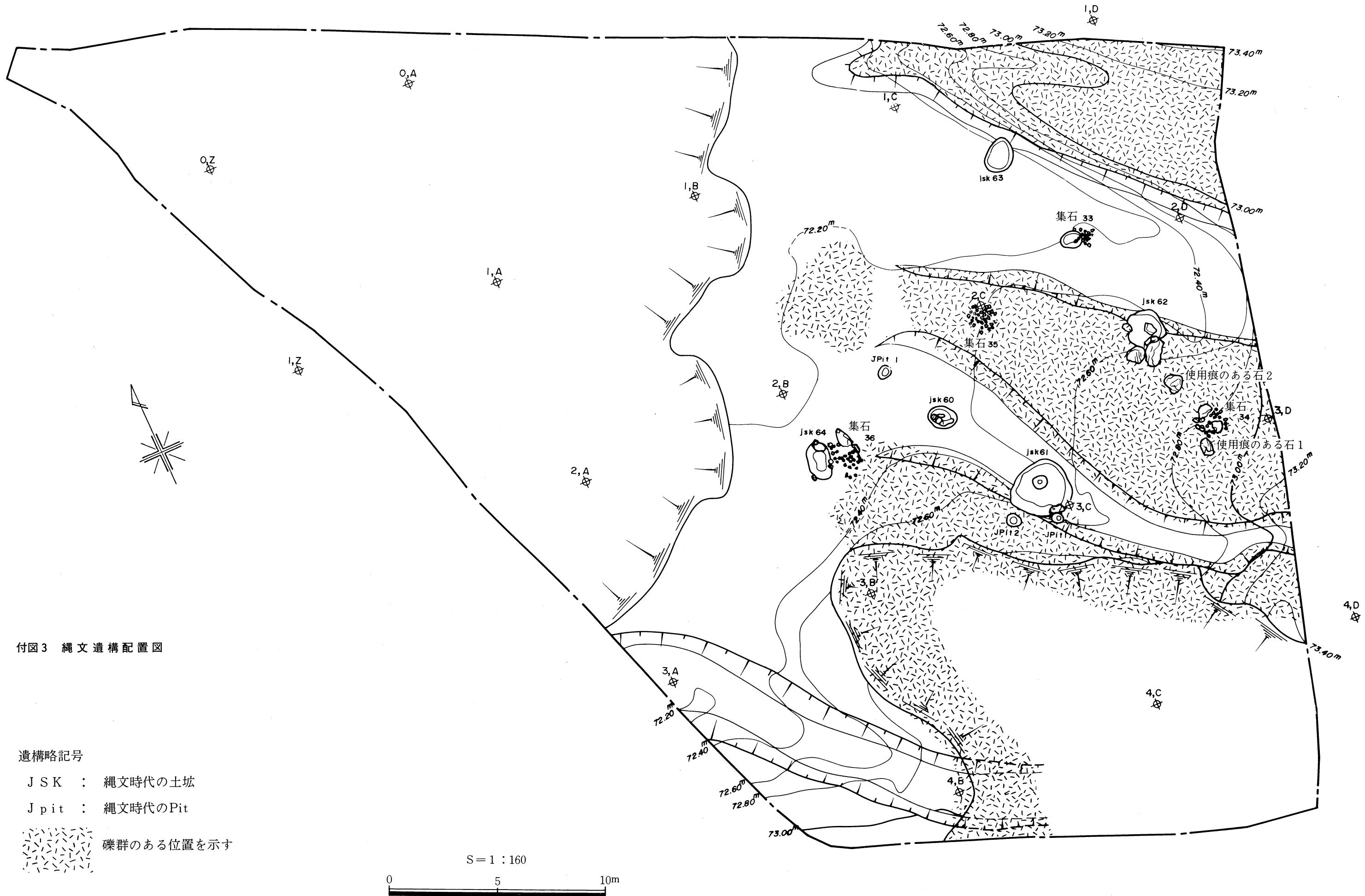
印 刷 日ノ丸印刷株式会社
TEL (0857)22-2248

付図1 DOT-MAP (早期)



付図2 DOT-MAP (前期)







付図4 古墳遺構配置図